
魔法少女リリカルなのは StrikerS 現れた赤龍帝

断罪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは S t r i k e r S 現れた赤龍帝

【Nコード】

N 9 1 6 9 T

【作者名】

断罪

【あらすじ】

赤龍帝と魔導師

まじわる事のなはずの運命が重なりあうとき
運命の扉が開きます。

赤龍帝 あらわれる（前書き）

処女作です。

文才が皆無ですが、頑張っていきたいです。

赤龍帝 あらわれる

男は考えていた。

どうしてこうなってしまったのかを。

周りには、見渡す限り砂と石しかない世界で、
一人の男性に二人の女性が武器を構えていた。

男の容姿は黒髪に短髪、顔は少し目つきは悪いが整っており上の下
ぐらいであり、格好は普通のガウものの白いシャツにジーンズに黒
い靴を履いている。一見、何処にでもいる普通の男性に見えるが、
右腕に赤いまるで龍の鱗のような手甲、左の腕にも白い龍の鱗のよ
うな手甲が装着しており、異様なプレッシャーを放っていた。
それ故に、二人の女性はどうするかをためらっていた。

しかし、そんな二人の事情など男はしらず

（ちくしょー。何がどうなってんだよ。）

と、ぐちっていた。

??? サイト

（ちくしょー。何がどうなってんだよ。）

俺は目の前にいる二人の女性に警戒しつつ、周りを見渡せば、先ほど無謀にも俺に襲いかかってきた、細長い円筒形のロボットの残骸があちこちに転がっていた。

（これは、相手にもならなかったから問題はない。）

しかし、問題なのはそこではなく、むしろ自分の前にいる二人の女性の方であった。

「管理局です。今すぐ両腕の手甲をはずし武装を解除してください。」

なんて、いきなりわけのわからん事を言っている左側にいる女性

「・・・・・・・・」

右側の女性は油断なく俺を見ている。

（さて、どうしたものか）

俺は二人の女性を見ながら考える。

左側にいる女性は腰まである金色の髪を頭の両側に纏めて、いわゆるツインテールにしている。顔は可愛いというよりきれいな系の顔を緊張のためか、やや吊り目にしている。格好はコスプレが好きなのか、まるで、どこかの王子様のような白いマントに黒を基準とした服を着ている。手には機械仕掛けの斧のような武器を構えている。右側にいる女性は、これまた腰まであるピンク色の髪をポニーテールにしており、きれいな顔をしているが、こちらもコスプレ好きなのか、白とピンクの中世の騎士の鎧のようなもの着ており、手にはこ

れまた機械仕掛けの剣のようなものを構えている。

二人共、多少はできる事は見ればわかるが、戦いになれば俺の勝ち
は揺らがないだろう。しかし、なにもわからず戦うのは不味い、な
ら、やることは決まっている。

「わかった。武装を解除する。」

瞬間、両腕の手甲を消え俺の両腕を上にあげた。

「つ……………」

金色の髪的女性は、一瞬で俺の手甲が消えた事に驚いたが、すぐに
気を引き締めて話しかけてかた。

「まず、あなたの名前と年齢を教えてください。」

「藤田 陸^{ふじたりく}19歳だ。あんたは？」

「私は時空管理局執務管フェイト・T・ハラオウンでこ」

「シグナムだ。」

ピンク髪、もといシグナムがフェイトの言葉を遮って答えた。

「・・・・・・・・・・」

俺は、やけに感じの悪い女性だと感じ少し目つきを尖らせると、シグナムも負けじと目を尖らせ、にらみ合っているとフェイトがおろおろしながらまた質問してきた。

「えっとね。陸くんはどうしてここにいるのかな？」

「さあ、俺にもわからん。気がついたらここにいたんだ。」

質問に対して簡潔に答えると、フェイトはやっぱりみたい顔をしていた。

「なんか、知っているのか。知っていー」

「黙れ」

俺の言葉を遮って、答えるシグナムに腹がたち睨み付けると、シグナムも負けじとにらみかえしてきた。
二人が険悪が雰囲気をしていると

「シグナム」

フェイトが少しきつめにシグナムに注意する。

「ごめんなさいね。もう少し質問していいかな。」

フェイトは申し訳ない顔をしながら言うので、俺は軽くなずいた。

「両腕にあった赤と白の手甲あれはなんなのかな？」

「神器《セイクリット・ギア》だけど。正しく呼ぶなら赤龍帝の籠手《ブーステッド・ギア》だ。」

正直に、質問に簡潔に答えるとフェイトは少し驚いた顔をしていた。

「素直に教えてくれるの？」

驚いた顔のフェイトに
俺は後ろ髪をかき、ため息つきながらいった。

「ああ、だが、そちらの質問に答えるかわりに、こちらの質問にも答えてもらうがな。」

そう答えると、フェイトはすごく可愛い顔をしていた。

「うん。それで一体何が聞きたいのかな。」

ニコニコ顔のフェイトに俺は真剣な顔をして聞いた。

「その・・・なんだ、時空管理局ってなに。」

その言葉を聞いた瞬間、フェイトはあらためて俺をみた。
まるで、その名前を知っている事が当たり前かのように

「やっぱり、知らない。」

「悪いが、聞いた事のない名前だ。」

俺は、もの覚えの悪い頭を振り絞って聞いた事があるか思い出そうとするが、やはり聞いた事はない。

「時空管理局っていうのはー」

それから、フェイトによる管理局の説明が始まったが、すべてを理解することはできなかった。

少し時間が過ぎ俺とフェイトは、お互いに幾つかの質問に答えると、この二人が悪い人ではないと思い、俺は警戒心は必要ないと気を緩めかけた時、フェイトの

「えっとね。いまから時空管理局にいくけど、一緒に来てくれるかな。？」

その言葉にさっきから自分の周りで感じていた”力”が急激に強くなり

俺は、警戒しながら周りを見た。

「・・・・・・・・」

「えっとね。陸くんみたいな次元漂流者はね、管理局で保護して元の世界に返す事も私たちの仕事なんだよ。」

「この”力”まさか。」

「だ、大丈夫だよ。なにも恐くないし、怖い思いも絶対させないから。」

フェイトは話しが噛み合っていない事にきずいていないのか、明るい声で言っていたが、俺は警戒心を下げる事はなく、二人から三メートルは前に進み両腕に赤龍帝の籠手を装着し

「お客さんだ、注意しろ」

赤龍帝 あらわれる（後書き）

まだプロログです。

白龍皇（前書き）

まだプロローグです。

白龍皇

シグナムサイド

「お客さんだ。注意しろ」

陸が自分たちに危機を促すと、同時に

バキバキバキイ！

嫌な音をだしながら、自分たちの目の前の空間が、目に見えない”何かに”無理矢理押され、まるで悲鳴をあげているかのようにならずつ割れていき、空間の裂け目が一秒ごと少しずつ大きくなる空間の裂け目に比例して、中から、さっきまで感じなかった魔力が辺り一面に流れこんできた。

「なんて魔力！」

「テストロッサ、気をつけろ。この魔力、間違いなくSSクラスだぞ。」

「うん。」

シグナムはテストロッサと同様に注意しなくてはならなかった。ただ流れこんでくる魔力だけで、このクラス、戦闘になったらまだ上がるかもしれん。ゆえに

「バルディツシュ！」

〈Load Cartridge〉

「レヴァンティン！」

〈Explosion〉

自分たちの武器から、空の弾丸が落ちた、するとテストロッサの武器は斧から大鎌の形”ハーケンフォーム”に変わり、自分の武器はレヴァンティンに灼熱の炎をまとい、魔力を増加させ陸が言う”お客さん”に備えた。

しかし、陸は――

「お前ら、フェイトに、シグナムっていったけ？」

「そうだけど。」

「何かようか？」

「邪魔だ。怪我しない内にこの場所からできるだけ離れろ。今からくる奴は桁違いのパワーを持っている。お前たちがいても無駄だ。」

「・・・・・・えっ？」

「なにっ！」

一瞬、自分は何をいわれたのか理解できずにいたまさか、”邪魔だから離れろ”など、納得できるはずもない。テストロッサも納得できずにの頬をふらませ、陸に文句を言っている。

しかし、その時はまだ、私とテストロッサはきずいていなかった。どうして彼が自分たちに”逃げろ”と”危ない”と、遠回しに教えてくれていた事に

これから現れる白い龍の皇帝の強さを

数分後、私たちは身をもっておもいしらされた。

シグナムサイド終了

陸サイド

「くそっ！なにがどうなっていやがる。この魔力と波動は、間違いなく白龍皇のもの。っていうか、なんで奴迄ここにいるんだ？」

疑問に思った事を考え始める前に、思考を停止させる、そんな些細な事を考えるより今日の前にある問題をどうするかと考えるなくてはならない、さりげなく後ろにいるフェイトとシグナムの方向に目をむける。

「・・・・・・・・」

二人共、戦闘準備まで完了し、これから現れる敵に対し警戒している自分達に”邪魔だ”なんて、到底納得できないという顔をしている。

「フェイト、シグナムなにをやっている。邪魔だからさっさーーー！！」

「久しぶりだね。我がライバル赤龍帝、会えて嬉しいよ。」

俺は、聞き覚えのある声が空間の裂け目から聞こえ、そのセリフに舌打ちした。

「チッ！もう遅いか。」

俺は、もう無駄だと悟り、後ろの二人から前の空間の裂け目に目をむけた。

陸サイド終了

フェイトサイド

ぞっ・・・・・・・・

全身を駆け巡る言いしれない緊張感で恐怖――

圧倒的な存在感と絶望的なまでにかんじる力量差を振り撒きながら、それは、ゆっくりと空間の裂け目から出てきた。

私は、後悔していた。

どうして、陸くんがいった通りに、この場所から逃げなかったのか。どうして、少しでも戦えるなど思ってしまったのか？

私の、眼前に白が映った。

この、砂と石しかない灰色の世界で、一切の曇りも陰りも見せない

白きもの。

地面すれすれの高度で、その場に浮かんでいる。白い全身鎧。《プレートアーマー》

体の各所には、宝玉らしきものが埋め込まれ、顔まで鎧に包まれていた。その人の表情はわからない。

背中から生える八枚の光の翼は、こうごうしいまでに輝きを発している。

ガチガチガチガチッ

私は、この敵をただ見ただけでわかってしまった。この敵には絶対に勝てないと。

そう思ってしまったら、私の心は折れそうになってしまった。手や足だけでなく身体中が自分の体とは思えないほど震えて、体は立っていられず、恐怖で今にも腰を地面に落としてしまうのを気力で我慢するのが精一杯でした。

そして、恐怖と同時に私は神秘的な輝きを放つ白き姿に心を魅了されていました。横にいるシグナムも、私と同じギリギリの状態で、膝を落としレヴァンティンを地にさしてながら白い輝きの魅了されていました。

私たちは、心身を一瞬で射貫かれた。

しかし、こんな状況で陸くんはその白い鎧を目にして、舌打ちした。

「ハァ〜〜。なんでおまえがいきてんだよ。あの時きっちり殺したはずだぜ。白龍皇」

「ため息をつかないでくれよ我がライバル、僕も気がついた時にはこの世界にいたんだ。わかるはずないだろ赤龍帝」

なんて、まるで何事もないかのように話す陸くんはフェイトはビツクリした顔をしているとー

敵の姿が忽然と消え

ドゴン！！！！！！

いきなり凄惨な音がして、私は恐怖のあまり三歩ほどさがると、とうとう腰を抜かし地面倒れこんでしまい、なにが起きたのかを確かめるために目を上にむけると、さっきまで自分の顔があったところに、敵の拳がありそれを陸くんが体ごと私の前に打ち、拳ごとわずかにみにして停めていました。

（なにも見えなかった。）

スピードには昔から自信があった私は、かなりショックを受けた。
そして思いしった、陸くんが今の攻撃を停めてくれていなかったら、
私は死んでいたのだと。

フェイトサイド終了

なのはサイド

「ヴィータちゃん急ぎ、この魔力・・・・・・・・フェイトちゃんが
心配だよ」

「わーってるよなのは、私もシグナムの事も気になるしな。」

空を高速で飛行する二つの人物――

管理局のエースオブエース高町なのはと守護騎士たるヴィータ。

二人は焦っていた。

ここ一年ほど前から増え始めた次元漂流者。

本来なら次元漂流者は1年に一人いるかないか位である。

だが、ここ一年ほどは百回を超える次元震が発生し、次元漂流者も発見されたが、そのほとんどが何者かによって管理局の役員がくる前に殺されているか、つれさらわれたかのどちらかである。

今日も次元震が発生し次元漂流者の保護に向かった幼なじみであるフェイトちゃんと守護騎士であるシグナムさん、あの二人ならなのはもヴィータさして心配していなかった。

とてつもない魔力をかんじるまでは。

「フェイトちゃん。フェイトちゃん。どうしたのなにかあったの返事してよフェイトちゃん。」

「シグナムどうしたんだよ。聞こえてんだろ返事しろよ。」

急に連絡が取れなくなったフェイト達に、なのはとヴィータがなん

ども通信したが、フェイト達から返事はなく。
その事がさらに二人を焦らせた。

「フェイトちゃん。待っててね。いま助けにいくから。」

「シグナム待ってろよ今助けにいくからな。」

二人はさらに速度をあげ目的地に向かった。
目的地まであと数分。必ず二人とも助ける事を胸に誓い。

だが、なのはとヴィータは知るよしもない。二人がくる頃には、
全
てが終わっているという事に。

なのはサイド終了

陸サイド

フェイトを庇い白龍皇の攻撃を止めた陸は焦っていた。

「どういふつもりだ。俺がとめなかったらフェイトは死んでたぞ。おまえは俺以外に興味ないじゃなかったのかよ。」

「うん。この世界の人間は弱すぎる。殺す価値さえない。だが、その女は博士から殺害もしくは誘拐対象になっているから手っ取り早く殺そうかと思って。」

「博士だあゝゝゝ、そいつかテメエをこの世界で助けた張本人は。」

「そうだよ。ほとんど死んでいた僕を助けてくれた命の恩人さ、本当に感謝しているよ。」

俺は赤龍帝の籠手で白龍皇の拳を握り潰すいきよいで力をこめるが、ビクともしない。

（チッ！いくら俺でも禁手《バランス ブレイカー》状態の白龍皇に禁手なしじゃ無理か。）

少しずつ押された始めた拳に、陸は僅かに焦っていた。

禁手には成れるが一瞬、ほんの刹那ではあるが時間がほしく、後ろには腰を抜かし今にも泣き出しそうなフェイトが心配そうな顔でこちらを見ている。とても動ける状態ではない以上避ける事はできない。

シグナムの方を見るが、とても助けにはこれそうにない。

（どうする、どうしたらいい。）

俺が迷っていると、白龍皇は急に力を抜き間合いをとった。

「タイムオーバーらしい。またね。赤龍帝」

白龍皇はきた時と同じく空間に裂け目を作り帰ろうとした。

「なっ……！！！待ちやー」

ギュッ

白龍皇を逃がさず追撃をかけようとした俺に、
フェイトは泣き出しそうな顔で服の袖を、
絶対に離さないと言わんばかりに握ってきた。

「フ、フェイトおまえ何やってんだ離せ。」

「だめ。だめ。いっちゃだめっ！！！」

ほとんど泣きながら服の袖を離さないフェイトに困っていると

「またね。赤龍帝……ああ、いいわすれてた。赤龍帝、僕と君以外の神器保有者は次元漂流者の中に数人いたんだ。この意味わかるよね。」

「なんだと。」

「その人達も敵だから、気をつけて。」

そんな間抜けたセリフと一緒に、空間の裂け目がとじ白龍皇は消えた。

同時にフェイトとシグナムは安心したのか、声をころして本格的に泣き始めた。

「こわかった、こわかったよ……」。

もうなのはやエリオ、キャロみんなに会えないと思って」

「つう！……」

俺はいまだに服の袖を離さないフェイトを器用に持ち上げると、シグナムの方にいきフェイトを下ろすと、二人の頭を優しく優しく撫でた。

二人は一瞬、ビクツとしたが嫌がらなく。受け入れた。

「よく頑張ったなフェイト。そしてシグナム、白龍皇と初めて会って命を失わずにいるなんて大したもんだよ。だから泣くなよ。もっと誇っていいんだぞ」

俺はそう言いながら、

二人が泣き止むまで頭を撫で続けた。

それから一分後、空からきた二人の魔導師に現場を見られた陸は、フェイトとシグナムが泣きやみ誤解が解けるまで逃げつついていた。

白龍皇（後書き）

プロローグ終わりです。次から原作への介入を開始します。

オリジナルキャラ紹介プラス能力一部公開（前書き）

まだ、秘密の能力については話が進むにつれ解放していきます、

オリジナルキャラ紹介プラス能力一部公開

名前

藤田 陸

年齢

19歳

身長

179?

体重

79?

能力

神器・神滅具《ロンギヌス》

赤龍帝の籠手

《ブースデッド!ギア》所有者の力を10秒ごとに倍加する。
倍加した力を何かに譲渡する。

神器・神滅具

白龍帝の籠手

《ディバイディング・ギア》

白龍帝から奪った力

触った者の力を10秒ごとに半分にする。
ただし、正式な力ではないので五回が限界である。

他にも能力があるがまだ秘密

性格

極めて楽観的な性格で次元漂流者になってもあまりきにしていない。言葉使いは荒いが、仲間の事はとても大切にしており、仲間が傷つくくらいなら自分を犠牲にするタイプ。小さい子ども達からのウケはよく、よく子ども達から”兄さん””お兄ちゃん”とよばれている。

過去

赤龍帝の所有者として白龍帝や他の神滅具と戦ってきた。なのははの世界に漂流する1年ほど前に白龍帝を覇龍により倒している。その時、白龍帝の籠手を奪い自分のモノにした。

パラメーター

S+

ほとんど化け物

S

桁違い

A

魔力A（能力解放S+）	運	素早さA（能力解放S+）	技術	耐久力	防御力	攻撃力	藤田 陸	人間以下	F	超ニガテ	E	ニガテ	D	普通	C	少し凄い	B	超凄い
	B		A	S	S	S+												

成長率
E

なのは

攻撃力
C

防御力
D

耐久力
E

素早さ
C

運
B

成長率
C

ただし、これは陸の世界の計りかたである
なのははの世界では、不明である。

機動六課（前書き）

すいません。原作の介入は後3〜4話ぐらいかかります。早とちりでした。

後、白龍帝ではなく白龍皇でした。バカな作者ですいません。
こんな作者ですがこれからよろしくお願いします。

機動六課

白龍皇を退けたあと現れた二人の女性の誤解をとき、次元漂流者を保護する形で俺は彼女達という機動六課へついていった。

何度か転移を繰り返し、車での移動が一時間程経過すると機動六課に到着した。

「へえゝゝつ、結構いい建物だな。」

俺は素直に驚いた。

機動六課はなかなか立派な建物であり、中に入ると結構な人の気配が感じられた。彼女達と一緒に5分ほど廊下を歩くと、部隊長室と書いてあるプルートが見えてその部屋の前で俺達は足を止めると、フェイトがドアの方に一言二言話すとドアが開き、フェイトが中に入れと促すので部屋にはいると。

可愛らしい女性が座っていた。

部屋の中には俺がソファーに座り机をはさんでその向こうに五人の

女性がいる。

左側で立っている金髪の女性フェイトとピンク髪の女性シグナムはわかるが、右側にいるいきなり攻撃してきた茶髪をサイドアップにし困った顔をしている女性と赤髪のまだ十歳ぐらいの女の子で強気な顔でこちらを見ている。

（随分若い部隊だな、だから弱いかな？）

なんて失礼極まりないことを考えていると――

「ようこそ機動六課へ

私が部隊長の八神はやてやよろしゅう。」

真ん中の女性が歓迎の言葉を口にし、俺はビックリして失礼な考えを中断した。

（こんな子供が部隊長！！！）

信じられない。部隊長は俺の世界では速くても20歳後半、遅ければ30歳ぐらいのレベルだ。

向かいの真ん中の茶髪にショートカット左側に飾りをつけた女性がそれほど有能なのかと思っていると考えているとはやてはハキハキした声で喋りだした。

「んで最初に君の名前を教えてほしいんやけど・・・・・・・・ええか？」

「フェイトとシグナムには言ったが藤田陸だ。」

俺が答えるとはやてはは軽くうなずいた。

「そんでな陸くんにはいきなり来てもらって悪いやけど、色々聞いてええやろか。」

「ああ、俺が知っていることならなんでも話そう。」

別に知られて困る事ではない、しかし、はやてはひまわりのような笑顔をつくり俺に微笑んだ。

「最初の質問や、陸くんという神器ちゅのは、ロストログアとはちがうんか？」

「ロストログア？」

俺が聞きなれない言葉に首をかしげていると、茶髪をサイドアップにした女性が説明してくれた。

「ロストログアっていうのは、過去に消失しつあるいは滅んだ世界の古代遺産だね。現在の技術でも再現できないほどの超技術で、使い次第では世界だけじゃなく全次元の崩壊させかねない危険な物のこと。」

「なるほど、俺の世界のオーパーツみたいなものか？」

「ちょっと違うけどだいたいその通りかな」

サイドアップの女性が苦笑しながら答える。

「悪いが神器はロストログアではない。神器は特定の人間のみに宿る規格外の力。そんな事はできない、できるとすれば神滅具《ロングヌス》ぐらいだな。」

「「「「ロングヌス？」」「」」」」

この場所にいる女性全員が、俺の聞きなれない単語に声を合わせて疑問符（？）を頭に浮にかべているかのように首をかしげている。

「ああ、知らないだっけな。神滅具っていうのは神器の中でも神を滅ぼす事が可能といわる特殊な神器の事で、俺の赤龍帝の籠手も白龍皇の白龍皇の光翼《ディバイン・ディバイディング》も神滅具に該当する。」

俺の言ったセリフに赤髪の女の子がバカバカしく答えた。

「なにいつてんだおめえーは、神なんているはずねーだろうが」

「こつちの世界にはいないかもしれねーが、俺の世界にはいたんだよ。神がな。」

俺は真剣に言い返す。

当たり前だ、神がいたからこそ神器があり神滅具もあるのだからな。
俺と赤髪の女の子にらみあっているとー

「ヴィータ、にらみあっているのは話しが進まん。陸もすまないが我が主の質問に答えてくれ。」

シグナムに注意されると赤髪の女の子はしぶしながら俺からはなれていった。それを見たはやては改めて質問を続けた。

「次は、陸くん自身のことや。フェイトちゃんの話しでは陸くんは過去に白龍皇を”殺した”って言ったけど、本当なんか？」

「事実だが。それがどうかしたか？」

フェイトは驚きながら俺に問いかけた。

「どうして？」

「どうして？ って理由なんて必要ない赤龍帝と白龍皇は殺しあう運命だからだ。」

「運命。ただそれだけ理由で殺しあうのあなたと白龍皇は。」

なにが納得できないのかサイドアップの女性は若干声をあげた。

「そうだ。それに戦う理由なんてどうでもいいだろ、次だ次。」

俺がぶっきらぼうに答えるとはやて達は諦めたのか話しを切り替えた。

「それじゃ次や、

白龍皇のことを聞きたい。フェイトちゃんやシグナムにはもうきいたけど、実際どのぐらいつよいんや白龍皇は。」

「その質問に答える前に一つ聞きたい。」

俺は手を上げて右側の方を指さした。

「ん、なんやどないした？」

はやては何が言いたいのかわからないようだが、俺は右側にいるサイドアップの女性と赤髪の女の子に指をむけたまま

「そっちにいる二人はダレ？」

疑問を口にする、

言われてきづいたのか二人の女性（一人は女の子）のうちまず茶髪のサイドアップの子が可愛らしい声で

「はじめまして、時空管理局機動六課スターズ分隊隊長高町なのは一等空尉です。」

次に赤髪の女の子が強気な声で

「時空管理局機動六課、スターズ分隊副隊長ヴィータ三等空尉だ。」

なのはとヴィータの自己紹介がすみ改めて質問を聞き返す。

「白龍皇の強さを知りたいんだっけ。」

はやては軽く頷き返し、俺は思った。

（どうしたもんか、こっちの世界での強さの基準がわからんからな
んとも言えないんだよな。）

質問に対して俺が少し困った顔をしていると、フェイトは心配そう
にこちらを見ているのがわかり疑問を質問する。

「フェイトちょっと聞いていいか？」

「な、なに陸くん」

いきなり呼ばれてビックリしたフェイトに俺はかまわず質問する。

「フェイトってこの世界じゃ強い方？弱い方？どっちだ。」

「えっと、たぶん強い方になるのかな？計った事ないから正確には

分からないけど。」

「そうなのか？ だったらムリだな。お前らで白龍皇を倒す事は不可能だ。」

きっぱりと断言する俺にフェイトとシグナムは納得していたが、はやて・なのは・ヴィータは納得できない顔をしていた。

「なんで倒せねーって断言できんだよ。やってみなきゃわかんねだろうが！」

「そうだよ。なんでそんな”勝てない”なんて断言できるの」

「たしかにな、まだ”勝てない”なんて断言するには早すぎると私も思うよ。」

はやて・なのは・ヴィータの三人は俺の”勝てない”という答えに対して否定的に意見するが、フェイトが反論する。

「なのはやはやて、ヴィータの言いたい事はわかるよ。
でも私は陸くんの言っている事は正しいと思うの、白龍皇は私達じ
や絶対無理だよ。」

白龍皇の事を思い出したのか少し震えながらフェイトが俺の答えに
賛成する。

「主はやて私もテストロッサと同じ意見です。白龍皇は私達では倒
せません。」

シグナムも俺の答えに賛成したので俺は感心した。

「フェイトとシグナムは流石にわかっているな、
直に白龍皇をみたかいたったってもんだ、それにくらべてあまえ
らは。」

俺は三人のバカさ加減に呆れてため息をつく。
三人はそんな俺の態度に腹が立ったらしく、椅子から立ち上がりか
けたがフェイトとシグナムの二人が自分から”勝てない”と認めた

のが余程珍しいのか。
なにもせず椅子に座りなおし、誰もなにも言わなかった。

「で、はやて達からの質問は終わりか？。
終わりなら今度は、俺から質問していいか？」

「ちょいまち、最後の質問してもええか。」

「いいぜ。」

最後の質問か、何を聞くつもりなのか考えているとはやてが少し緊張しているのか。
手が震えている。

「そんな、もし私らが神器使いと戦いになるなら捕まえる事は可能か。」

「無理だな、俺のいた世界では神器に対する研究は進んでいたが、未だに神器使いの神器を封印する事はできずにいた。
敵を捕まえる事自体は可能だったが、捕まえ続けると抵抗され怪

我人がでる。当たり前だが抵抗した神器使いは殺される。だから敵の神器使いは捕まった時点で3つの行動をとる脱走するか自殺するか、もしくは諦めて実験材料にされるを待つかだ。」

「「「「.....」」」」」

五人とも悲しい顔をして聞いていたが、俺は構わず話し続けた、

「はやてが言う”捕まえる”の意味には敵は殺さずに管理局で捕まえ続けるっつことだろ。」

「当たり前や。殺すなんて事できへん。」

「だったらお前が死ぬな。」

「えっ？」

はやてが間の抜けた声をだした。自分が何を言われたのか理解できていないようだ

「そんな甘い事考えては死ぬだけだ。敵がただの神器使いなら勝てるかもしれないが、神滅具もしくは禁手《バランス・ブレイカー》に至った神器使いは、はやて達が思っているほど甘くない。」

「バランス・ブレイカーってなんの事？」

聞いた事のない言葉になのはが俺に聞き返す。

「神器は所有者の思いを糧に変化と進化をしながら強くなっていく。だがそれとは別の領域がある。所有者の思いが、願いが、世界に漂う”流れ”に逆らうほどの劇的な転じ方をしたとき神器は至るそれこそが禁手だ。」

俺がみんなに説明するとフェイトが戸惑いながら質問する。

「えーっとね。陸くん説明してくれてうれしいんだけど、その禁手に

なるとどうなるのかな。」

「強くなる。劇的な程にな。お前達では、勝てないレベルまで上がってしまう。だから、お前達が禁手になる前の神器使いと戦うハメになったら躊躇なく殺せ。禁手にはどんな理由で至るのかわからんからな。」

冗談ではなく真実をかたったのに、みんなはわからないって顔をしている。俺は後ろ髪を乱暴にかきながらため息をつく。

「フェイトとシグナムはわかるだろ白龍皇のあの鎧あれが禁手だ。」

フェイトとシグナムは白龍皇の姿を思い出したのか手足が少し震えていた。白龍皇を見たことのないはやて達はいまだわからないって顔をしている。俺は危機感のないなのは達の態度にイライラして、提案した。

「わからないなら模擬戦でもしてお前達にみせてやるよ。俺の禁手を。」

機動六課（後書き）

次は

赤龍帝VS白い悪魔・ちびっこ魔導師

どちらが勝つか？

模擬戦（前書き）

駄文ですが長い目で生暖かく読んでください。

模擬戦

機動六課

訓練所フィールド廃墟

陸サイト

俺の禁手をなのはやヴィータ、はやてなどに見せるためこの場所に案内されて30分が経過していた。

「遅い、ただ模擬戦するだけだろ。いつまで待たせるきだ。」

俺は愚痴りながら改めていまいる場所を見た、
周りにある建物はほとんどが全壊しているか半分以上崩れており地面は瓦礫が山のように積み上がっている。

「しかしスゲーな、これ場にある景色が全部立体映像かよ。科学技

術は完全にこっちの世界の方が上だな。」

感心しながら建物や瓦礫などに触れると、僅かな違和感を感じるがほとんど分からないレベルだ。

「しかし本当に遅いな、何やってんだー」

俺は右斜めなのは達のいる方向を軽く睨んだ。

「お喋りなら俺との模擬戦が終わってからにしてくれよ。」

陸サイト終了

なのはサイト

（ん、いま陸君と目が合ったような？ってそんなわけないよね。ここから陸君のいる場所まで約5キロあるしね。）

勘違いだと思い、私は訓練所からFWメンバーの方を見る

「いいみんな、今から私とヴィータ副隊長で陸君との二対一の模擬戦してくるからしっかり見ているように。」

「「「はい」「」」」

FWメンバーのみんなが元気よく返事しをすると
フェイトちゃんが心配そうに声をかけてきた。

「なのはやっぱりやめよう、危ないよ。怪我するよ。」

「大丈夫だよフェイトちゃん、模擬戦するだけなんだから。」

心配で心配で仕方ないフェイトちゃんに私は笑顔で答えると、オレ
ンジの髪をツインテールに縛って少し強気な顔をしている女性、テ
ィアナが質問してきた。

「なのはさん、フェイト隊長はどうしてこんなに心配しているんで
すか？失礼ですが先程の男性からは、それほど大きな魔力をかんじ
ませんでした。」

「うん。私もそう思う。あの人そんな魔力はなかつたよ。」

ティアナの質問に青い髪をして天真爛漫な顔に元気の塊みたいな女
性であるスバルも頷いた。しかし茶色の髪をした10才ぐらいの少
年、エリオが疑問の声をあげる。

「そうですか？僕はあの人が強いですよ。なんか威圧感あり
ましたし。」

「エリオ君なんでそう思うの？」

自信がありそうに話すエリオに隣にいたピンク髪の優しい顔をした少年と同じぐらいの10才ぐらいの少女キャロがエリオに問いかけた。

「なんか自分自身の強さに自信があって、誰にも負けないって顔してましたし。なにか秘策でもあると思います。」

エリオの珍しい意見にスバルとティアナが哑然としていると、なのはにヴィータから通信がきた。

「なのは、はやてがそろそろ模擬戦初めるからフィールドの中に入ってくれて。」

「わかったよ、ヴィータちゃん。」

そう答えてヴィータちゃんからの通信を切ると、私は再びFWメンバーの方に顔を向ける。

「それじゃ、私はいくからしっかり模擬戦見ているように。レイジングハート！」

〈S t a n d b y R e a d y〉

レイジングハートの声が響き私の体は桜色の球体に包まれ、次の瞬間に包まれていた球体はなくなり中から、白に統一されたジャケツトにミニスカートやはり陸君から見ればコスプレと間違えそうな格好をして、手には赤い玉のついた杖10年以上の付き合いになるレイジングハートを手にした自分がいた。

「それじゃ、いつてくるね。」

私はフェイトちゃんやFWメンバーに背を向けて空に飛んでいった。

「なのは……………」

フェイトはまだ心配そうな顔をして飛んでいくなのはを眺めていた。

なのはサイト終了

フェイトサイト

「なのは・・・・・・・・」

心配そうな顔をして、飛んでいくなのはの眺めていたフェイトにスバルとティアナが元氣よく声をかける。

「大丈夫ですよフェイト隊長、なのはさんとても強いですしすぐにあの男性を倒して帰って来ますよ。」

「そうですよ、フェイト隊長が心配する事ないですよ。」

スバルとティアナが私を励まそと声をかけている、それがわかっていてもなのはが心配で仕方ない。陸君は『心配するな、手加減する。』とは模擬戦が始まる前に言ったけど禁手の”力”を知っている私には気休めにもならない。

「なのは無茶しやダメだよ。」

私の呟きはFWメンバーにも聞こえたのか真剣な表情で訓練所を見つめた。

フェイトサイト終了

陸サイト

「なのはのヤツ、やっとお喋りが終わったのかいつまで待たされるのかと思ったよ」

なのはがフェイトや知らない奴らから離れて、ようやくこちらに飛んでくるのを見ていた俺は軽く体を動かし準備運動を始めた。

「やれやれ、少し腹も減ってきたしなのはとヴィータの実力をかるくみたら、速攻で倒して飯でも食わせてもらうか。」

まるで自分が勝つことがあたり前のように呟やくと、いきなり目の前に

ディスプレイ越しに審判役をかってでたはやてが現れた。

「まるで陸君が買ってあたり前みたいな言い方やな、なのはちゃんやヴィータはそんな甘い相手やないよ。」

「はやてには悪いが俺くらいの実力をもつと見ただけで相手の実力も大体分かるんだよ、悪いがああ程度なら何人いようが問題ない。」

俺の言葉にはやては一瞬ビクリした顔をしたが、すぐに元にもどると、頬を膨らまして怒りだした。

「いくら何でも調子に乗りすぎや、そんな自信があるなら一つ賭けをせえへん？」

「賭け？別にいいが一体なにをかけるんだ」

こいつ一応俺の世界でいうと公務員的な立場のはずだが、そんな人間が賭け事をしていいのかと思っていると、はやてが賭けの内容を言い出した。

「私はなのはちゃん達が勝つことに賭ける、そんなでもし陸君が負けたら私達にもう少し敬意を払ってもらってもらうで。」

「いいぜ。俺が万が一億が一負けるなんて事ないと思うが、じゃあ俺が勝つたらー」

俺の内容にはやてはビックリして頬を赤くしたがなのは達が勝つ事を信じているのか、はやては賭にのり、俺とはやての内緒の賭けは成立した。

「いくぞ、なのはにヴィータ準備はいいか？」

はやてとの賭け事の話から10分がたち俺は、このフィールドの何処かにいる二人に通信する。

「うん。いつでもいいよ。」

「ああ、こっちも準備いいぜ。」

なのはとヴィータから準備よしの通信を受けると俺は、模擬戦の審判であるはやてに戦闘開始の合図を送るように促す。

「はやて準備オッケーだ初めてくれ」

ディスプレイ越しに俺が通信するとはやては模擬戦の開始の合図をする。

「それじゃ陸君VSスターズ1とスターズ2の模擬戦開始や」

その合図と同時に俺は赤龍帝の籠手を装着する。なのはとヴィータも動きだしたのか、人間の風を切る音が聞こえてくる。が俺は気にせず赤龍帝の籠手を体の前にだした。

「いくぜ、相棒」

〈Welsh Dragon Balance Breaker〉
《ウエルシュ ドラゴン バランス ブレイカー》

赤龍帝の籠手の宝玉が赤い閃光を解き放つ。

訓練所を赤い光が覆い、俺の体が真紅のオーラに包まれる。

”力”が俺の体全体に流れ込んでくる。

「な、なに」

「何しやがった、あいつ」

なのはとヴィータは見たことの現象に驚いた顔でこっちを見ていると、

俺は赤いオーラを放ち

らながら、前に出る。

俺の体は赤い鎧を身に纏っていた。ドラゴンの姿を模した全身鎧《プレートアーマー》

全体的に鋭角なフォルムだ。籠手にあった宝玉が両腕の籠手だけでなく、両手の甲、両肩、両膝、胴体中央にも出現していた。背中にはロケットブースターのような推進装置もついている。

「よ、鎧、陸君どこからそんなものを！」

目を丸くしてビックリしているのは、まあ見た目は小柄な赤いドラゴンみたいなもんだからな。顔すら鎧に包まれているからな。

「いくぞ、二人共これが龍帝の力！禁手『赤龍帝の鎧』《ブーステット・ギア・スケイルメール》手加減はするが死なんでもくれるなよ？禁手を使うと上手く加減がきかないからな。」

俺が一步步く、ただそれだけで空気が震え、地面から瓦礫などが吹き飛んだ。その瞬間瓦礫の影からヴィータが飛び出してきた。

「なめんな！そんな鎧ぶっ壊してやる。アイゼン！！」

〈Explosion〉

フェイトとシグナムと同じタイプの武器なのかヴィータのハンマーからも空の弾丸が地面に落ち、アイゼンと呼ばれた武器が変形する。

〈R a k e t e n f o r m〉

ハンマーの片方が噴射口のようになり、もう片方には角のような尖ったものが顕れる。

「ラアーケテン」

ハンマーの片方の噴射口からロケットのブースターのような噴射が始まりヴィータが勢いよく回り始めた。

数秒で何回転もして、そのままの勢いで陸に突撃してきた。

「ハンマアアアー!!」

その攻撃を俺はただ見つめた。そしてヴィータのハンマーが当たる

瞬間人差し指を前にだした。

「なっ、嘘だろ。」

ヴィータは驚愕していた全力だったのかは分からないが、ハンマーを俺は人差し指一本で止めていたからだ。

「おいおい、マジでこんなもんかよ。これじゃ話しになんねーぞ。」

「なっ、ふざけー」

ヴィータが言うより早く俺は人差し指で止めていたハンマーを軽く前につき出す。

するとヴィータは、さっき吹き飛んでいた瓦礫のように後ろに吹き飛びビルを三軒ぐらい突き破っていった。

「ヴィータちゃん！」

遠くの空でこちらに杖を向けて攻撃体勢のなのはが悲鳴をあげる。さっきまで隠れて移動し不意打ちを狙っていたのかただ遠くから狙っていたのかは分からないがヴィータがやられたのを見て、怒った表情で俺を見ている。

「レイジングハート」

なのはの杖からも空の弾丸が落ち、杖に集まる桜色の魔力が目に見えて増大する。

「デイベインバスター！」

桜色の魔力砲撃が俺に向かって突き進んでくる。が俺は特に何もせず魔力砲撃を受けた。

ドカカカアアアー！

派手な音をたて、砂煙を巻き上げディバインバスターが俺に直撃した。

「えっ、嘘なんで避けなかったの」

なのはは困惑した表情でディバインバスターが当たった所を見てみると、少しずつ巻き上がった砂煙が収まり中から何事もなかったかの様に赤い鎧に傷一つなく無傷な俺は空に飛んでいるのはを見ていた。

「なんだ砂煙を巻き上げるだけかつまらない。次はこちらの攻撃するターンだな。」

俺は右手に赤いオーラを集め、自分の頭位になるとなのはに投げる。

「なっ・・・!!」

なのはは高速で迫る赤い魔力弾を驚きはしたが簡単に右側に避け、再び攻撃体勢に移ろうとするが　――

「残念、そっちはハズレだ。」

俺は高速移動で空にいるなのはに接近し再び攻撃体勢に移ろうとするなのはの杖を左手で掴み、逃げられなくすると、右手でなのはの腹を殴りかかる。

「早すぎが終わりだ。」

俺の拳がなのはに届く前に、レイジングハートがバリアを展開する。

〈P r o t e n t i o n〉

桜色をした盾がなのはの前に展開する。がしかし俺の拳はレイジングハートが展開したバリアを何事もなく突き破りなのはに直撃した。

「キャアアアー」

悲鳴をあげながらなのは地面に激突し砂煙が上がる。
俺のゆっくり地面に降り砂煙がおさまるのを待ちながら反撃に備える。

「・・・・・・・・・・？」

しかし、砂煙が収まっても一向に反撃がこず、俺はなのはの墜落地点に行き様子を伺う。

「・・・・・・・・マジで。」

「うう~~~~ん」

なのはは見事にのびていた。俺はビックリして後ろに下がりヴィータが突き刺さっているビルに高速移動して、どうなっているかを確認すると。

「・・・・・・・・・・」

こっちも見事にのびており、俺は呆れながらディスプレイをだしはやてに報告する。

「なのはにヴィータ戦闘不能につき模擬戦を終了してくれ。」

俺の報告にはやては信じられない顔をしていたがディスプレイ越しになのはとヴィータの様子を見ると終了の言葉を口にした。

「陸君VSスターズ1スターズ2の模擬戦・・・・・・・・陸君の勝利や。」

はやての模擬戦終了の宣言と同時に、俺は禁手を解除したのはとヴィータを抱えてフェイトのいる所まで飛んだ。

陸サイト終了

ティアナサイト

「嘘、信じられない」

私は信じられない光景を見ていた。

管理局のエースオブエース高町なのはさんと守護騎士であるヴィー
タ副隊長がたった一回の攻撃で戦闘不能にされてしまった。

そもそも、対戦相手である男性にはそんな強い魔力は感じなかった、
でもいきなり赤いオーラに包まれ小型のドラゴンのような鎧を着る
と魔力が信じられない位に爆発的に上がりなのはさんと副隊長を一
瞬で倒した。

「なのは、なのは！」

私の隣でフェイト隊長が悲鳴のような声をだして叫んでいる。

「なのはさん……………」

スバルは憧れのなのは隊長が倒された時からボーツとしているので正氣に戻そうとする直前に。

「フェイト悪いが医務室までの道順を教えてくださいねーか？」

いきなり声が響き横を見るとなのはさんを倒した男性がフェイト隊長と話していた。

「なのはは大丈夫なんだよね陸君。」

「たぶんな、手加減はしたしなのは達が着てる服も結構防御力あるみたいだしな、二人共気絶しているだけだと思う」

その言葉を聞いて安心したのか、フェイト隊長がなのは隊長とヴィータ副隊長の顔を見て傷がないか確かめると安堵した顔した。

「うん。案内するからついてきて。」

「ああ、わかった。」

フェイト隊長が医務室に移動を始めると男性もフェイト隊長の後ろについていき、機動六課の隊舎に走っていった。

「ティアナ・・・・・・・・何なのかなあの人」

「知らないわよそんなこと自分で考えなさい。」

スバルは不安な声で私に聞いてきたけど、素っ気ない返事で返す。そして、私はただ機動六課隊舎に走っていく二人の背中を黙って見送った。

模擬戦（後書き）

赤龍帝の圧勝で終わりました。

模擬戦後の検査（前書き）

駄文ですみません。リアルが忙しくはやく更新できませんが、読んでくれたら嬉しいです。

模擬戦後の検査

陸サイト

模擬戦が終わりフェイトの案内で医務室まで早足で歩き医務室に着いた俺は金髪に軽くウェーブのかかった髪、優しい顔をしており、管理局の制服の上に白衣をきている女性シャルに言われて、なのはとヴィータをベッドの上に寝かす。

「シャル、なのはとヴィータは大丈夫なんだよね。」

「フェイトさっきから何度もいったろうが、しっかり手加減はしたし急所も外したから、堕ちたショックで脳震盪を起こしたただけだ。」

心配で仕方ないフェイトに俺は呆れながら言い返す。
その態度にフェイトは少し強めに言い返す。

「そもそも、陸君は最低なんだよ女の子を殴りつけるなんて男の子のやる事じゃないよ!」

「それこそアホか、模擬戦だろうがなんだろうが戦うんだから怪我くらいするだろ。その程度の事も教わらなかったのかお前達は。」

「まあまあ落ち着いてフェイトちゃん、彼のいった通りなのはちゃんもヴィータちゃんも軽い脳震盪だけで特に怪我もないし、すぐに意識を覚めると思うわ。」

言い争いになる俺とフェイトにシャルが優しい声で止める。

「それにしても貴方すごいわね。私も医務室から映像で見ていたけど、あのなのはちゃんとヴィータちゃんを同時に相手にして、二人共たった一撃で倒しちゃうなんて。」

「私もそうは思わない陸君なら普通だと思う。でもおかしいと思うのは”力”の方、陸君は一度自分の世界で白龍皇を倒したといったのに、陸君の禁手からは白龍皇ほどの”力”は感じなかったよ。」

シャルは驚いたように言うが、フェイトは慣れたように指摘してくる。俺は呆れた表情を作り二人の質問に答える。

「当たり前だ全然本気だしてないから俺は。」

「「えっ！」」

フェイトとシャルが驚いた声をあげるが、その反応に俺が驚いた。

「なに驚いた顔してんだ、まさか俺が女子供に対して本気だして戦っていると思ったのか？」

「だって陸君、禁手したよね。あれは本気で戦った事にならないの？」

フェイトの質問にシャルも同じ事を考えていたのか不思議そうな顔をしている。

「あれは禁手になれるギリギリのラインの出力でなかったただけだ、本来の俺の力の100分の1ぐらいだな。だいたい赤龍帝の能力をまったく使っていないだろ。」

「「赤龍帝の能力？」」

またしてもフェイトは不思議そうな顔をして俺を見ているが、シャルは落ち着いた表情で質問してきた。

「あの、赤龍帝の能力って何ですか？はやてちゃんの説明にはなかったと思うんだけど。」

「ああ、まだ誰にも説明してなかったな、俺の中に宿している赤龍帝の籠手は10秒ごとに持ち主の力を倍にしていくのさ。」

俺の言葉を聞いてフェイトとシャルが驚愕の表情を浮かべる。

いきなりの情報に頭が回らないのだろう。

「なにを驚いているかは知らんが、この能力はお前達が考えているほど便利な能力じゃあない、どんなに強力でも時間がかかるし、増大するのを待ってくれる相手なんていないしな。」

俺が説明するとフェイトとシャルも納得する。当たり前だがそんな事をする相手に時間なんてあげる筈がない、いくら初めては1しなくとも10秒ごとに持ち主の力を倍にすれば、いつかは倒されてしまうからだ。

「じゃあ、赤龍帝の能力を使う前に陸君に攻撃すれば倒せるの？」

「まあ、俺がきずかず、尚且つ俺を倒せる位のパワーがあればな。」

俺がフェイトの質問に簡単に答えるとシャルからも質問がきた。

「それじゃ白龍皇の能力はなんなの？赤龍帝と同じ10秒ごとに

持ち主の力を倍にする能力なのかな？」

「違う、白龍皇の能力は10秒ごとに触った相手の力を半分にする事だ。例えばフェイトの力が500あったとすると、10秒ごとに半分つまり250にされる、さらに10秒で125になり最後には子供にも勝てなくなる。」

「解除する方法はあるの？」

「わからんが方法たぶん3つ、白龍皇が自分で能力を解除するか、距離をかなりとる事、それから自力で破る事だけだと俺は思う。」

俺の説明にシャルとフェイトは何か考え込んでいると、ベッドで寝ていたのはが目を覚ましそのまま体を起こした。

「あれ、ここ医務室？・・・私なんで医務室のいるんだろ？」

なのは寝ぼけているのか子供のように医務室の中を見渡すとフェイトはなのはに抱きついた。

「なのは、なのは大丈夫痛い所はない。私がわかる？」

「痛いよフェイトちゃんどこも痛くないよ大丈夫だよ。」

フェイトはなのはの事が余程心配なのか、体のあちこちを触って確かめている。そんな二人を見ているとさすがに恥ずかしくなりなのはとフェイトから目を外しシャルに目を向けた。

「シャル、なのはは起きたことだし、ヴィータが起きるのも時間の問題だろ、俺さそろそろ席外していいか？
いい加減腹が減ってきたんで食堂かどっかで飯が食いたいだ。」

「ちょっと待って」

シャルは空中にディスプレイを出現させ、はやてに連絡している。

俺はシャルとはやての連絡が終わるまで待つつもりでいるとシャルがディスプレイを消してこちらの向き笑顔を見せた。

「えーっともう少しではやてちゃんがこちらに到着します、それではやてちゃんの到着したら軽く身体検査、リンカーコアの確認、それが終わったら部隊長室まで移動してお話しだそうです。」

「リンカーコア？」

俺はまた聞いたことのない言葉に首を傾げるとシャルが説明してくれた。

「リンカーコアは私達魔導師が魔法を使うさいに必要な器官、魔力の源であり魔力量が多ければそれだけ有利になるし、レアスキル（固有技能）があればさらに有利になるわ。」

「レアスキルね俺の目みたいなものか」

俺の眩きにシャルはかわいく首を傾げた。
だが、さすがの俺もイライラしていた。

「くそマジかよ、いつになったら俺は飯が食えるんだよ。」

俺はイライラしながらシャルの後ろにある時計を見ると現在午後
の3時、俺がこちらの世界にきたのが11時ごろで飯も食わずに機
動六課まできた。しかし、俺がもとのいた世界では午後7時夕食の
時間であり大変腹が減っている。

「なあシャル身体検査とリンカーコアの確認はいいが、その前に
飯にしようぜ。」

俺そろそろ本格的に腹が減ってきたし、模擬戦もしてさすがにヤバ
イ。」

俺がシャルを何とか説得しようと思えこれ話しているとフェイト
に抱きしめられていたのはが割り込んできた。

「どうしたのシャルさん陸君に何かされた？」

「陸君シャルさんに何かしたの!!」

なのはの割り込みでフェイトもきずき、俺とシャルの様子から少し強めに声を出している。二人の言葉にシャルが頬を赤くし顔を下に向けてモジモジしていると、なのはとフェイトはなにを思ったのか、魔法を使おうとベットから立ち上がった瞬間、医務室の扉が開きはやてと30?位の青髪のロングヘアーに管理局の制服を着た少女が入ってきた。

「ごめんなく少し遅れてもうた。まったくリインがより道するからやで。」

「はやてちゃんに言われたくないですよ。」

はやてと30?位の少女は医務室に入ると俺となのは、フェイト、シャルと順番に見て俺達の様子に不思議そうな顔をしている。

「シャルどうしたん顔が赤いで？」

「なのはさんもフェイトさんもどうかしたですか？」

「「べつに」」

二人は不機嫌そうな顔をしながら、なのははベットにフェイトは椅子に座り直した。

「何でもないのよはやてちゃん、リン。さあ陸さん上着を脱いでください。まず身体検査からです。」

シャルは顔を少し赤めながら慌てた様子で俺に上着を脱ぐようにいった。

「はぁ、それは別に構わないが、その前にそのちっこい少女はなに？」

俺が質問すると青髪の少女はふあふあと飛びながら俺の前にきた。

「はじめまして。あなたが藤田陸さんですよ、私ははやてちゃん
のデバイスのリインフォース？です。みんなからはリインって呼ば
れていますよろしくです。」

「ああ、こちらこそよろしくなリイン。」

俺が握手を求めるように手を出すと、リインは俺の指を両手で握っ
て返した。

「それで自己紹介はええな、シャルはじめてええで」

「はい、はやてちゃん。それじゃ陸君あらためて上着を脱いでくだ
さい。」

俺は上着を脱ぐ必要はあるのかと考えたが、別に見られて困る体ではないのでシャルの言葉通りに上着を脱いだ。

「「「「わあ」「」「」女性赤面

なにを感じたのかは知らないが、この場にいる女性全員が俺の体を見た瞬間に顔を赤くしている。俺は、自分の体がおかしいのか思い自身の体を見るが、いつも通りの体があるだけでおかしい所はない、頭に疑問符を浮かべながら俺は女性全員を見渡した。

陸サイト終了

フェイトサイト

ここでの会話はすべて念話によるものです。

「すごいお兄ちゃんやユーノ君とは全然ちがう」

「ほんとだね〜どうしやったらここまで体を鍛えられるのかな?」

「・・・・・・・・・・」

「明らかに、運動で鍛えた体とちゃうで、戦う事を目的に造られた体や。」

「はい、リインもそう思います。シャマルはどう思いますか?」

「・・・・・・・・・・」

「シャマルどうかしたの」

私はさっきら黙っているシャルに陸君にわからない程度に目をむける。

「す、すご〜い。」

「「「な、なに」」」

「すごい、すごいよ。陸君の体まったく無駄がない、無駄な筋肉がついてなく必要な所に必要なぶんだけついている。こんな素敵な体に抱きしめられたらわたし〜」

陸君の体を見ながら変な妄想にふけていた。
使いものにならないシャルから目を外して私は再び陸君に目を向けた。

「たしか私もこの腕に抱きしめられたんだよね」正確には陸が泣いているフェイトを持ち上げた。

そう思うといきなり恥ずかしくなり、頬が赤くなってきた。

「フェイトちゃんどうかしたの？」

なのはが心配そうな顔をこちらに向けている。

「シャル、陸君が不思議そうな顔をしています正気に戻ってください。さい。さい。」

リンの念話のよる絶叫により、妄想にふけていたシャルが正気に戻った。

フェイトサイト終了

陸サイト

医務室にいる女性陣が俺の体を見てから一分が経過した、この一分間でシャルは変な顔をしてニヤニヤと笑いながらこちらを見ている、フェイトは頬を赤くしてうつむきながらもチラチラと目線だけは上に向けて俺を見ては頬を赤くしてまたうつむく、なのは、はやて、リインは特に変化はなかった。

「なあ、シャル上着脱いだんだが、いつになったら調べるだ？」

「は、はい今調べますよ。」

俺の疑問の声にシャルは急いで身体検査の準備をしだした。

30分後

一通りの検査が終わり俺は検査の結果をきいた。

「どうだった、なにかおかしいところがあったか？」

「おかしいっていえは全部おかしいですよ。」

シャルルの答えになのはが聞き返した。

「なにがおかしいのシャルルさん？」

「まずリンカーコアはありません。」

その言葉にフェイト達は驚いた顔をした。

「でも魔力量はEX、測定不能。飛行も可能、魔力変換資質もないわ。」

「魔力変換資質？」

「またもや聞いたことのない言葉にいい加減つかれてきてため息をつく俺にフェイトが微笑しながら説明する。」

「魔力変換資質っていうのは意識しないで魔力を電気や炎に変えられる資質の事で、私は電気シグナムは炎熱に魔力を変換できるよ。」

「なるほど、フェイトやシグナムの武器から出た電気や炎はその資質のおかげなのか。」

俺がウンウンと納得しているとリインが大声をだした。

「なにをなごんでいるんですか。魔力量がEXなのも驚きますけど、それ以上にどうしてリンカーコアがないのに魔力量が高いんですか、リンカーコアがなければ魔力は発生せず、魔法は使えないはずですよ。」

リインの言葉にあらためてフェイト達が頷く。
しかし、リインの疑問に俺が説明した。

「みんなには悪いが俺の世界ではフェイトやなのは達みたいにリンカーコアを使って魔法を使うのではなく、魔力を血液みたいに体を循環させて必要な時に応じて放出したり体に纏ったりするんだ。」

俺は右手を顔の横にあげると、右手に赤い魔力を纏ってみせた。
その様子に女性陣はまじまじと右手を見ている。

「だから、正確には俺は魔法は使えない。
俺の世界には使える奴はいたがな、俺がなのはを殴った時も白龍皇の攻撃を防いだのも単純に右手を魔力を纏って殴ったりガードしただけだしな。」

俺の言葉に納得したのかしてないのかフェイト達は微妙な顔をしているがはやてがシャルに先を促した。

「んでシャル他におかしい所はあるん？」

「はい、はやてちゃん実は陸君の筋肉がおかしいの。」

「おかしいんか？」

はやては俺の腹を触りどこがおかしいのか確かめっていると、隣でフエイトが羨ましいいような顔ではやてを見ているが俺はきにしないでおく。

「おかしいのよ。だって陸君の体の筋肉、見ただけじゃわからないけど、普通の魔導師の筋肉の30倍以上もあるのよ。」

「「「30倍以上もあるの！。（んか！）。んですか〜！」」」

女性陣が驚愕の声をあげるが、俺は特に気にせず訳を話した。

「それは俺がヒュペリオン体質だからだ。」

「「「ヒュペリオン体質？」」「」」」

「ああ、俺のいた世界では何億分の一の割合で、発症するとされる特殊な体質のことだよ。この体質は常人の数十倍の密度と柔軟性のある筋繊維をもち運動能力と代謝を支える心臓血管の機能が優れているため常人を遥かに越えた力を得るんだ。」

「陸さんの世界は不思議な体質の人がいるんですね〜。」

「その”力”に規格外の魔力、赤龍帝の能力があるんやから無敵やな〜。」

はやてとリインがなぜか感心したかのように話している。

なのはとフェイトは素直に自分の能力を私達に話してくれた事が嬉しのか、笑顔で俺を見ている。その二人の笑顔に俺は少し罪悪感を感じた。

（悪いなみんな俺はまだ自分の能力のすべてを話せるほど信頼して

はいない。）

なのは、フェイトとはやて、リインは楽しそうに喋っている姿をみながら改めて考える。

（この場にいるみんなはまだ会って一日も経っていないし、管理局についてもいろいろ調べる必要がある……..
大変だな）

俺が苦笑いをしているとシャルが優しい声で話しだした。

「はやてちゃん身体検査とリンカーコアの検査は終わりよ。これからどうするか陸君と話すんでしょ。」

「せやな、なのはちゃんフェイトちゃん、リイン、部隊長室でこれからの事を陸君と話をするんで、ついてきてもらってええやろか？」

「「はい、八神部隊長」」

二人は、はやての言葉に元気よく応えるとはやてと一緒に医務室から出でいくので俺は慌てて三人とリインの後を追った。

(さて、どうなる事やら?)

その後、俺達が医務室を出てすぐ後に、目が覚めたヴィータが泣きながら俺達に追い付いてきては、俺にドロップキックをかまし、倒れる俺を庇ったフェイトの胸に顔が突っ込み、恥ずかしさが頂点に達したフェイトは俺を魔法で吹き飛ばした。

「エツチイイイーッ」

ドカアアアーッッッッッッッッッッッッッッッッ

「ノオオーッッッッ」

こうして俺は魔法で吹っ飛ばされながら部隊長室に向かった。

模擬戦後の検査（後書き）

つぎは、やっとFWのメンバーと赤龍帝が合います。

今後の方針と自己紹介（前書き）

駄文ですみません。文才はないですが、読んでくれたら嬉しいです。

今後の方針と自己紹介

部隊長室

はやてサイト

私は自分の椅子に座り、リインは空中に浮いている、右側にはスターズのなのはちゃんとヴィータ、左側にはフェイトちゃんと部隊長室で私らがくるのを待っていたシグナムが立っており、正面には来客用のソファ―に陸君が座っている。

「で、はやて話ってなんだ、まだ聞きたい事でもあるのか？」

陸君はさすがに疲れたのか少し元気がない声で私に質問してきた。

「陸君はこれからどうするつもりなんかなー々々と思ってな。」

「どうするもなにも白龍皇を探すつもりだが、奴を放って置けば必ず良くない事件がおきる、だから何かがおきる前に奴を今度こそ殺して事件を未然に防ぐつもりだが」

陸君が”殺す”という言葉簡単に当たり前みたいに言うと、私だけでなくこの部屋にいるみんなが息を飲んだが、気を取り直し話を続ける。

「だったら陸君、機動六課で働かへん？まあ民間協力者って立場になるけど。」

「いいぜ」

「」「」「えっ！！」「」「」

あまりにも簡単に返事が返ってきて女性陣全員がビックリしている。

「ただし条件がある」

「どんな条件や？」

陸君はいつになく真剣な表情をして私達を見渡した。

（どんな条件でもある程度まで飲むつもりや、
陸君をここで手放すわけにはいかへんからな。）

私はどんな条件を出してくるのかドキドキしながら、陸君からの条件を待っている。

「そんな顔するな大層な条件じゃない、ただ衣食住をそちらから提供してほしいだけだ。」

「ほえっ？」

「えっ、それだけでいいの陸君？」

なのはちゃんが呆けている私に代わって、ビックリしながら改めて陸君に聞いている。

「ああ、あと出来れば修行もしたいからさっき使った訓練所も自由に使わせてほしい。」

「それくらいなら構わないよね、はやてちゃん。」

「ええ、かまわへん。むしろ好都合や陸君にもFWのメンバーの訓練を見て意見聞きたいしな。」

内心陸君が出して条件に安堵しながら、笑顔で返事をする。

「ところで機動六課はなにをやっているんだ、なのはやフェイト、シグナムやヴィータ、俺より弱いとはいえこれだけ戦えるメンバーがいる以上事務仕事って訳じゃないだろ。」

陸君からの質問にフェイトちゃんが返事をする。

「うん、私達機動六課は、ロストログア通称レリックの保護すること。そしてそのレリックを狙う謎の機械兵器ガジェットドローンの撃退が主な仕事かな。」

「レリック？ガジェットドローン？」

「うん。ガジェットドローンの方は陸君も撃退しているはずだよ。私達がきた時には壊していたから。」

陸君はフェイトちゃんに言われ少し考え初めるがすぐに思い出したようだ。

「ああ、俺がこっちの世界に跳ばされていきなり無謀にも襲いかかってきた、あのたいして強くない屑鉄人形の事か。それでレリ

ツクって言うのはなんなんだ」

陸君の屑鉄人形と言う言葉に私達は苦笑しながらも、レリックについてはなのはちゃんが空中ディスプレイを展開し実際のレリックの形を見せながらに説明する。

「レリックって言うのは赤い宝石みたいなロストログアの事で、その仕様用途は一切不明だけど強大な魔力が秘められた極めて危険度の高いロストログアであり、現在3つのレリックが確認されています。そしてそのうちの一つは周囲を巻き込んで消滅しました。」

空中のディスプレイに四年前の空港火災事故の映像が出されると陸君は顔をしかめた。

「なるほどな確かにレリックが危険な物なのはわかった。こんな危険な物を野放しにしておくわけにはいかないな。」

陸君は真剣な顔でそう呟くと私の方に手を出した。

「迷惑をかけるかもしれないがこれからよろしく頼む、あと神器使いの対策も教えるよ。」

「うん、ありがとう、おおきにな。」

「だか、はやて俺の狙いはあくまで白龍皇を殺す事だ、レリックと白龍皇が同時にでたら俺は白龍皇の方を優先させてもらうが構わない。」

「構わへんよ。どっちにしろ私達じゃ白龍皇には敵わんからな。」

私は笑いながら差し出された陸君の手を握り握手をすると、陸君はなのはちゃんフェイトちゃんシグナムにヴィータ、リイン、この部屋にいるみんなと順番に握手していくと――

ぐう~~~~~

陸君から大きな空腹の音が部屋中に響きわたり、その音を聞いた私は笑いだし陸君は恥ずかしいのか顔を僅かに赤くした。

「それじゃ、みんなご飯に行こうか、陸君も限界みたいやし。」

「そうだね、はやてちゃんこの時間なら丁度スバル達も夕食の筈だしね。フェイトちゃんもどうかかな？」

私は陸君の世界の話を聞いては笑い談笑しながら食堂まで移動した。

はやてサイト終了

陸サイト

食堂

「結構立派だな、これなら飯にも期待出来そうだ」

俺は食堂に着くと素直感想を口にする、そして食欲を満たすためさっさと飯を食べるべきテーブルを決め注文しようとする俺をのがが止めにきた。

「ごめんね、陸君のお腹がすいてるのはわかるけど紹介したい子達がいるから少し付き合ってくれるかな。」

「いいけどちょっと待ってくれ、……………フェイトすまないが一番ポリュームのある奴をとりあえず3つ頼む。」

「うん、わかったよ。」

フェイトがはやて達と一緒にカウンターに注文して行く姿を確認すると、改めてなのはに顔を向ける。

「で紹介したい子達てのは何処にいるんだ？」

「うーん。この時間なら食堂にいたんだけどな〜」

なのはが周りに見て誰かを探しているので俺も食堂の中を見渡すとさっき俺となのは、ヴィータの模擬戦を見ていた四人の少年少女が一つのテーブルで飯を食べている姿があり、なのはも見つけたのか四人に声をかける。

「スバル〜〜〜。」

なのはの声で四人も俺達きずいたのか青髪の女の子が元気な声で返事をする。

「なのはさ〜〜ん今からご飯なら一緒にしませんか〜〜〜。」

「スバルうるさい！もう少し小さな声で呼びなさいよ。」

「・・・・・・・・・・」

青い髪の元気な声を出した子がオレンジの髪をしたちょっと気の強そうの子に怒っている間、十歳くらいの男の子と女の子がこちらを正確には俺を見ている。俺達は四人のテーブルまで歩いた。

「なのはこの子供が俺に紹介したい子達なのか？」

「うん。ほらみんな陸君に挨拶しよ。」

なのはに言われて四人の少年少女は椅子から立ち上がり自己紹介を始めた。

「始めまして、私はティアナ・ランスター二等陸士です。よろしく
お願いします。」

オレンジ色の髪を短いツインテールした気が強そうな女の子。

「私はスバル・ナカジマ二等陸士です。よろしくお願いします」

さっきティアナに怒られていた、青い髪をした元気いっぱいの女の子。

「僕はエリオ・モンディアル三等陸士であります。よろしくお願いします」

四人の中で唯一男の子で茶色の髪をした子供。

「わ、私はキャロ・ル・ルシエ三等陸士であります。よ、よろしくお願ひしましゅ。こっちは竜のフリードです。」

「クキュル」

最後にピンクの髪をした優しそうな女の子が緊張しながら側にいた竜と自分の自己紹介したので、俺も自己紹介をする。

「俺は藤田陸、次元漂流者なんで階級とかはない明日からこの機動六課で働く事になった、こっちの世界の事はまだまだ解らない事だらけで迷惑かけるかもしれないがよろしく頼む。」

俺はそう言うとき軽く頭を下げると、隣にいるなのはに小さい声で話す。

「おい、なんであんな子供がこんな所にいるんだ、まさかあんな子供に戦わせている訳じゃないだろな。」

「えっ、でも能力的には問題ないよ。」

なのはの言葉を聞いて俺は驚愕した能力的に問題あるかないかでは

なく、戦争中の国じゃあるまいしあんな小さい子どもを戦わせているなんて俺のいた世界ではあり得ない事なのだ。
俺はエリオやキャロに目を向ける。

「・・・・・・・・」

「あの、藤田さんどうかしましたか？」

「あの私、なんか藤田さんの気に入らない事をしましたか？」

エリオとキャロは黙っている俺に対して少し緊張しながら話かけてきた。その態度に俺は二人の頭を撫で回した。

「そんな緊張しなくてもいい、機動六課ではお前達の方が先輩なんだから俺の事は気軽に『陸』と呼びすてで呼べばいい。」

そう言いながら俺は二人の頭を撫で回していると、エリオもキャロも緊張がなくなったのか笑顔をつくり俺を見上げた。

「はい、陸さん」

笑顔を向けてきた二人に俺はさらに二人の頭を撫で回す、二人が撫でられ過ぎてめを回しすのを見て次に俺はスバルとティアナに手を出す。

「スバルにティアナ、二人ともよろしく頼む」

「は、はいこちらこそよろしく願います。」

「敬語も使わなくていい、タメ口でいこうぜ」

「わかったよ。陸君これからよろしく。」

スバルは俺の手を握り握手をしてくれたが、ティアナは黙ったまま

俺を見ている。

「ティアナはどうかしたのか？」

「いえ別に、藤田さん、なのはさん失礼します。」

そう言うとティアナは椅子から立ち上がり、俺の横を抜け食堂から出て行った。

「ティアア待つてよ〜。」

「スバルさん！」

「えっと、失礼します。」

ティアナに続きスバルにエリオ、キャロか食堂から出ていくと、入

れ違いで俺の注文した飯をお盆の上に乘せたフエイトに続きはやて達も自分の飯をお盆に乗せてやってきた。

「陸君どうかしたのティアナ、何か思い詰めた顔しながら出て行っただけど？」

「さあ、わからん。そしてわからん事を考えても仕方ない。それより今は飯だ飯。」

フエイトが持っていたお盆を奪いテーブルに飯を並べると、俺は我先にと食べ始めた。

「上手い、結構上手いなここの飯はこれならこの世界でもうまくやってけそうだ」

飯を食いまくる俺に、女性陣は呆れながら見ている中はやてが喋った。

「そんでな、陸君の寝るとこなんやけど、男性の宿舍は予備がない

から女性の宿舎に泊まってもらうけどええな。」

「はっ？」

俺は飯を食べる手を止めてはやてを見る、他の女性陣はよほどビツクリしたのか声さえ出せず動きを止めたまま顔だけ動かしはやての方を見ている。

「えーっと、聞き間違えかな、今はやてさん、俺に女性の宿舎に泊まれって言った？」

「いったよ。」

平然と答えるはやてに女性陣が反発する。

「だ、ダメだ、ダメだ。はやてわかってんのか、陸は魔法を使う私達より強いんだぞ。襲われたらどうするんだ!!」

「そうです、主はやて危険過ぎます。」

「ヴィータにシグナムお前ら、俺をどんな目で見てんだ。それにシグナムはともかくヴィータなんて金もらっても襲わねーよ。それにどうせ襲うんならのはやフェイトみたいな可愛い子を襲うわ。」

俺のセリフに食事中だったのはとフェイトは箸を止め顔を赤く染めながら自分の体を手で抱きしめた。

「それって陸君は私とフェイトちゃんの事を隙あらば襲うていつて
るの？」

「陸君、そんな事考えてたの。」

「違う、人の言葉の揚げ足をとるな。」

俺はテーブルに向かってため息をつくとき、さっきまではやてからパ

ンをもらい食べていたリインがは賛成する。

「私は良いと思いますよ、映像記録ではフェイトさん白龍皇から殺害対象になっているみたいですし、部屋も一緒にして陸さんに守ってもらえば良いじゃないですか。」

「「えっ!!!」」

リインの提案になのはとフェイトはビックリしていたが俺は納得して隣に座っているフェイトの肩に手をおいた。

「よし、フェイトと俺と一緒にの部屋で暮らすぞ。アイツは空間に関する魔法が得意だからな、何処から現れても不思議じゃないしな。」

「え、え、でも私達まだ会ったばかり、で、でも陸君がどうしてもっていうなら……わたー」

「ダメーーーーーッ」

なのはは絶叫をあげ半分泣きながら、俺とフェイトの間に割り込みそのままの勢いでフェイトに抱きついた。

「ダメだよ、フェイトちゃん。絶対にダメだよ。」

「な、なのは、冗談だよ冗談。いくら何でも一緒の部屋で暮らさないよ。」

「なにマジにしてんだよなのは、冗談に決まってるだろ。で、はやて冗談はいいから俺は何処に住めばいいんだ？」

俺とフェイトでなのはを慰めながら改めてはやてに住む場所を聞くと。

「冗談やないで、陸君が暮らす部屋は女性の宿舍、そんでなのはちゃんフェイトちゃんの向かいでシグナム、ヴィータの真ん中の部屋

やで。」

はやての言葉に女性陣が反発の声をあげるが、はやては知らん顔しながら自分の飯を食べるのを再開する。

「やれやれ、どうなる事やら。」

俺もこれからの事に若干の不安を覚え、ため息をしつつ自分の飯を食べ始めた。

今後の方針と自己紹介（後書き）

あと、少しで本編に介入していきたいと思います。

夜（前書き）

短いです。駄文ですがこれからも読んでくれたら嬉しいです。

夜

フェイトサイト

「寝れない。」

夜、私はなのはと一緒の部屋のベッドで寝ようと努力していたが、いつまでたっても眠る事ができずいた。

「原因はやっぱりアレかな。」

私は小さな声で呟くと覚悟を決め、なのはを起こさないようにベッドから降り、枕を持って部屋から出た。

「緊張するくくく。」

自分達の部屋から出てすぐ目の前の部屋、今日出会ったばかりの人、

藤田陸君の部屋の前。

「陸君起きてるかな。」

私はそう呟くと目の前の部屋のドアを開けようと手を伸ばし、止める。

「でも、万が一陸君が勘違いして『フェイトの方から夜這いしに来たんだから覚悟はいいよな』なんて言われて襲われたらどうしよう。」

私は陸君の部屋の前で右にいたり、左にいたりうろろして悩んでいる。

「でも、明日も早いし、できるだけはやく原因の解決もしたいし。」

私は独り言を呟きながら陸君の部屋の前で悩んでいると。

「フェイトなに人の部屋の前で不審者の様にうろうろしてんだ用事が有るならさっさと中に入ってこいよ。」

「う、うん」

部屋から陸君の声が聞こえ私は覚悟を決め部屋に入った。

フェイトサイト終了

陸サイト

食堂での騒動から数時間がたち今は夜中、俺はなのは、フェイト達女性陣からの反発を無理矢理押さえたはやてに言われた通りの部屋のベッドでうつ伏せになっていた。

「疲れた〜なげ〜1日だったな、こんな長いと感じた1日は昔、修行してた時以来だ〜。」

昔、武術の師匠達から拷問レベルの修行をしていた事思い出し苦笑しすと

【やれやれ、相棒は相変わらず樂觀的だな、まあそこが頼もしくもあるがな。】

いきなり声が聞こえたが俺は冷静にその声に答えた。

「どうしたんだドライブ、今まで黙ったままだったのに。」

いきなり俺の心に話しかけてきたのは、俺の神器、赤龍帝の籠手にやどる二天龍のドライブだ

【相棒が一人で話していたら危ない人だと思われると思い黙ってた。】

「なるほどね。そいつはありがとうございます。」

俺は皮肉を言うが、これからの事を考えるために、真面目な表情を作り真面目な声でドライグに改めて訪ねた

「ドライグはどう思う、ここにいる機動六課の連中について。」

【さてな、ここにいる連中はお人好しで、裏のある人間には見えんが。】

「わかっている。なのはやフェイト達はいい奴だけど、管理局はいわゆる軍隊と政府が合体したようなもんだからな、上がいい奴ばかりとは限らない。」

【その通りだ。】

俺とドライグはこれからどのくらいの期間なのはやフェイト達と一

緒にいたるべきか考えていると。

【相棒。部屋の前に誰かいるぞ。】

「わかっている。この足音と呼吸のしかたはフェイトだな、さつきから何やっているんだアイツは。」

俺とドライグが真面目にこれからの事を考えている最中だというのにさつきから部屋の前をフェイトが右にいたり左にいたりうろうろしているのが気になって仕方ない。

「フェイトなに人の部屋の前で不審者の様にうろうろしてんだ用事があるならさつきと中に入ってこいよ。」

俺がドアの向けうにいるフェイトに呼びかけると、フェイトは顔を真っ赤にしながらゆっくりとドアを開けて俺の部屋に入った。

「フェイト、どうかしたのか、こんな時間に人の部屋の前で俺に何

か用事でもあるのか？」

「・・・・・・・・・・ないの」

フェイトは小さな声でぼそぼそと喋ったが、俺は上手く聞き取れず再度質問する。

「悪い上手く聞き取れなかった。もう少し大きな声で頼む。」

「・・・・・・・・・・れないの。」

少し声は大きくなったがまだ小さく、上手く聞き取れない。

「悪い、もう一回。」

俺が再度お願いすると、フェイトは真っ赤な顔をさらに赤くトマト

のような顔で。

「だから、怖くて眠れないの!!」

と叫んだ。俺はしばらく啞然としていたが、涙目のフェイトに生まれ正氣に戻る。

フェイトは顔を真っ赤にしてうつ向いて、手が軽く震えている。

「あのさなんで、眠れないと俺の部屋に来るんだ? なのはと一緒の部屋なんだろう仲良くベッドで寝れば良いじゃないか。」

「それでも眠れないの。」

「どうして?」

「怖い。寝ようとする自分が白龍皇に殺されそうになった恐怖が襲ってくるの。」

フェイトは目に大粒の涙をためながら理由を話すと、俺に抱きついてきた。

「えっ、えーとフェイトさん？」

「お願い陸君、一晩で良いから一緒に寝て、お願いします。」

フェイトは今にも泣きそうな顔でお願いしてくるので、俺はしぶしぶながら了承した。

「はぁ〜。わかった。でも今日だけな、それと朝見られたら厄介だからのはやみんなが起きる前に部屋に戻れよ。」

「うん。ありがとう陸君」

フェイトのとびきりの笑顔に俺は照れくさくなりベッドに入り顔を隠すように横になると、フェイトを手招きする。

「早くこい、俺はもう寝たいんだ。」

「うん。でもエッチな事はダメだからね。」

「するか！」

俺の否定の言葉を信じたのか、フェイトが少しずつ俺のベッドに入ってくる姿が妙にエロく見え、俺は慌ててフェイトとは反対側を見る。

「あ、なんか今エッチな事考えた？」

「か、考えてねーよ！俺は早く寝たいんだから早くしろよ。」

俺は強めの口調で言うが、フェイトはよほど恥ずかしいのかベッド

から出たり入ったりを10分ほど繰り返したすえようやくベッドに入り俺と背を向けて横になった。

「それでじゃフェイト、おやすみ。」

「う、うん。おやすみなさい陸君。」

俺は部屋のライトを消し眠りについた。

10分後

「・・・・・・・・・・」

俺は反対を向いて寝ているフェイトが、無言ではいるが起きているのがわかっていた。
フェイトの脈や呼吸が乱れ体が僅かに震えているまるで、子供が夜、

真っ暗な部屋を本能的に怖がるかのように。

【相棒】

（へいへい、言われなくてもわかってるよドライグ。）

俺は心の中でドライグに返事をする、体の体勢変えて、フェイトの背中から抱きつくと、フェイトは後ろからでもわかる位顔を真っ赤にしてパニックになり、俺の体を振り払うかのように暴れた。

「え、え、い、いきなりな、なにするの陸君、ダ、ダ、ダメダメ絶対ダメ。さっきも言ったけどHなのはダメだからね。」

「アホか、変な妄想をして暴れんな。」

パニックっているフェイトに俺は真剣にそして冷静に返すと、フェ

イトは少し冷静になったのか少しずつ大人しくなった。

「まったく、はじめからそうやって大人しくしろよ。」

「な、なんの説明もなく抱きつかれたら、女の子なら誰でもパニックになるよ。」

「悪かったよ。だか、お前の中の恐怖を消すための行為なんだから我慢してくれ。」

「えっ。どうやって？」

俺はフェイトの質問に答える代わりに、さらに強くフェイトを抱きしめると同時に、赤龍帝の籠手を両腕に出現させ体から赤いオーラを放出する事にフェイトはビクリしていた。

「陸君これはなに。」

「あー、説明するの面倒からまた今度な、今はお休みフェイト。」

「な、なにを言ってい…………くくく。」

余程疲れていたのか文句の途中で眠りにつくフェイトに俺は微笑しながら、フェイトの綺麗な髪を撫で俺も改めて眠りにつく。

「よい夢をフェイト。」

こうして俺の異世界での長い初めての1日はフェイトと一緒に幕を閉じた。

次の日、朝になり隣にフェイトがない事にきずいたのはが、俺の部屋に突貫してきては一緒のベッドで仲良く寝ている俺とフェイトを目撃、キレたのはは、俺が事態を説明するよりも早く砲撃魔法を放つのだった。

「陸君のエッチ……………ッ」

ドカアアアア――――――――――ン

「ぐわ――――――――朝からなんだよ――――」。」

俺は部屋の窓から外に吹きとばされながら、はやくも機動六課に協力する事を軽く後悔した。

夜（後書き）

次はファーストアライトやつと介入できます。

ファーストアライト・上（前書き）

やっと原作に介入します相変わらず駄文ですが、読んでくれたら嬉しいです。

ファーストアラート・上

陸サイト

俺が機動六課に協力するようになり数日が過ぎた。あれ以来何事もなく平和な日常が続いている。そして、今日もなのはによるFW陣の訓練が続いている。

訓練場 廃墟

俺は朝早くから訓練しているのはとFW陣を同じ訓練場のビルの屋上から眺めている。

「はい、せいれーつ」

バリアジャケットを着たなのはに呼ばれて、スバル達FW陣は服をボロボロにしながらも集まった。

「じゃあ、今日の朝の訓練ラスト一本。みんなまだ頑張れる？」

「」「はい。」「」

なのはの問いに元気よく答えるFW陣に満足そうに頷く。

「じゃあ、いくよ。シュートイノベーションをやるよ。レイジングハート。」

〈A I I r i g h t A c c e l S h o o t e r〉

レイジングハートから15個の魔力弾が出現したのはの回りに展開されるその光景にFW陣の顔に緊張がはしる。

「私の攻撃を五分間回避するか、私にクリーンヒットできればクリア。誰か一人でも被弾したら最初からやり直しだよ。それじゃ、頑張っている。」

「」「はい。」「」

元気な声で返事をするFW陣に、同時にティアナがみんなに質問する

「このボロボロな状態で五分間なのはさんの攻撃を捌ききる自信ある？」

「ない。」

「同じくです。」

ティアナの質問に即答するスバルとエリオの二人

「じゃあ、何とか一発いれよ。」

「はい。」

キャラが返事をするときティアナは笑顔で返す。
そしてなのはがFW陣を見渡す

「じゃあ、準備はOKだね。それじゃレディ・・・・・・・・」

なのはは真剣な顔つきで右手を振り上げ、FW陣も真剣な顔つきでそれを見守り。

「ゴーーーーーッ」

なのはが振り上げた右手を降り下ろすと同時に回りに展開していた魔力弾をFW陣めがけて放つ。

「全員回避、二分以内に決めるわよ。」

開始と同時にスバル達に指示を出すティアナに

「「「わかった。」」」

スバル、エリオ、キャロが答え全員がバラバラになのはの魔力弾を回避できるように動き出す。

ドカアアアーーーーン

「朝から元気だなアイツらは若さってヤツかな。」

なのは達がいる場所からかなり離れたビルの屋上にも響いてくる爆音を聞き、自分の修行をしながらもなのはとFW陣の元気のよさに感心する。

「なにを言っているんですか~~~~。なのはさん達より一番元気なのは陸さんじゃないですか~~~~。」

「そうか、リイン？」

俺の隣に浮いているリインがゲンナリした声で言うのが、俺にはさっぱりわからない。

「俺よりなのは達の方が頑張っているだろう？」

「嘘ですよ。あなたがきた次の日から、朝からランニング30キロしかも重りが200キロつけて、それが終わったらビルの壁を穴だらけにするほどの抜き手の練習ほかにも危ない練習の連続、極めつけは。」

リインは俺のしている事が信じられない顔つきで話す。

「どうして貴方はビルのふちを全力で走っているんですか。」。

「なんでって、これは師匠達から習った完全なる重心力の反復練習

だが。」

俺は10階のビルのふちをさつきから何周も全力で走っているに
関わらず息切れせず普通にラインに話しかける。ラインは話しながら
俺のまったくぶれない重心にラインは驚くがそれ以前に

「あ、危ないですよ。せめて魔力で体を守ってください。」

「なに言っているんだ、そんな事したら修行にならんだろうが。」

そう言いと俺はビルから飛び降りた。

「ま、魔法も使わないでな、なにやってるんですか——!!」

ラインはビルから飛び降りた俺に慌てて魔法をかけようとするが

「要らねーよ!」

俺の強い否定の言葉にリインは魔法を使うのはためらっていると

「よっ、たあ、とお。」

俺はビルの排気口のカサや縦どい、窓ガラスのわずか隙間などに足や手で掴み、残り5メートルほどの高さで地面に降りて上を見る

「壊れた箇所なし、なまっではいないみたいだな。」

自分が掴んだ排気口や縦どい、窓ガラスの隙間が壊れていない事を確認していると、リインが飛んできた。

「危ないですよ。見ているこっちの事も考えてください、心臓が止まるかと思いましたくくく。」

「悪い悪い、でもこれくらい朝飯前だぜ、本当はもっと高い所から飛び降りるもんだ。」

「ふえゝゝゝ、本当にですか。魔法も使わないで凄いですゝゝ。」

リインが感心した目で俺を見てると一際大きな爆発が響いてきた。

「あっちも終わったみたいだな、リインも毎朝付き合わせ悪いな、俺はなのは達と合流して朝飯にいくけどリインはどうする。」

「はい、それではリインは朝の仕事に戻ります、またです陸さん。」

「おう！」

俺は仕事があるというリインと別れは、なのは達は隊舎に向かうのが見えたので俺も、なのは達と合流するために隊舎に向かった。

隊舎前

「おい、なのは、みんなー」

俺はなのはやFWのメンバーが見えたので声をあげながら走っていき、なのは達も俺に気がついたのか立ち止まり挨拶する。

「おはよう。陸君」

「「「おはようございます。」「」「」」

なのはが挨拶するとスバル達も元気よく挨拶する。そしてなのははスバル達の方を向く

「じゃあ、一旦寮でシャワーを使って、着替えてからロビーに集合。」

「「「はい」」」

なのは出した指示に答えるFW陣。

「なのは、なんかあったのかスバル達なんか嬉しそうな顔してるが？」

「うーん。それは見てのお楽しみかな、陸君もきなよびっくりするよ。」

「そうなのか？」

「うん！」

なのはは笑顔で俺に返事をする。と隊舎に向かいあるきだし、俺とFW陣もなのはに続き隊舎に向かおうとした時、俺の耳に車のエンジン

ンの音が聞こえ後ろを振り向く、不思議に思ったのかつられてティアナ振り向くと

「・・・・あの車って？」

「誰だ？」

俺とティアナの言葉にスバル達も車にきずき振り向くと、黒いスポーツカーが俺達に近づいてきて俺達の前で止まり車から中から運転手にフェイトがはやては助手席に座っていた

「なんだ、フェイトにはやてか。」

「なんだは少し酷い言いぐさだよ、陸君。」

「そやそや、陸君はもう少し言葉使いを直した方がええで。」

俺の呟きにフェイトとはやてが少し怒った表情で言うが俺の横で

「おはようございます。フェイトさん、八神部隊長。」

キャラが元気よく笑顔で挨拶する

「うん、おはようキャラ。」

フェイトがキャラの挨拶に笑顔で返す。

「すご〜い。これフェイト隊長の車だったんですか？」

「そうだよ。地上での移動手段なんだよ。」

スバルの質問にフェイトは答える。

「フェイトけっこういい車だな、高くなかったか？」

「ううん、そこまで高くなかったよ。」

俺の質問に首を横に振りながら答えるフェイト。

「そういえば、陸君、練習の方ははどうないかんじや。」

「ああ、悪くないこれならいつどんな敵がきても戦える。」

俺の返事にはやては満足そうに頷くと、視線を横にむけFW陣を見る。

「みんなの方ははどうい？」

はやての質問にスバルは苦笑いで返し

「ははは・・・・・・・・」

「頑張っています。」

エリオはスバルにかわりに真剣な顔で答える

「エリオ、キャロ、ごめんね。私は二人の隊長なのにあんまり見てあげられなくて。」

「いえ、そんなフェイトさん。」

「大丈夫ですフェイトさん、陸さんもいますから。」

フェイトは悲しい顔でいうが、エリオとキャロはフェイトに悲しい顔をさせないように元気よく笑顔で答える。二人の表情を見たフェ

イトが、次に俺を見る。

「陸君、エリオとキャロの事助けてあげてね。」

「当たり前だ、子供を守るのは大人の仕事だ。」

俺はフェイトの願いに答えると同時に、エリオとキャロの頭を軽く撫でる

「「えへへへへへ」」

二人は俺に撫でられながら嬉しそうな顔をしていると、なのはが微笑しながらみんなの評価を言う

「四人ともいい感じでなれてきてるよ、いつ出勤があっても大丈夫、それに。」

なのはが俺を見ながら笑顔で言う。

「今は、陸君もいるしね。」

なのはの言葉を聞いたはやては満足そうな顔で頷く。

「そっか、それは頼もしいな。」

「「「へへへっ」「」」

はやてに誉められスバル達は照れくさそうに笑った。

「二人は何処かにお出かけ？」

「うん、ちょっと六番ポートまで。」

「教会本部でカリムと会談や、夕方には戻るよ。」

「私は昼前には戻るからお昼ご飯はみんなと一緒に食べよか。」

「」「はい」「」

フエイトの提案に頷くスバル達、俺はそんなスバル達と背を向けてシャワー室に向かおうとするとはやてが話しかけてきた

「忘れるところやった、陸君ちよつとええか？」

「なんだはやて何か用か？」

俺はシャワー室に向かおうとした足を止め、はやての方を向く

「教会本部のカリムが陸君に会いたいみたいやから一緒にきてくれへん。」

「ああ、わかった。」

「でも、はやてちゃん陸君今訓練が終わったばかりだから、シャワー浴びてたら、スバル達の新しいデバイスを見てもらおと思っただけだ。」

なのはの指摘にはやては改めて俺の格好と、時計を見て考える

「うーん。陸君はどうしたいん？」

はやてが悩みながら聞いてくるので

「まあ、シャワーを浴びるのは当然だが、俺のデバイスは無いわけだしスバル達のデバイスは今度の訓練の時に見せてもらうから気にしないでいい。」

「そっか、おおきにな。フェイトちゃんも少し待っけどええか。」

「うん、私ははやてがいいなら、でもはやても連絡位した方がいいよ。」

「そうやな、陸君がシャワーを浴びている間にカリムに連絡しとくか。」

はやてはカリムのところに連絡するため空中にディスプレイを出現させ操作し始めた。俺はそんなはやてを見て改めてシャワーを浴びに行くため歩き出す。

「じゃあ、30分後ぐらいに再集合でよろしく。」

「「うん」」

はやてとフェイトの仲良の良い返事を聞くと俺はスバル達とシャワー室に向かった

20分後

「おーい、フェイトはやてーい。」

俺は隊舎から走ってフェイト達の方に向かう

「悪いな待たせて。」

「ううん、まだ20分位しかたってないよ。」

「そやな、まだ20分位やな。」

「そっか、急いできた甲斐があったな。」

俺はフェイトやはやてを余り待たせては悪いと思って急いできたからのせいか髪が少し濡れていたので頭を振って水滴を飛ばす

「そんな急いで来なくてもよかったのに。」

フェイトは申し訳なさそうな顔で呟く。

「気にするな………で俺はどこに乗ればいいんだ、まさか走ってついてこいなんて言わないよな。多分ついては行けるが。」

フェイトのスポーツカーを見ながら、俺はフェイトとはやてに質問する

「そんなわけないよ………って走ってついてこれるの陸君。」

フェイトがビックリしなから俺に聞いてくるので

「多分な、疲れるからしたくないけど。」

「はあ、相変わらずすごい人やな陸君は。」

はやては感心しながら呟く。

「でも、さすがに走ってついてくる必要はないよ。」

フェイトはそう言うと、車に簡単な魔法をかけると後部が変形し座席が出来上がる

「すごいな、これは魔法か？それともフェイトの車だからできるのか？」

「さあ、どっちかな？」

俺の質問にフェイトは答えをはぐらかし笑うと、助手席に座っていたはやてが

「さあ、行くと陸君も乗った乗った。」

と急がせる。

「へいへい。」

俺ははやてに急かされて車の後部座席に乗り込む。

「それじゃあ行くね、陸君シートベルトしてね。」

フェイトは俺が乗った事を確認すると、車はゆっくり走り出した。車が走りだして暫くして俺は改めてはやてに質問する。

「はやて聞きたいんだが、騎士カリムってどんな人なんだ。」

「聖王教会騎士団の魔導師、管理局本局理事管カリム・グラシア私も合った事ないけど。」

「理事管って偉いのか？」

「うん、偉いよ。それではやて、カリム・グラシアってどんな人なの」

フェイトは車の運転しながら俺の質問に答えはやてに聞く。

「そうやったね」。陸君もフェイトちゃんも知らなかったな。」

「はやてはいつから。」

「うーん。私が教会騎士団の派遣で呼ばれた時で、ラインが生まれたばかりやから、・・・・・・8年位前かな。」

はやては軽く考えこんでから答える。

「カリムと私は信じているものも、立場もやるべき事も全然違うんやけど、今回は二人の目的が一致したからな、そもそも六課の立ち上げは事実的な部分をやってくれたのはほとんどカリムなんよ。」

「へへへ、そうなんだ」

「お陰で私は人材集めに集中できたし。」

フェイトははやての言葉に感心しながら聞いていたが、俺ははやての言葉に疑問を感じる

「で、はやてそんな偉い人が何で一次元漂流者でしかない俺に会いたいんだ。」

「陸君は管理局で唯一の味方の神器使いやからな合っておきたいんやろ。」

はやてからは妥当な答えがかえってくる。

「信頼できる上司って感じかな。」

「うん。仕事や能力は凄いけどあんまり上司ちゅう感じはしなへんな、どっちかって言うとお姉ちゃんて感じやな。」

「なるほどね。」

「そっか。」

俺は少しの疑問を持ちながら答え、フェイトは納得して答えた。

「フェイトちゃんには今回は無理やけど、レリック事件が一段落したら紹介するよ。」

「うん、楽しみにしてる。」

フェイトは笑顔で答えた

ファーストアラート・上（後書き）

次はファーストアラート・下です。よろしくお願いします。

ファーストアラート・下（前書き）

駄文ですみません。これから読んでくれると嬉しいです

ファーストアラート・下

ミットチルダ北部

ベルカ自治領聖王教会

大聖堂前

「ここが聖王教会大聖堂か、でかいなまるで城だ。」

フェイトとは六番ポートで別れた後、はやてに車を運転してもらいここまで来た俺は、聖王教会大聖堂を見た感想を言う

「そやなく、私も初めてきた時はビックリしたよ。」

はやてはそう言いながら門をくぐり中に入っていく、俺はそんなはやての後を歩いていると、ケープを被った中年の男が話しかけてきた

「騎士はやてと騎士陸でございますか？」

「そうや。」 「ああ。」

俺とはやてが返事をするとか中年の職員の男は懷から二枚のケープを出した

「ここでは、管理局の制服は目立ちますので、上に羽織ってください。」

俺とはやては職員の男の言う通りケープを羽織る

「それでは、カリム様の部屋にご案内します。」

「おおきにな。」

「悪いな。」

こうして俺とはやては騎士カリムの部屋に移動した。

カリムの部屋

俺とはやては職員に案内された部屋に着くとはやてはコンコンと軽くノックすると部屋から綺麗な声が聞こえる

「どうぞ」

「失礼します」

俺とはやては言葉に従い部屋のドアを開け部屋に入りケープを取る。

すると声と同じ美しい女性がこちらに歩いてきた優しそうな顔、腰まである綺麗な金髪を紫色をしたリボンでカチューシャのようにまとめている

「カリム久しぶりやな。」

「はやていらっしやい。」

二人は親友のように挨拶を交わすしいる時、俺はビクリしていた。

（こんな若い女性が管理局理事管、たしかにはやてから上司ではなくお姉さんみたいとは聞いていたがこんなに若いとはな。）

俺がカリムを見て驚いていると、カリムも俺に気がついた。

「はやて、彼が噂の。」

「そうやカリム、彼が今の管理局で唯一味方になってくれた神器使い藤田陸君や。」

「藤田陸です。よろしくお願いします。……おと俺は敬語とかは苦手なんでタメ口でいいか？」

俺の言葉を聞いたカリムは一瞬驚いた顔をしたがすぐに微笑み笑顔になる

「聖王教会騎士団の騎士カリム・グラシアです。大丈夫、私も敬語が苦手なもの、気にしないでいいわ。」

「そりゃ、どうも。」

俺が、軽くお辞儀をするとカリムは微笑えんだ

「陸君にはやて、立ち話もなんだから向こうのテーブルで紅茶でも飲みながらお話ししましょう。」

「ああ。」 「ええな。」

俺とはやてが返事を聞いたカリムが優しく微笑み俺達三人はテーブルまで歩きに座った。

「ごめんな、すっかりご無沙汰してもうて」

「気にしないで、部隊の方は順調みたいね。」

「カリムのお陰や。」

はやてとカリムが姉妹のように話しているなか、俺は出されたお菓子を食べていた

「そういう事にしておくとお願いしやすいかな。」

「なんや、今日あって話すのはお願い方面か。」

はやては笑いながら話すが、カリムは優しく表情から真剣な表情に変えたと空中にディスプレイを出現させ操作する

「なんだ。」

いきなり窓のカーテンが降ろされ、ライトが消え辺りが暗くなり、俺達前にディスプレイが展開される

「これは新型ガジェット？」

空中にあるディスプレイは俺が初めて倒した楕円形ガジェットのほかにも小型の飛行機のようなガジェットと円いガジェットが映し出される。

「ええ、？型以外に新しいのが二種類、戦闘性能はまだ未知数だけど。」

カリムはディスプレイを操作して円いガジェットが映っているディスプレイを大きくする

「？型はわりと大きめね。」

カリムはディスプレイに映る？型ガジェットと人間を比べた、俺はそのディスプレイに映っているガジェットを見て感想を言う

「だが、どんな大きかろうと所詮ガラクタだろ、敵にたりえるのか？」

「まあ、陸君から見れば敵にならんやろ。……でもなスバル達で戦った場合。」

「……まあ、たしかに戦闘性能がわからない敵を今のレベルのスバル達と戦わせるのは危ないな。」

俺ぐらいに強くなればどんな奴と戦っても、戦いながら敵の弱点や癖などが分かるがスバル達ではかなり難しい

「それと本局には、まだ報告していないわ。監査役のクロノ提督にはさわりだけ教えたけど。」

はやてとカリムが話している時、俺は空中に並んでいるディスプレイを見ながら、一つだけガジェットではなくアタックケースのようなディスプレイを見つけ質問する。

「カリムこれは。」

俺がアタックケースが映っているディスプレイを指差すと

「それが今日の本題、一昨日付けでミットチルダに運び込まれた不審貨物。」

「レリックやね。」

「レリックって、このアタックケースみたいなやつに入っているのか？」

二人は見ただけでレリックと分かるようだが、俺にはわからなかった

「その可能性が高いわ？型と？型が発見されたのも昨日からだし。」

「ガジェット達が、レリックを見つけ出す予想時間は。」

「はやければ今日か明日」

カリムの言葉にはやては顎に手を付け難しい顔をした

「どうかしたのかはやて何か気になる事があるのか？」

「いやな、陸君レリックが出てくるのがちよい早いような気がしてな。」

俺の質問に曖昧に返すはやてにカリムが言う

「だから、あつて話しをしたかったの、これをどう判断すべきか、どう動くべきか。」

自分だけでは簡単には判断できない問題にカリムは緊張した声を出した。

「それに、レリック事件のあとに起こる事件に対して対処を失敗する訳にはいかないもの。それにこちらの問題もあるのに。」

カリムはガジェットやレリックが映っているディスプレイを消して、新しいディスプレイを出す。

「これは、神器使いか。？」

ディスプレイに映し出されたのは、茶色の髪をしたイケメンな優男が映し出された

「こいつがどうかしたのかカリム。」

俺はカリムに質問するとカリムは悲しそうな顔をした

「ここに映し出された男は聖王教会の騎士50名に重軽傷を負わせた男です。」

「うそや。」「へえっ。」

俺とはやてはお互い違う反応をした

「どういう事やカリム、私はそんな報告きいてへんで。」

「おちついてはやて、私も昨日シャツハから聞いたばかりなの。」

はやては聞いた事のない情報をに驚きを隠せないでいる

「で、カリムそのディスプレイに映っている優男はどんな神器使이었다んだ。」

「えっと、その、じつあ……………」

なかなか話さないカリムに不思議な顔をしていると

「すみません。実はわからないんです。」

いきなり謝った

「えっと、わからないってなんで、騎士が50名もやられたんだろ、なら間違いなく神器使いだ戦った騎士からどんな武器でやられたのか聞けば良いだけだろ。」

「そうなのですが、・・・・・・・・全員いきなり足もとが霧に包まれ、気がついたら剣でやられた事しか覚えていないらしく。」

「霧り包まれた？なんでそんなに覚えていないんや。」

はやてはカリムの話しを信じていないのか疑問の声をあげるが、俺は驚きながらドライグに話しかける

（ドライグ、霧ってまさか。）

【間違いなく絶霧ヘデイメンション・ロスト〱だよ相棒。〱】

絶霧ヘデイメンション・ロスト〱神器の中でも上位神滅具ヘロンギヌス〱の一つだ。結界系の神器の最強、所有者を中心に無限に展開する霧。そのなかに入ったすべての物体を封じることが、異次元に送ることすらできる。それが禁手に至ったとき、所有者の好きな結界装置を霧から創りだせる能力――『霧の中の理想郷』ヘデイメンション・クリエイト〱なる

（マジかよ、なんで上位の神滅具がもうこの世界にあるんだよ。）

【わからん。だが、白龍皇の奴は我々をこの世界に呼びだすために膨大な数の人間をこの世界に召喚したわけだ、我々より早くこの世界に呼び出されたと考えるのが妥当だろう。】

（クソが、厄介な奴が敵に回ったもんだぜ）

ドライブと心の中で話していると、はやてが話しかけてきた。

「陸君、難しい顔しているけどなにか知ってるん？」

「いや、すまない。そんな神器は聞いた事ない。」

とっさに嘘をついてしまったが仕方ない俺はまだそこまで管理局を信じていない。

「そっかあ。」

はーっとため息をつきはやては軽くがっかりしたが、すぐに気を直してディスプレイを操作をすると窓からカーテンが上がり、電気がつき部屋が明るくなる

「はやて?」

カリムは不思議そうな顔ではやてを見ると、はやては笑顔でカリムを見返す

「まあ、なにがあってもきつと大丈夫、カリムが力を貸してくれたおかげで部隊はいつでも動かせる。即戦力の隊長達に勿論、新人達FWも実戦可能、予想外の緊急事態にも対応できるしだができて、それに今は陸君もおるせやから大丈夫。」

はやては機動六課のみんなを信じて疑わない顔をしてカリムを見ているが俺の心には不安がある

（果たして、そう簡単にいくだろうか？）

敵には白龍皇に絶霧と二人の神滅具に剣を使った神器使いは確実にいる

（それに、今も白龍皇はこちらの世界に神器使いをよんでいるかもしれない。）

【いくら考えてもわからんぞ相棒。今はできる事を一つ一つ確実にやっけていくしかないだろう。】

（ああ、わかっているさドライグ。）

ドライグはそう言うが、俺には何か悪く予感がして顔を歪ませ、はやてとカリムはそんな俺を見て不思議そうな顔をしていると

ビービービービービー

突然アラームが鳴り響いた。

陸サイト終了

なのはサイト

デバイスルーム

ビービービービービー

F W陣に新型デバイスの説明中に急に鳴り響いたアラーム

「このアラームって」

「二級警戒態勢」

スバルとエリオがアラームに対して驚き声をあげる

「グリフィス君」

「はい、教会本部から出動要請です」

私の声にディスプレイ越しに答えるグリフィス君そして、グリフィス君の横にはやてちゃんが映るディスプレイが展開される

「なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君こちらはやて。」

「うん」

「状況は」

フェイトのディスプレイも現れ、はやては状況を説明する

「教会本部調査部で追っていたレリックらしき者が見つかった。場所はエイリム山岳丘陵地区対象はリニアレールで移動中。」

「移動中って」

「まさか」

私とフェイトちゃんは驚き同時に声をだす

「そのまさかや。内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われている。リニアレール車内のガジェットは最低でも30体、大型や飛行型の未確認のタイプも出てくるかもしれない。いきなりでハードな出動や、なのはちゃん、フェイトちゃん行けるか？」

「私はいつでも」

「私も・・・・・・・・でもはやて、陸君はどうするの？」

フェイトちゃんが陸君の事を心配してはやてちゃんに聞くと、

「安心しろフェイトなのは、俺も遅れずにそちらに向かう。」

はやてちゃんのディスプレイに陸君が現れる

「うん。よろしくね、陸君。」

フェイトちゃんは笑顔で返事をする

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロみんなもオツケーか？」

陸君を押し出して再びはやてちゃんが現れ、FW陣に確認する

「」「はい。」「」

「よし、いい返事や。シフトはAー3、グリフィス君は隊舎での指揮、リインは現場管制、なのはちゃん、フェイトちゃんは現場指揮」

「「「はい。」「」」

はやてちゃんは機動六課のみんなに指示をだすと椅子から立ち上がる

「ほんなら、機動六課FW部隊出動！」

「「「「はい。」「」」」

「了解、みんなは先行して私もすぐ追いかける。」

フェイトちゃんはそう言うとディスプレイが消えた

なのはサイト終了

陸サイト

カリムの部屋

はやては再びケープを被りドアを開ける

「シャツハ、はやてを送ってあげて機動六課の隊舎まで最速で。」

「かしこまりました、騎士カリム。」

カリムはディスプレイ越しに指示をだすとはやてと向き合う

「聖堂の裏にでて、シャツハが待ってる。」

「おおきになカリム、紅茶美味しかったよ。陸君もいくよ。」

「まてはやて、そのリニアレールまでどれぐらい距離があるんだよ。」

俺がはやてに質問するとなぜかカリムが答える

「ここから約60キロのところよ。」

「約60キロか、・・・・・・・・ってことは俺のスピードで約60秒か。」

カリムの答えを聞いてぶつぶつと呟く

「陸君、どうかしたんか？」

ぶつぶつと呟く俺を心配してはやてが俺の肩めがけて伸ばす手をかわし

「悪いなはやて俺は、このまま現場にいかせてもらう。」

「へっ？」

一方的にはやてにつたえると俺は窓を開けて外に飛び出した

「いくぜ、相棒！」

【まかせろ】

『Welsh Dragon Balance Breaker』
へウエルシュ ドラゴン バランス ブレイカー〜

赤い閃光に包まれ、オーラが鎧を形成される

「よし、いくぜ。ドライグ。」

俺は赤いドラゴン翼を展開し、背中のブースターを噴かし、赤い流星のように現場に向かった

「映像で見たけど、あれが赤龍帝の鎧………赤く美しい鎧。あれがドラゴンの色なのね。」

カリムは赤い流星をみてうっとりした顔で呟いた

ファーストアラート・下（後書き）

次は星と雷と龍帝 上 です

星と雷と龍帝 上（前書き）

かなり遅れての更新すいません。駄文ですが読んでくれると嬉しいです。

星と雷と龍帝 上

陸サイト

上空を高速で移動中

禁手になり聖王教会本部から出て空を飛行して約30秒ほどたち現場までもう少しと思っていると今から向かう現場の方角から何か飛んで来る

「なんだ、何かが飛んで来るのか。」

目を凝らして前方を見ると、カリムが言っていた飛行型のガジェツトが300体と、黒い色をした体長10メートルはありそうな大型の鳥が430匹ほどこちらに向かって来る

「あれがはやてとカリムが言っていたガジェツトと二型か、黒い鳥の方もアンノウンだが大した強さも魔力も感じない。はっ、あんなガラクタと鳥風情で俺の足止めできると思ったか」更にスピードを上げ両腕に膨大なオーラを纏い敵に突貫していく

「いくぞー！ー！。雑魚どもがー！ー！ー！ー！。！」

赤い流星は突貫し、ガジェットはビームのような魔力砲を放ち、黒い鳥は口から炎を放つ、両者が激突した瞬間に、無数の花火のような爆発が空に上がった

陸サイト終了

フェイトサイト

車の運転をしつつ、ロングアーチからの情報に耳を傾ける。

「問題の貨物車両、速度70を維持、依然進行中。」

「重要貨物室の突破はまだされていないようですが。」

「時間の問題か。」

グリフィス君がこの事態をどうしたらいいか、悩んでいると、ビーと新たなアラームが鳴り響いた

「アルト、ルキム広域スキャン、サーチャー空へ」

シャーリーに言われ二人がディスプレイを操作すると、新たなディスプレイが出現し映像がでる

「これ、ガジェット反応、空から。それに黒い鳥のようなアンノウンが多数。」

「航空型、アンノウン現地観測隊を捕捉。」

ロングアーチから聞こえてくる情報に少し焦りを感じていると、ちょうどパーキングエリアが見えてきて、車をそちらに走らせる

「こちらフェイト、グリフィスいまパーキングに到着、車止めて現場向かうから飛行許可お願い。」

「了解。市街地個人飛行承認します。」

「うん。」

車を止めて、外に走り出そうとする前に、グリフィス君に陸君の事を聞く

「グリフィス君、陸君は今どこにいるの。」

「デバイスを持っていないので正確な位置まではわかりかねますが。」

目の前にディスプレイが現れ、地図が表示され赤い点が動き回っているのが分かる。

「空からの広域スキャンした結果、リニアレールから約30キロ離れた場所で敵と交戦中だと思われます。」

「陸君は無事。」

「大丈夫だと思われます、敵に対して一方的に攻撃し数を急激に減らしています。」

ディスプレイを見ると、グリフィス君が言った通り遠方で見にくくはあるが、一方的な戦いになっているがわかる。しかし、ガジェット以外にも陸君が戦っている黒い影のような鳥が見える

「グリフィス君、陸君が戦っているこの黒い鳥はなに？」

「解りません。いま解析中ですが、ただ彼と交戦中だということとは、敵だと思われます。」

黒い鳥はディスプレイ越しに見てもかなり大きくスピードも遅くはないし炎を放つが、陸君はまるで赤い流星のようで目視できないレベルのスピードで攻撃をかわしガジェットと黒い鳥を次々に倒していく姿を見て安心する

「そうだね。あれなら大丈夫。」

そう言いながら私は走りだし、10年以上の自分の相方バルディッシュをポケットから出す

「いくよ。バルディッシュアサルト。セットアップ」

〈yes get set〉

バルディッシュの声が響いた瞬間、私の体が黄色の魔力に包まれ、黄色の魔力が収まるより早く、バリヤジャケットを着た私は空に舞い上がった

「いくよ。バルディッシュ。」

〈yes sir〉

「ライトニング1、フェイト・テッサ・ハラオウン行きます。」

さらに速度を上げて空を飛び、高度も上げ雲を抜き現場に向かった。

フェイトテッサ終了

陸サイト

上空でガジェット2型と黒い鳥のような敵と戦い始めて20分以上が経過した

「ウゼー。なんなんだコイツらは、攻撃してきたのは最初の方だけでさっきなら逃げえばかり。しかも。」

空に浮かびながら、俺の周りを旋回するばかりで一向に攻撃をする気配のないガジェットに文句を言う。

「倒した数が両方200を越えてから、攻撃しなくなって回避ばかりする専念するし、俺を足止めするのが目的が見え見えなんだが。」

軽く右腕を振るい赤い魔力がこの場から逃げようとしていたガジェット6機ほどがいる方角に放ち、6機のガジェットは当たりまえかのように当たり爆発し空に散った

「こっちが攻撃しないでいると、教会本部の方角に逃げようとするから逃がす訳にもいかん。」

そう言いながら、今度は左腕を振るい7機のガジェットを消し飛ばすと、遠くから魔力の奔流が感じられる

「この魔力はフェイトとなのはか、という事はFW陣はもう現場に着いたか、なら俺もそろそろ軽く本気をだして急ぐとするか。」

そう呟くと、黒いはずの自分の目がまるで綺麗な海のような蒼い色に変わり魔力が急激に増大しはじめる

「じゃあ、いくぜ。まずは軽く1秒を10秒にするか」

『時間加速へクロックアップ』

その言葉を唱えた瞬間に、さっきまで飛んでいたガジェットと黒い鳥の数がみるみるうちに減っていく、ガジェットと黒い鳥はろくに逃げる事もできずに殴り、蹴られガジェットは爆発し、黒い鳥は消えていく

「うむ。このままのペースなら後3秒ほどでかたずくな。」

時間加速しながら次々に敵を倒しながら呟く

『時間加速』

藤田陸が持つ神眼の力の一部。敵の動く1秒の間に10秒の動作ができる。つまり、動作の全てが10倍の速度になっている。しかし、『時間加速』の恐ろしさはそれだけではない。通常、速く動けば動くほど、体力は消耗するし足周りも悪くなる。急な制動や方向転換もききにくくなる。しかし、『時間加速』は陸自身の時間そのものが加速しているため、陸は自らになんの無理させることなく、圧倒的な速度を得られるのだ。そして、物体の持つエネルギー量は速度

に自乗比例する。つまり、速度が10倍になればその威力も増大する。つまり攻撃力そのものが何倍にも上がっているのだ

「終わりだ」

最後に残っていたガジェット群10体ほどを殴り飛ばすと、ドンドンドンドンと軽い爆発が起き、周りに敵が残っていない事を確認する

「やれやれ、雑魚が粘りやがって、結構時間食ったな先を急ぐか。」

再び背中ブーストを噴かしなのはやフェイトがいる場所を目指す

「待ってろよ、みんなまいくからよ」

魔力を背中に回しブーストをさらに噴かしスピードをあげる。
空気をさき、雲を抜けて30秒ほど経過してようやくガジェットと黒い鳥と戦っているのはやフェイト達と合流した

「すまないな、なのは、フェイト少し遅れた。」

「陸君」

二人がビックリしながら同時に返事をしつつ、なのはは桜色の魔力弾でフェイトは黄色の魔力で作った斬撃でガジェットを倒しているので、俺も赤い魔力を放ち一緒に倒し始める

「陸君、大丈夫？ 700機位のガジェットと黒い鳥と戦っていたけど。」

「多少時間を使ったが問題ない。それよりFW陣は無事か。」

なのはの心配に答え、周りを見渡すと暴走しているリニアレールが見え、初陣のFW陣が苦戦しながら練習通り頑張って一型ガジェットを倒している姿が見える

「順調そうだな、俺が手助けするまでもないか………なにかおかしくないか。」

暴走しているリニアレールに微かに違和感を感じ、フェイトに呼びける

「フェイト、今リニアレールの速度と少し前のリニアレールの速度同じかどうかロングアーチに聞いてみてくれ。俺の見た限りこのリニアレール少しずつだが速度を上げてるぞ。」

「うん、了解。ロングアーチこちらライトニング1フェイト、シャリー陸君がリニアレールの速度が上がっていないか聞いてる。どうかな？」

「待ってください、いま調べます。」

フェイトがガジェットを倒しながら、ロングアーチに連絡し、その答えを待っていると

ドゴン!!!!

リニアレールから派手な音が聞こえ、その方角を見るとエリオが3

型ガジェットに吹き飛ばされ、崖したに墜ちている光景が見え、キヤロもエリオに続き崖したに飛び出した

「な、なにやってんだあいつらは。」

驚きながらも、眼を黒から蒼に変えエリオとキヤロがいる場所の距離を確認し『時間加速』をして二人を助けようとする、なのはが手で制した

「待って陸君、エリオとキヤロなら大丈夫。」

「何が大丈夫なんだよなのは、あのまま崖から落ちつづければいくらなんでも助からんぞ。」

「大丈夫。陸君には関係ない話しだけど、A・M・Fフィールドは距離が遠くなればなるほど効き目が薄くなる。使えるよフルパフォーマンスの魔法が。」

なのはが強気なセリフを言うと同時に、キヤロの魔力と小さい竜フールドの魔力が上昇しはじめると、崖から落ちていた三人がピンク色の魔力で包まれ、次の瞬間中から大きくなったフリードとフリードに乗るエリオとキヤロの姿があった

「なるほど、あれが本当のフリードの姿って訳か。なかなか格好いいじゃないか。」

「うん。あれがキャロの竜魂召喚のスキル。」

ギヤオオオオーとフリードは雄叫びをあげながらエリオとキャロを乗せてリニアレールにいるガジェット二型に迫って行った

「あれならエリオ達は大丈夫そうだな、じゃあ、あっちがかたずく前にこっちも片付けるか。」

再び両腕に赤い魔力を増大させ、黒い色の眼が蒼い色に変わり、『時間加速』を使い未だに残っているガジェットを倒そうと見据える。

「なのは、フェイト離れてな。俺が終わらせてー。」

「待って陸君、周りの様子がおかしい。」

なのはの静止の言葉に『時間加速』を一時中断し周りを見る。すると、周りからたくさんの魔法陣が出現した

「な、なにこの魔法陣、こんな魔法陣私見たことない。」

「かなりの魔力を感じる、何かくるの？」

見たことのない魔力陣とその多さを見て動揺するなのはとフェイトに注意する

「しっかりしろ二人共、お前達が動揺したら部隊は全滅だ。」

“全滅”という言葉聞いた二人の表情が強張り、どうすればいいのかが解らないまるで泣きそうな子供のような目を向けてきた

「大丈夫だ、この魔法陣は俺の世界の転送魔法で転送されるのに多少時間がかかる。まずは目の前のガジェットと黒い鳥を集中して倒し、後に転送されてくる敵も倒せばすむ話だろうが。」

俺はごくあたり前のこと言っただけなのに、なのはとフェイトは泣きそうな顔を一転、嬉しそうな顔をして微笑む

「うん。わかったよ。陸君。」

なのはとフェイトはまだ少し動揺しているが、残っているガジェット

トを効率よく倒していく。

「レイジングハート。」

「バルディシュ。」

桜色の魔力と金色の魔力が、ガジェット二型を花火をするかのよう
に連続で倒していく。

その姿に多少安心して自身もガジェットを倒すべく突貫しようとする
と目の前にディスプレイが現れる

「陸君、こちらロングアーチのはやてや、陸君の言った通りみたい
やあのリニアレール少しずつ速度が上がってきとるいまだいたい8
5キロぐらいやな。」

「だったら、俺に連絡なんかしないでFW陣に連絡して制御室を
確保、のち少しずつ速度を下げればいいだけの話だろうが。」

「そうなんやけど、FW陣と一緒にリインが現場管制でリニアレール
に入ったんやけど、さっきから連絡してるんやけど返事がないん
や。」

「なんだと、マジかはやて。」

改めてリニアレールを見て自身を中心に探索領域を広げるが、リイ

ンの魔力も気配も感じない

「まさか、本当にいるのか絶霧の神滅具使いが。」

焦りが少しずつ生まれリンの安否が気になり、急いでリニアレー
ルに移動しようとブーストを噴かそうとすると

「陸君、魔法陣の魔力増大なにか来ます。」

いきなり目の前にデイスプレイ越しのフェイトが現れて警告するの
で、魔法陣の方角を見る

「チッ、厄介な奴が来やがった。」

魔法陣から出てきたのは、さっきの黒い鳥と同じだが大きさは15
メートルはありそうな竜が魔法陣の数だけ転送されてきたのだった

星と雷と龍帝 上（後書き）

次は星と雷と龍帝 下
です。少しでも速く更新します。

星と雷と龍帝 下（前書き）

なんとか出来ました。駄文で誤字、脱字があると思いますが気にせず読んでください。

星と雷と龍帝 下

フエイトサイト

魔法陣から現れた黒い竜は全部で30匹、さっきまで戦っていた黒い鳥より強そうに見えた

「陸君、この竜ってなんなんですか？」

「さあ、姿形だけを見れば龍王のひとり魔龍聖へブレイズ・ミーティア・ドラゴン」にそっくりだが、魔龍聖はこんなに弱くないからな、単なるモンスターだろ。」

「そうなのかな、単なるモンスターにしては、強そうだよ。」

初めて見る敵に少し弱気になっているのはに、

「びひんなよなのは、こんなモンスターでかいだけの木偶の坊よ。」

陸君はなのはを不器用に励ますと、竜はガアアアアアアアと吠え私達三人に攻撃してきた

「各自散開、俺が15匹ほどやるから、他は任せー」

陸君が言いきる前に、黒い竜は炎の息を私達に向けて吐いてきた

「行くぞ、二人共やられるなよ。」

「うん。」

向かってきた炎を避けると、陸君は黒い竜の群れに突撃し、なのは黒い竜の群れから距離をとりながら戦い始める

「私達も行くよ。バルディシュ。」

「yes sir」

私は二人の真ん中で戦い始めた。

フェイトサイト終了

はやてサイト

「全く、初出動のわりに敵の数が多すぎや。」

ディスプレイ越しに見える戦いは、陸君やなのはちゃん、フェイトちゃんが優勢に戦っているとはいえ、ガジェットよりは数段高い戦闘性能を持っている敵であり、今のなのはちゃん、フェイトちゃんは多少苦戦しながら戦っている

「今、戦っているのが陸君達だからええけど、FW陣のみんなじゃ、まだ戦うのは厳しいな。」

「そうですね、まだデバイスにも慣れていませんし、あの敵を相手にするのは止めておいた方が良くかもです。」

シャーリーの言葉に頷き、グリフィス君の方をみる

「グリフィス君、リンとはまだ連絡繋がらへん？」

「はい。こちらから常にに連絡をしています、今だリン曹長から連絡ありません。」

「そっか、ありがとな。引き続きリインに連絡し続けて。」

「はい。」

再度リインに連絡するグリフィス君を見ながらこれからどうすればいいか考えているとアルトから警告が入る

「はやて部隊長、リニアレールの速度100キロを越えて尚も速度上昇中このままでは、付近ある町に突撃して大惨事になります。」

「なんやて。シャーリー、リニアレールの速度上昇を計算にいれつつ、後どのぐらいで町に着くのか計算ししだい、現場の陸君、なのはちゃん、フェイトちゃんに連絡してな。」

「はい。」

「グリフィス君、FW陣はレリックの回収はすんでるん。」

「はい。先ほど連絡がありましてレリックはすでに回収したのとことです。」

「なら、リニアレールから退避して、なにかあった時また現場に集

合って伝えてな。」

「了解しました。」

指示を終え、改めて現場で戦っているみんなの姿を見て祈るように願った

「頼んだでなのはちゃん、フェイトちゃん、陸君」

はやてサイト終了

エリオサイト

キャロとフリードと協力して倒したガジェット三型を後にして僕とキャロが走っていると、ロングアーチから連絡が入る

「こちら、ロングアーチエリオ、キャロ聞こえる？」

「はい。こちらエリオ、シャーリーさんどうかしましたか。」

「うん。みんなが乗っているリニアレールが暴走して速度が上昇中、

したがってF W陣のみんなは危ないから退避、エリオとキャロはフリードと一緒に脱出して。」

「わかりました、すぐに脱出します。」

「はい。了解です。」

二人で返事をすると思えばディスプレイが消え、キャロはすぐに竜魂召喚の魔法を使い、僕達は大きくなったフリードの背に乗ってリニアールから脱出する

「エリオ君、あのリニアールどうするのかな？」

「わからない……でも、きっと何とかしてくれるよ。陸さんとなのはさん、フェイトさんなら。」

「うん。そうだね。」

フリードの背に乗りながら再びリニアールを見ると、スバルさんとティアナさんもレリックを無事に確保してウイングロードで脱出していた

「スバルさん達も脱出できたんだ、よかった。」

「そうだね。キャロ。」

未だリニアレールは速度を上げ、遠く離れた空では黒い竜のような敵と赤い流星のように戦っている陸さん、それを援護するかのよう
に金色の魔力と桜色の魔力が飛び交っている

「よろしく願います陸さん。」

キャロにも聞こえない小さな声で呟き、僕達は現場から安全なところまで離れていった

エリオサイト終了

陸サイト

俺の周りを飛び回る黒い竜どもにしだいにイライラしてきた

「まったく、でかい図体して目の前を飛び回りやがって鬱陶しいぜ雑魚どもが。」

近くを飛んでいた黒い竜にブーストを噴かしちかずくと頭を殴り飛ばす、頭と胴体を切り離され黒い竜は霧のようになり消えていった

「やはり、この竜もさつき戦った黒い鳥も生きた生物ではなく何者かに産みだされた生物で訳か。」

冷静に敵を倒しながら分析をしていると、またディスプレイが現れ、はやてが焦りながら知らせる

「陸君、すまんけどリニアレールなんとかできへんやろか？」

「どうしたんだ、ずいぶん焦っているみたいだが、なにかあったのかはやて。」

会話の途中で爪で襲い掛かってくる黒い竜の攻撃をかわし、カウンターで右拳を抜き手にして竜の胴体を貫きながらはやての質問に答える

「スピードが尚も上昇中で、後数分で近くにある町の駅に突っ込んでしまうんや。」

「え、本当なのはやて。」

戦いながら、俺にちかずいてきたフェイトが驚きながら答える

「本当やフェイトちゃん、けどあのリニアレールにあったレリックはもうFW陣が回収して脱出してから心配あらへん。」

でも、リインが行方不明で未だ暴走状態や、何とかしてでもあのリニアレールを町に行かせる訳にはいかへん。なのはちゃん、フェイトちゃん、陸君なんとかならんやろうか？」

「でも、はやてちゃんいくら何でも今はちよつと無理かも。」

なのはとフェイトは襲い掛かってくる黒い竜の攻撃を避けると、反撃の魔法を打ち出す

「ディバイン・バスターーーー。」

「プラズマ・ランサーーーー。」

桜色の砲撃と金色の無数の魔力弾を食らった黒い竜は、ぐらついたものの霧のように消えたりせずまたなのは達から離れる

「リミッターがかけてあるとはいえ、私やなのはの砲撃で倒せないんじゃない時間がかかる。」

「それに今の私達の魔力じゃ、リニアレールは止められないよ。」

焦りながら答える二人に、俺は平然とはやて言う

「はやて、最悪リニアレールが止められないなら、壊してしまっても構わないんだよな？」

「それは、町に突っ込むぐらいなら壊してしまっても構わへんけど・・・まさか陸君、ちょいまちそれは最終手ー」

はやてが最後まで言いきる前にディスプレイを消して、黒い竜に苦戦しているのは、フェイトに呼びかける

「なのは、フェイト俺は今からリニアレールをぶっこわしてくるか、この竜どもは任せた。」

「ちょっと待って陸君、いきなりなにを。」

「そうだよ。今の私達でこの強さの数の敵を倒すのは。」

弱気なことを言うのはとフェイトに、俺はニヤリと笑い両腕を二人に向ける

「安心しろ特別に力を貸してやる。見せてやるこれが赤龍帝の第二の力『赤龍帝からの贈り物』へブーステッド・ギア・ギフトだ。」

俺の体を通して圧倒的な力の流れが、なのはとフェイトにいき渡ったのが感じ取れる。

刹那、二人の体から今までにない凄まじい魔力が漂う。両者とも溢れだす力に驚いている

『赤龍帝からの贈り物』その効果は、籠手もしくは鎧の宝玉で高めた力を他の者、もしくはは物に譲渡し、力を爆発的に向上させられること

「この力は、いける。」

フェイトは不敵な笑みもらしなのはもうなずいた

「いくよ、バルディシュ。トライデントスマッシュャー。」

「レイジングハート、エクセリオンバスター。」

さっきまでとは比べものにならないぐらいなら程の、極大な桜色の砲撃と金色の砲撃が、黒い竜を呑み込み、削り取り倒していく、その光景を見た俺は二人に背をむける

「じゃ、任せたぞ二人共。」

「うん。」

二人の元気の良い返事を聞くと、黒い竜の群れから脱出して暴走しているリニアレールの前方を約500メートルを目指してブーストを噴かす

【あれを使うきか相棒。】

（ああ、あれを使う。

）

ドライグの質問に答えながら、リニアレールを抜き去り約500メートル地点に降り立つ

「いい感じで突っ込んでくるな、ぶつかるまで約10秒位かな。」

突っ込んでくるリニアレールを眼前にして、俺は右腕に赤い魔力を集中する。すると、右腕に通常の籠手の五倍、六倍はある極大の模相を見せる

「いくぜ、これが赤龍帝の力『龍剛の戦車』だ」

『Boost Boostへブーストブースト』

二回ブーストをかけ、今まさに突っ込んできたリニアレールに、俺は極大な右腕の拳を振りかぶりフルスイングでぶん殴った

ドゴン！！！！

拳がインパクトした瞬間、籠手の肘部分に新たに生まれた撃鉄が打ち込まれる！膨大な魔力を噴出させながら、拳の勢いが猛烈にました

ドオオオオオオオオオオ

リニアレールが俺の一撃をくらい、20車両あった車両が1車両分ぐらいまで縮み、後方に約800メートルぐらいまでまで吹き飛んで谷の下に落ちていった。

それを近くで見ていたなのは、フェイトはもちろん遠くで見ていたFW陣、ロングアーチから現場を見ていたはやて達は何度も目をこすり錯覚では無いことを確認している

「うーん。流石にやりすぎたかな、『龍剛の戦車』は相変わらず力の加減がよくわからん。」

辺りに敵がいなかったことを確認して、鎧を解きなのは達を見る

「おーい。なのはー、フェイトー、終わったぞー
ー。」

両腕を振り呼びかけると二人がゆっくりと降りてくる。

「すまん、少しやりすぎた。」

頭を下げて謝るが、何の返事もないのでそっと目だけでなのは達を見ると、なのはとフェイトの二人は、俺の方は見ておらず吹き飛んだりニアレールを見ている

「どうかしたのか二人共？」

「ううん、何でもないよ。それより、リニアレールの中にいたリイ
ンは何処にいったのかな、いきなり行方不明って話だから心配だ
よ。」

なのははいきなり話しを変えられ戸惑うが、このまま続けることに
した

「ああ、それなら心配ない、さっき居場所つかんだから。」

「ええ、どうやって調べたの。」

ビククリした顔で聞いてくるフェイトに、俺は近くの岩場に行きリインを確保するとなのは達がいる場所まで戻り、リインをフェイトに渡す

「「リイン！！！」」

フェイトとなのはは、渡されたリインの体を至るところ触りなんともないか確認している

「そんな心配しなくても怪我はしていないし、体を弄られた形跡もないから、単に寝ているだけだろ。それより問題があるのは……。」

感覚を研ぎ澄まし辺りを気配を探り、神眼の力を使い周囲を探るが、半径10キロ圏内には、俺の仲間と野生の獣しかいない。

つまり、リニアレールでリインを拐い、後にこの場所にリインを置いた人物がいかいことを示している

「やれやれ、こいつはやっぱり敵にもう一人り神滅具使いがいるってことか。」

ため息をついていると、離れた所にいたスバル達FW陣がこちらに移動してくる姿が見え、ついでに

「り〜〜〜〜く〜〜〜〜く〜〜〜〜ん。なにをやってんあんたは、そりゃ町に突っ込んで大惨事よりは良いかもしれへんけど、いくらなんでもやり過ぎやこの修理費だってタダじゃないんよ!!!!」

ディスプレイ越しに現れたはやてがギャーギャーと騒ぐので、耳に指を埋めうるさい声を塞ぎ聞こえないようにシャットアウトする

「にやはは、フェイトちゃんこれはしばらくはやてちゃん収まらないね。」

「そうだね、なのは。でも良かった。町が無事で。」

はやてに怒られている俺を尻目に、なのはとフェイトは笑いあった

こうして男達のハードな機動六課、初任務は終わりをづけた

星と雷と龍帝 下（後書き）

次はさまざまな出会い
なるべく速く更新できるようにしたいです。

さまざまな出会い（前書き）

時間がかかりましたが、相変わらぬ駄文です。作者の文才不足ですが、少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

さまざまな出会い

ミットチルダ街中

「はーっ。俺がいた世界より技術は上だと思ってはいたが、まさかこれほどはね。」

自分の眼前に広がる街の一角それは、まるで本でよくある未来の日本みたいだった。
その街をゆつくりとまるで見る物全てを覚えておくかのように歩いていく。

「こんな何も知らない街でどうやって皆の頼み物を探せばいいんだよ、というか普通誰かついてきてくれるもんだろ。」

ぶつぶつと文句を言いながらも、みんなが欲しい買い出しリストと街の地図を見ながら歩いている姿は、知らない人が見たら少し危ない人にも見えるだろう。地図を見ながら30分余り歩き回り、ようやくはやてに言われた銀行が見えてきた

「ふーっ。やっと見つけた、速く片付けてみんなの買い出しをスタートしよう。」

自動ドアを潜ると、ライフルやら拳銃やマシンガンが勢揃いしていた

「はい？」

「全員伏せろ、死にてえのかー」

顔に黒いスキーマスクを被った人相が解らない男の怒鳴り声が銀行全体に響き、従業員らしき人々は両手を挙げたり、両手を頭に乗せて机に伏せている。六人全員が銃器を持ってこの場にいる人々を威嚇しているが

「すいませーん。金おろしたいんだけど、教えてくれませんかね。」

何事もないかのように、受付に歩みより従業員に話しかける

「あの、もしもし？大丈夫ですか？頭なんか抱えて。頭が痛いんですか？」

「なに何事ないかのように話しかけてんた小僧、ゆっくり手を上げてこっちを向けマヌケが。」

「はいっ？」

後ろから声をかけられたので後ろに振り向くと、銃口を自分に向けた男が笑っていた

「おい、おっさん。変なスキーマスクして人の邪魔してんじゃねーよ。用が有るなら俺の後にしな。」

そう言うと、向けられていた銃口を右手で軽く握りしめ、右手を開くと銃口が潰され弾が出せなくした

「うああああ、なんなんだてめえは。」

男は悲鳴を上げ尻餅について戦意消失したが、男の出した悲鳴が聞こえたのか他の五人の男が一斉にこちらに銃口を向ける

「なんだこいつは、一体どうやって銃口を潰しやがったんだ。」

「魔法かなんかだろ。それになんだっていいさ、こいつはもう死ぬんだからな。」

「そりゃそうだ。あばよ小僧。」

男達は余裕の表情を浮かべながら引き金に力をいれるが

「遅い。」

その一言を聞いた瞬間、銃口を向けていた男達の意識はなくなった

陸サイト終了

ギンガサイト

市民からの銀行強盗の通報を受け、バリヤジャケットを装着し現場に着くと驚くべき光景を見た

「ん？なんだ管理局の人間か？来るのがおせーよ、もう終わったぞ。」

両手をばんばんと鳴らしたため息をつく若い男性の前に銀行強盗と思われる六人の男が地面に輪のようになって悲鳴を上げなが暴れていた

「い、痛いー足をどけろ」「誰かの体が邪魔でう、動けん。」「重

いゝどけー。」「揺するなー。」「

「無駄だよ。その技はたがいの体重を使って関節を決めてある。外から他人外してもらわんかぎる絶対に外れん。」

若い男性は、犯人達を一瞥すると私に話しかけてきた

「すまん。俺はこれから用事があるんでこいつらなんとかしといてくれる？」

「は、はい。それは構いませんが、貴方は一体なー」

言葉を言いきるより速く従業員が叫んだ

「そこの二人危ない!!」

言われ後ろを振り向くより速く、若い男性がとてつもない速度で走り、ドアの影に隠れていた強盗犯に突撃する

「くたばれ小僧が!!」

仲間をやられ、半ばヤケクソな男が銃口をこちらに向け発砲するが、若い男性は銃弾を頭を右に振り軽く避けると犯人の銃を蹴飛ばす

「誰が小僧だ、おっさん。」

そしてそのまま犯人のお腹に抜き手を突き刺すと、「ガキン」とまるで金属と金属が衝突したような音が響いた

「な、なんだこの感触は一体なに着てんだこのおっさんは。」

「当たり前だ。防弾チョッキとバリヤジャケットの重ねがけだ、お前ごとき小僧に貫けるか!!！」

驚いている若い男性に犯人はそう言いはなつと 懐から手榴弾を取りだしピンに手をかける

「死ね、小僧!!！」

犯人がピンに力を込めて抜く姿勢に若い男性が再び抜き手を放つ

「数え抜き手。4、3、2、1!!!!！」

手が速すぎて見えないが、若い男性が両手で抜き手を突き刺しながら数を数えると、さっき響いた音が銀行全体に響き最後の1を数えると、「ズン」という音が響き犯人の男は白目を剥いて倒れ、若い男性は犯人から離れ犯人が落とした手榴弾を靴の上で受け、ゆっくり床に下ろし抜けかけていたピンを靴で奥に詰めから横に転がした

「やれやれ、やっと倒れたか。」

あまりの出来事に私を含め見ていた人は状況が掴めずにいたが、数秒が経ち状況を掴むと見ていた人全員が歓喜の声を上げ犯人を見事倒した男性を褒め称える

「スッゲーどうやって倒したんだ？」 「ありがとう。ありがとう。」
「カッコいいっ。」 「ヒーローだ、ヒーロー誕生だ。」

次々に褒め称えられた男性はキラリと笑うと、悠然と歩きながら銀行から出ていった。私はその姿を見て啞然としていたが、ふと我にかえり慌てて男性の後を追う銀行から出る

「あれ、おかしい何処にもいない。」

正面と右左の道路の何処を見ても、男性の姿は見えなかった

ギンガサイト終了

はやてサイト

りニアレールの事件から数日が経ち、ようやく事故処理という地獄から解放された私は久々にゆっくりお昼ご飯を食べる為食堂に行き、カウンターにいるおばちゃんに声をかける

「おばちゃん。今日のオススメおねがいなー。」

「はいよー。はやてちゃん疲れてるみたいだからオヤツもつけとくよー。」

「おおきにー。」

カウンターでお昼ご飯を受け取り、テーブルを探して歩いていると、なのはちゃんとFW陣が話しかけてきた

「あ、はやてちゃんも今からお昼？なら一緒食べよ。みんなもいいよね。」

「「「はい!!」「」」」

F W陣の元気の良い返事に笑顔になり、見つけたテーブルで食事を始めた

「それにしても、陸さん凄いですよね。あんな大きくてスピードがあったリニアレールをあんな風にしてしまうなんて。」

食事を食べはじめるとエリオがこの前陸君が壊したりニアレールについて話し始めた

「確かにね、あんなこと魔導師じゃ絶対に出来ないもんね。」

「でも、少しやり過ぎたんじゃ。」

「私もそう思うわ。別にあんなことしなくとも、違う解決方法があったと思うわ。」

陸君がやらかしたりニアレール破壊については、エリオとスバルが賛成でキャロとティアナが否定な意見をだしている

「なのはさんと部隊長はどう思いますか？」

ティアナにいきなり話題を振られ私となのはちゃんが困っていると見ていた番組がいきなり変わりニュースになる

「緊急ニュースです。今日の10時26分頃、??地区にある銀行に強盗が入りました。」

「またか、この頃多いね。」

「そうやなあ、でもこんぐらいの事件の何が緊急ニュースなんですよ?」

最近増えた銀行強盗事件、別に緊急ニュースにするレベルではないはずなんやけど、と考えているとニュースキャスターが続きを読み始める

「しかし、強盗された直後にドアから入ってきた若い男性に全ての犯人が魔法も使わず素手で捕られました。その映像がこちら。」

ニュースキャスターが消え、犯行があったと思われる場所が映り出され、犯人らしき五人の男に拳銃やらマシンガン向けられているにも関わらず、銃を向けられている男性はどこかで見たことのある男の子で平気なら顔で周りを見ていた

「ち、ちょっと、この銀行強盗と対峙してる人って。」

「うん。間違いなく陸君だよな。」

余りの驚きにキャロが手からスプーンを落とし、他のFW陣は硬直して固まっている。

そうして驚いている間にも映像は続き

「遅い。」

と映像の中の陸君が呟く同時、周りで銃口を向けていた犯人達を後ろや横にふっ飛んでいき壁や机に頭をぶつけていた

「な、なにが、おこったの。」

「解りません。僕にはなにも見えませんでした。」

「わ、私も。」

「って言うか、誰にも見えないでしょ。」

FW陣は何も見えずに混乱している。それは私も同じで陸君がなに

をしたのかまったく見えなかったので黙っているとニュースキャスターが再び現れた

「あの、この男性がなにをしたのかまったく解らないと思われるので10分の1秒でもう一度。」

まったく同じ映像が流され、犯人達がふっ飛んでいく場所で10分の1の速度で映像が流されるが、先の映像と同じ陸君がなにをしたのかまったく見えない。

「見えません、次は100分の1秒でお願いします。」

ニュースキャスターは焦った様に喋り、次は100分の1秒で映像が流されると、陸君の右腕がうまく映っておらずぶれて見え、その右腕の拳はそれぞれの犯人の顔にめり込んでいた

「どういいうスピードで殴ってるんよ。あの人は。」

「あゝゝゝ、陸君だからね。あれぐらい出来るでしょ。」

「「「「.....」」」」 啞然

あまりにも超人的なスピードで犯人を倒した映像にFW陣の啞然と

して声も出せないでいるが、ニュースキャスターも同じらしく啞然としてボーッとしていた

はやてサイト終了

陸サイト

「ありがとうございますー。またのおこしお待ちしております。」

自動ドアが開きアイスクリーム店から出て、近場の公園まであるき運良く誰も座っていない長椅子を見つけドカッと座る

「ふう〜。少し時間がかかったがこれでミッションコンプリートだな。」

ズボンのポケットから皆の買い出しメモを取りだし、何度も確認してからまたポケットにしまう

「やれやれ、予測以上に時間がかかったな。やはり最初の銀行強盗犯と鉢合わせたのがいたかったな。」

あのあと俺は銀行の屋根までジャンプし、屋根から屋根へ移動を繰り返して少し遠くの銀行まで移動すると、はやくからの用事を済ませ頼まれたいた皆の買い出しリストの物を買いはじめ、ようやく終わったのだ

「あとは、帰るだけだしゆっくり帰るとするか……」
「……ん？」

軽く腕を回しながら長椅子からいき良いく立ち上がると、長いフードを被った長い紫色の髪した女の子が木の上にある枝を見ていた。

「……………」

「なにやってんだあの子供は。」

まだ日は落ちていたいとはいえ、もう家に帰ってもいい時間帯である。

ガリガリと髪をかきながら女の子に近づき声をかける

「どうしたんだお嬢さん何か困った事でもあるのか？」

「……………鳥。」

小さな声で喋りると、右手で木の上の枝の部分を指さす

「ああ、なるほどね。」

つられて木の枝の部分を見ると、小さな鳥の足に糸が絡まってぶら下がっている

「まったく、酷い事をするやつがいるな。鳥だって生きてるのに。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・コクッ」

少女は微かに頷き、鳥を見続けている

（高さ約2メートル位、俺なら簡単に紐をほどいて解放出来るけど
・・・・・・・・。）

横目で少女を見ると無表情ながら悲しそうな顔をして鳥を見ている。

（仕方ない。やるか。）

決心すると、鳥を見続けている少女の後ろに回り込み、脇に手を入れ一氣に上に上げる。（子供にやる高い高い）

「・・・・・・・・・・・・・・・・ツ!!!!!!」

「痛い痛い、蹴るな蹴るな。」

いきなり上げられた事が恥ずかしのか、顔を真っ赤にして暴れる少女を宥めながら、次に少女の足の間に頭を入れかたぐるまにする

「ほれ、これなら手が届くだろ速く糸をほどいて逃がしてやれよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・コク。」

顔を真っ赤にしながら少女は手を伸ばし鳥の足に絡まっている糸を苦戦しながらもほどくと、鳥は翼を広げ空に飛び立った

「降ろして。」

「うい。」

少女を降ろして、立ち去ろうとする俺を少女は腕の裾を掴みひき止

めた

「・・・・・・・・・・・・・どうして私にやらせたの？・・・・・・・・・・
貴方なら簡単にできたんじゃないの？」

素直に疑問を問いかけてくる少女の綺麗な髪ををそつと撫でながら
答える

「君は自分の手で鳥を助けたい顔をしていたから、その手助けをし
ただけだよ。違ったかな？」

「・・・・・・・・・・・・・違う。私は自分の手で助けたかった。」

少女を顔を真っ赤にしてうつ向きながら答え、その可愛らしい仕草
に多少グツとくるものを感じ優しく頭を撫でていると少女は俺を見つ
めて小さな声で言った

「そんでお嬢さんはここで何をしてたのかな？まさか鳥を助ける為
にきたのかな。」

質問をすると少女はふるふると頭をふり否定する

「違う。…………それに私はお嬢さんじゃない。私はルーテシア。」

「わかったよルーテシア。俺は藤田陸。だから陸って呼んでくれ。それでルーテシアはここで何をしてたのかな？」

優しく問いかけるとルーテシアは頭を傾げて無表情ながら少し考えてから答えた

「人を待っていたの。」

「その一言の為に何を考えていたんだ！でその待ち人はいつ頃くるんだ。もうすぐ陽が沈むぞ。」

「……………わからない。」

「わからないって、ならルーテシアは何時まで待っているつもりなんだ」

再びルーテシアは頭を傾げて考え始め、ルーテシアが喋るのを30秒ほど待っていると

「来るまで待つ。」

「来るまでって。はあ、変わった子供だなルーテシアは。」

ため息をつき、さっきまで座っていた長椅子まで戻り座ると、ルーテシアを手招きする。ルーテシアは困惑した顔で見返してくるが俺は気にせず買い物袋からアイスを差し出す

「ほれ、やるよ。ルーテシアの待ち人が来るまで付き合うよ。君みたいな子供が一人にいるのは危ないしな。」

「別にいらない。」

そっぽを向くルーテシアだが、キュウ〜と可愛い音が俺の耳に聞こえ、ルーテシアは恥ずかしさの余り顔を真っ赤にして唇を軽く噛むんで恥辱に耐えていた

「ほら、子供なんだから無理すんな。アイス食べよ。」

「……………うん。」

小動物のように少しずつ近づき俺の横に座ると、カップアイスを受けとりアイスに付いていたスプーンで少しずつだが食べていく姿を見てから、自分も袋からカップアイスだして食べ始めた

陽が完全に落ちても、ルーテシアの待ち人は来なかった

「アイス、もう一個。」

「いいけど、これで5個目だぞ。腹壊すなよ。」

「うん。」

余程アイスが気に入ったのか、ルーテシアは一個食べてから連続でアイスを食べては幸せそうな顔をしている

（どうしたもんかな、居候だからあんまりなのは達は無茶な事言いたく無いんだけどな。）

小さな子供を一人で公園に残していく訳にもいかず機動六課に連れていくべきか悩んでいると、遠くからこちらに歩いてくる足音が聞こえルーテシアに誰かが来た事を促す

「ルーテシア、誰か来たぞ。待ち人か？」

ルーテシアは長椅子から立ち上がり俺が指さす方向を見る

「うーん。うん。そうゼスト、こっち。」

ルーテシアが手を振ると、ゼストと呼ばれたフードを被った大柄な男もルーテシアに気付き、こちらに近寄ってきた

（へえ。このおっさん多少は出来るな。）

近寄ってくるゼストの歩き方から、この男の戦闘力を把握する

「ルーテシア、こんな所にいたのか。行くぞ、あの男が待っている。」

「うん。またね。陸お兄ちゃん。」

ルーテシアはゼストの後に続きながら歩き、こちらに手を振りながら去って行った

「やれやれ、俺も帰るか。」

ルーテシアが食べたアイスの容器を片付けると、長椅子から立ち上がり機動六課に戻ろうと歩き出そうとした瞬間

（ん、陸お兄ちゃん？）

ルーテシアが最後に言った言葉が気になり後ろを振り向くが、二人の姿はなかった

――――

「あ―――っ！なんで私のアイスだけこんな減ってるんの！！」

機動六課に着き、今日頼まれた皆の買い出し物を配っている中スバルの悲鳴が響く

「あ、それな、悪い小さな子供に結構あげちゃった。」

「え―――っ！！」

頭を下げて謝るが、スバルは頬膨らませ怒っている

「悪い、悪い。またアイス買ってくるから。」

怒っているスバルを宥めていると、後ろから黒オーラを感じ振り向くとはやてが笑顔で立っていた

「陸君、今日の銀行事件の事すっかり聞かせてもらおうで。」

「いや、別に悪い事はしてないから問題無いだろ。」

笑顔だが、ドスのきいた声で聞いてくるはやてに僅にビビりながら反論するが

「その判断をするのは、陸君やない。私達や。それじゃ陸君は一緒に部隊長室に行こうか。」

「ま、待て待て待て待て待て、俺は悪いないだろその俺がなんで怒られにゃなんのだ!」

はやては言い訳をする、俺の襟をしっかりと掴むと引きずりながら部隊長室に歩いていく

「いやだーーーー。俺は悪くなーーーーい。」

無惨にも部隊長室に引きずり込まれると、すぐに男性の悲鳴が機動六課中に響き渡った。

さまざまな出会い（後書き）

次はお話は修行です。

感想、疑問がありましたらください。

修行（前書き）

久しぶりの更新です。作者の文才が0で駄文です。会話の流れが変なところがありますが、気にしないでください。少しでも楽しんでくれたら嬉しいです。

修行

訓練所

フィールド森

機動六課自慢の訓練所で藤田陸とエリオが戦っている。いや戦いになっていない何故なら一方的な陸が殴っているだけだからた

「どうしたどうした。そんな回避の仕方じゃ、あつという間に敵に倒されるぞ!!」

逃げ惑うエリオにただひたすら突きや蹴りを叩き込む

「くっ、が、うわぁ!! ス、ストラーダ!!」

攻撃から逃れようとエリオは、ストラーダと魔法のブリッツアクションを使い俺から間合いをとり離そうとするが

「だから、見え見えだっていつてんだろが!!」

高速で右に逃げるエリオ方向に先回りして、腹に正拳突きを叩き込む。

「うわぁ!!!」殴られたエリオは木を5本ほど折ながらぶっ飛んでいき6本目でようやく止まるとそのまま倒れた

「「エリオ（君）」」

「だから、この程度の事で取り乱して大声出したら敵にここにいるぞっていつてるみたいなものだぞ!!!」

俺は両腕を声がした方向に向けると、1メートル位ある魔力の塊であるドラゴンショットを数発放つ

「え、えええええー！ー！ー！ー！ー！」

「ちょっと、まー！ー！」

今までにない攻撃をされ驚く二人、フリードに乗っていたキャロとウイングロードで移動していたスバルは緊急回避をしようとするが、間に合わず直撃する直前に横からきた飛んできたオレンジの魔力弾にドラゴンショットが撃ち落とされる

（なにやってんの二人とも。今すぐ逃げるか、隠れなさい!!!）

（はい！）（わかったよ。ティア）

二人の返事を念話で聞きながら離れている目標に注意をしつつ、木々の影に隠れる

（かなり遠くから狙撃したからまだ私がどこにいるかはわからないはず。）

静かに物音を極力たてず木々の影から頭を出すティアナに、俺は軽く頭に手を当てる

「な！嘘。どうしてこの位置が」

「ティアナ。仲間想いなのは悪くないが、不用意な射撃は自分の位置をさらすだけだぞ。反省だな。」

「嘗めないでください！！」

激昂して冷静さを失ったのか至近距離からクロスミラーージュの射撃に移行するティアナより速く右腕に力を込め技を放つ

「徹し！！」

「!!!!!!!!!!」

ドン、と音がなり頭にだけ衝撃を受けたティアナは膝を着きゆつくりと体を地面に倒した

「いくら、バリアジャケットでダメージを軽減するからって、脳そのものを揺さぶるこの技なら防げないだろ。」

周りを見渡すと、キャロはフリードと一緒に空にいるがスバルがいない

「あれ？スバルはどこだ？」

いないスバルに疑問を思い探索領域を広げようと黒い眼を、深い海の色蒼い色に変わる瞬間――

「おおおおお!!!!!!!!!!」スバルは木がお生い茂る森を利用して俺の余所見をしているところにウイングロードに乗り高速移動しながら突っ込んできた

「もらったよ！陸さん！！ロードカートリッジッ！！」

「はあ、甘いわスバル!!」

ロードカートリッジをすると、リボルバーナックルから葉莢が落ちてスバルの魔力が増大するが、俺はスバル攻撃進路を予測し前に右手を突きだし固定し、後ろ足でつかい棒にすると、丁度スバルが殴りかかってきた

「もらったー!!!!!!」

「退歩掌波!!」
たいほしやうは

殴りかかってきたスバルの右腕を俺は頭を左に振り回避すると、ドゴン!!!!!!とイヤな音がなり響き、俺ではなく殴りかかってきたはずのスバルが吹き飛んだ

「な、なんで？」

「だから言っただ、甘いつてな。」

スバルは木に派手にぶつかり止まると、そのまま気を失い倒れる

「さてと、最後はキャロだけだな。」

空にいるキャロに視線を移すと、フリードに乗ったキャロは白旗を挙げていた

――――

「まったく、情けない奴らだな。神器も使わずまだドラゴンショットしか使っていないのに、四人合わせ三分もたないなんて禁手に至った神器使いと出会ったら間違いないで殺されるぞ。」

森の中、四人を正座させながら説教をしていると、模擬戦を見ていたなのは、フェイト、ヴィータが俺とスバル達の間に入り四人を庇う

「まあまあ。いくら神器を使わないっていてもいきなり陸君と戦って十分以上もてなんて無理だよ。」

「そうだよ。エリオとキャロはみての通りまだ子供なんだよ。いくら何でもやりすぎだよ。」

「そうだな。まだ陸と戦うのは速すぎだな。あたし達でも神器を使わない状態で十分戦うのは難しいからな。」

「なのはさん」「フェイト隊長」「ヴィータ副隊長」

庇われたFW陣は感動し、スバルいたっては嬉しいのか目に涙まで

溜めているが

「甘やかすな！なのは、フェイト、ヴィータいつ神器使いが現れるかわからない以上は必ず必要になる。」

俺がなのは達を叱ると、FW陣もなのは達も「しゅん」と悲しい顔をしているが、エリオだけはしっかりとこちらを向いていた

「陸さん、少し聞きたいことがあるんですが聞いてもいいですか。」

「いいぜエリオ、何が聞きたいんだ。」

「さっきの模擬戦、僕がブリツツアクションを使って右に逃げようとしたとき、なんで右に逃げるってわかったんですか？」

「それは観の目だよ。」

「観の目？」

エリオだけでなく、全員が聞いたことのない言葉に頭を傾げる。

「観とは客観、外観つまり全体を見渡すことだ。ただ表面を見るのではなく、重心の移動、呼吸などから相手の動きを、洞察する。故に相手の動きを予知でき、相手より速く動けるんだよ。」

「??????」

なのは達全員が、俺言ったが言葉の意味が半分も解らない顔をしているが、エリオは続けて俺に質問する

「陸さんは見えない攻撃に対して、どうやって反撃、回避するんですか？」

「まあ、方法はたくさんあるが、俺できるやり方は三つある。エリオちょっとこい。」

「はい。」

なのは、スバル達から俺とエリオは離れ二十メートルほどまでくると空手の構え、前羽の構えをとる

「一つは、制空圏。これはいわゆる『拳の結界』武術をある程度会得すると使える様なる。」

俺はエリオにも見えるように、少し強めに球状空間を展開する

「すごい！陸さんのまわりに薄い膜みたいなものが見えます。」

「見えるか？それが俺の手が届く半径、つまり制空圏だよエリオ。なのはすまないが、こっちに向かって魔力弾を撃つてくれないか。」

「え、それは構わないけど、一体なんのために？」

「エリオに制空圏がどうゆうものか手っ取り早く見せるためだ。それと、出来るなら四方八方から死角からの攻撃もしてくれるか？」

「う、うん。わかった。」

なのはは了解すると、レイジングハートをこちらに向け集中すると、なのはの周りに無数の魔力弾が展開されていく。

「いくよ。陸君。アクセルシューター！！」

なのはが唱えると、周りにあった無数の魔力弾が遅くはあるが飛んできた。魔力弾はなのはが操っているのか俺の頼んだ通り、真っ直ぐ向かってくるのもあれば、横から向かってくるもの、上に上昇し下に落ちてくるもの、一度俺を通りすぎて死角から向かってくもの、様々角度からこちらに向かってきた

「り、陸さん危ない！！」

「大丈夫だ。心配してないで、しっかり俺のする事を目に焼き付けろよ。」

向かってくる魔力弾を無視しながらエリオに話し、三つの魔力弾が俺の制空圏に侵入した瞬間に、「パン。パン。パン」と軽い衝撃と音が響き、魔力弾が消失する

「すごい。なのはさんの誘導弾を見もしないで拳だけで壊した。これが陸さんの制空圏なんですか？」

「そうだ。これが俺の制空圏だよ。」

エリオと喋っている間にも、なのはの放った魔力弾が向かってくるが制空圏に侵入した瞬間にまるで手品のように次々に消失していき、最後の一つも消失させエリオの方をむく

「まあ、こんな感じだな。制空圏は自身の領域を侵した敵の攻撃に対して、半ば自動的に反応でき回避、反撃することが可能なんだ。」

「すごい！！陸さんはどれぐらいの期間で取得したんですか。」

キラキラした目で見つめくるエリオに俺は少し考え込んだ

「えーと。確か俺が武術の修行を始めたのが8歳の時で、制空圏が確か。いつだったかな。確か十歳位だったかな。」

「陸さんでも二年もかかったんですか!!じゃ僕じゃ何年位かかると思いますか?」

「エリオならそうだな、才能はまあまああるし付け焼き刃でいいなら、俺と一緒に修行して半年位でいけるんじゃないか?」

「本当ですか!!僕でも制空圏を覚えて、陸さんみたいに強くなれますか!」

「おう。エリオお前が本気ならな。俺は嘘は言わないし。それとあと二つは少々難しいからしっかり見ているように。」

「はい。わかりました。」

まるで俺のことを先生のような目で見るエリオに苦笑いしながら話を進めていく

陸サイト終了

フェイトサイト

「なんでエリオ、なんで私にはそんな目で見てくれないのに、陸君には見せるの。私の方が一緒にいる時間は長い筈なのに。なんでくくく。」

二人がまるで兄弟のようにみえ悲しい思いをしているのに、周りにいるのは達は納得している

「しょうがないよフェイトちゃん。機動六課は男性が少ないし、エリオもあんな風に喋れる人がいるのが嬉しいんだよ。」

「そうだねくく。エリオ私達と話す時って、だいたい敬語だし。歳は離れているけど、陸さんのことお兄さんみたいに思ってるんだと思うなくく。」

「そうだな。男同士の方が話しがしやすいと思うしな。」

「そうそう。なんだかんだ言ってあの二人仲いいし。」

「はい。本当に兄弟みたいですわね。陸さんとエリオ君。」

なのは、スバル、ヴィータ、ティアナ、キャロにまで言われるが、私はまだ納得出来ず陸君とエリオを注意深く観察していると、いきなり陸君の姿が消えた

「え、な、なに！陸君が消えた！！」

ビククリしながら周りを見渡すが陸君の姿は見えず、エリオも慌てた様子で周りを見て、私と目が合うと更にビククリして私を指指す。

「なにエリオ？私になにかついてる？」

「いや別になにもついてないよフェイト。それにしてもお前、こんなに近づいても気がつかないなんて結構鈍いんだな。」

後ろから陸君の声か聞こえ振り向くと、私の後ろに消えたはずの陸君が立っており、なのは達もビククリしながらこっちを見ている。

「やっぱりな。なのはやフェイト、ヴィータにも見えなかったんだな、そんな速く動いたつもりなかったんだがな。」

ため息をつきながら陸君は右手に持っていた物を地面に落とした

「これ移動しながら取ったんだけど分からなかったか。」

「「「「えっ！！！」」」」」

陸君が地面に落とした物は、私となのは、ヴィータ、ティアナの髪止め、キャロ、スバルのハンカチ。みんな今きずいたのか慌て自分の髪止めやハンカチを確認している

「いつのまに取ったの？」

「いつのまに？普通に取ったぜ。普通にな。」

陸君はそのままエリオの方に歩いて行って、修行を始めた

フェイトサイト終了

陸サイト

「制空圏・空気の振動・結界。この三つを見せたが今エリオが出来る技術はない。時間をかければできるが。」

「そうですね。今の僕じゃ何一つできません」

あれから30分が経過して技をみせたがやはり、難しいのか何も出来ず肩を落として落ち込みエリオの頭を軽く撫でる

「そんな落ち込みなよエリオ。お前だったただの人間じゃない、魔力を持っているんだろ。だったら大丈夫。」

「え？なにが出来るんですか？」

「ああ。エリオは魔力を雷に変換出来るんだろ、目や耳に頼らずに雷のエネルギーを利用して敵の攻撃を探知、反対するか回避すればいいんだ。」

「雷のエネルギーで敵の攻撃を？」

「そうだ。自分の周りに雷のエネルギーを放出して、敵の動きを感じ取るんだ。ためしにやってみか。」

「えっ？」

ビックリしているエリオに目隠しをかけ、耳には耳栓をつめる。

「陸さんやるってなにをやるんですか？」

びくびくしながら震えてながら聞いてくるエリオに俺は笑顔で答える

「なにをって、今から訓練が始めるに決まっているだろうが。それと目や耳に頼っていると上手く出来ないから耳栓と目隠しとるなよ。」

「待ってください！まだやるとは――――」

「いくぞ。エネルギーを上手く操って対応するんだぞエリオ。」

言いながら俺はエリオにパンチを喰らわせた。
その様子をなのは達は心配そうな顔で見つめ、フェイトは泣きそうな顔で見っていた

――――

「これで今日の修行を終了だ。明日に備えて今日はしっかり寝て明日に疲れを残さないように。」

「は~~~~い。」

あれから三時間以上避ける修行を続け死んだような目をしたエリオは、足を引きづりストラーダを杖がわりにしながら隊舎に帰って行った

「やれやれ、あれぐらいの修行でグツタリするなんて先が思いやられるぞ。」

「そんな事ないと思うよ。エリオは頑張ったと思うよ。」

「そうだよ。あれはやりすぎだよ。エリオ今にも死にそうだったじゃない。」

「ま、確かに訓練っていうレベルじゃなかったな。下手すれば本当に死んじゃうぞ。」

なのは、フェイト、ヴィータはそれぞれがやり過ぎだと言ってくるが、

「やり過ぎではない。神滅具と戦うかもしれないんだぞ。この程度で死ぬならどのみち殺されただけだ!!」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

俺に怒鳴られたのはとフェイトはなにとも言えず黙り、ヴィータはあまり男から怒鳴られたことがないのか。今にも泣きそうな顔でびくびくしている。その姿に流石にいきなり怒鳴った事に反省する

「悪い。でもわかってくれ。俺は誰にも死んでほしくないんだ。」

なのは、フェイトの綺麗な髪を優しい撫でた後、頬を軽く撫でると、二人は撫でられている俺の手を気持ち良そうに両手で包みこむ

「この先神滅具と戦うって事は一步間違えれば死んでしまう。だから俺は――」

黙りこむ俺に今度は、なのはとフェイトが片手づつで俺の頬を優しく撫でる

「うん。分かったよ、陸君。でもエリオはまだ子供なんだから手加減してあげて・・・・・・・・ね。」

「そうだよ。みんなまだ子供なんだからね。」

「ああ、わかったよ。出来る限り手加減するよ。なのは。フェイト。」

「絶対だよ。じゃ、私達も隊舎に帰ろうか。フェイトちゃん、ヴィータちゃん、陸君。」

「うん。なのは。」 「ああ、わかったよ。」 「そうだな、遅くなる前に帰ろうぜ。」

なのはとフェイトは仲良く話しながら歩き、ヴィータは二人の前を歩いている。俺はみんなの後に続き隊舎まで歩きはじめると、前を歩いている二人の肩にゴミが着いているに気がつく。

（やれやれ。なのはとフェイトもまだまだ子供だな。）

心の中で苦笑しながら、二人が気がつかないように近づき肩のゴミを取ろうと手を伸ばすと

「あの、陸君ちょっと聞きたいことがあるんだけど。いいかな？」

「陸君。エリオの修行、どんな事が出来るようになるのか聞いていい?。」

神のイタズラか悪魔の意志か、なのはとフェイトが同時に振り返り。

「ムニユッ」と音が聞こえてもおかしくないレベルで、俺の手が二人の大きめな胸に触れた。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」

突然の事に三人とも沈黙しているが、男の本能なのかなのはとフェイトの胸に触れている俺の両手は「ムニユムニユ」とこれでもかというぐらい二人の胸を揉みもぐしている

「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」

更に沈黙が続き、一番早く我を戻した俺はなのはとフェイトの胸から手を引き苦笑いを作り言い訳をする

「まてまてまてよ。なのは、フェイトこれは事故だ。二人の肩にゴミが着いていたから、手で取ろうとしただけだ。断じて故意に二人の胸を触ろうとした訳ではない。信じてくれ。」

必死に言い訳を言う俺を二人はまだ目覚めていないのか呆然してい

たが、数秒が経過すると事態を把握した二人は顔を一瞬でりんごのように真っ赤にして胸を両手で隠しながら。

「陸君のえっち。」

小さな声で恥ずかしながら呟く二人姿が、どストライクでドキドキして動けないでいるなか、なのはとフェイトは走り去って行った

「やべー。いっちゃなんだが、二人ともかなり可愛かった。」

少しずつ遠のいていく二人の姿を見ながら俺は、怒られなかった事と、なのはとフェイトが見せたあの可愛い表情が忘れられなかった。

陸サイト終了

なのはサイト

自分の部屋まで走ってきた私達はドアを誰にも開けられないようにロックすると、私とフェイトちゃんはベッドに倒れこむ。

「フェイトちゃん。胸、陸君に触られちゃったね。」

「うん。誰にも触られた事なかったのね。」

私達はお互いに自分の胸に手を置き、触られた時の感触がよみがえる

（でも、触られても嫌じゃなかった。むしろもっと・・・・・・・・・・。）

（暖かくて安心する手だった。あの手なら私・・・・・・・・・・。）

「ボツ」と音が聞こえそうならい瞬間赤面した私はそのままベッドにあった枕に顔を埋め。フェイトちゃんは恥ずかしさのあまりかベッドの上を転がり回っている

（眠れないよーーーーー。）

二人の心の声が重なり眠れない夜になった。

修行（後書き）

次は未定ですが、なるべく速く更新したいです
感想お待ちしています。

五万アクセス達成記念

マッサージマスター 1 (前書き)

久しぶりの更新です。今回の話しは、本編とは関係ないお話しです。
なのはとフェイトが壊れぎみです。

相変わらず文才が0の駄文ですが、少しでも楽しんでくれたら嬉しい
です

五万アクセス達成記念

マッサージマスター 1

機動六課

シャワー室

「シャーーーーー」と水が流れる音が響き、幾つもあるシャワーの個室に、俺とエリオは仲良く入っている

「……………なあエリオ、なんか疲れていないか？顔色も悪いぞ。」

「そうですか？いつもとなにも変わらないと思いますが。」

シャワーの壁越しに見えるエリオの顔は、若干青じろくなっており元気もない。

「なのはの奴は相変わらずドSな訓練ばかりやっているからな、少しは子供の体調にも気をつかって話だよな。」

「なのはさんは、僕達が実戦で怪我しないように必ず無事に帰ってこれるように訓練してくれています。」

「アホか。それで訓練で体調崩して怪我してたら本末転倒じゃねーか。」

「それは………そうですけど。」

なのはを庇いたいのか言い返してくるエリオの濡れた髪を撫でながら俺は笑いかける

「別になのはが悪いつて言いたいんじゃないくて、そんなお疲れのエリオに俺が疲労回復のマッサージをしてやろうと思ったんだ。」

「ええ！そんな悪いですよ。陸さんだって疲れているのに。」

「あの程度の訓練で俺が疲れるか。じゃあ、エリオ着替えたら俺の部屋にこい。いいな。」

「は、はい。わかりました。それじゃあ、着替えたら伺います。」

「おう。必ずこいよ。」

エリオの返事を聞きシャワーの水を止めると、俺はシャワー室を後にした。

夜

機動六課隊舎

陸の部屋

ベッドに横になり、エリオが来るのまで漫画を読みながら待っている。「コンコン」と丁寧なノックが聞こえた

「陸さん。エリオです、部屋に入ってよろしいでしょうか？」

「おう。きたか、遠慮せず入ってこいよ。」

「失礼します。」

ドアが開くとバジャマ姿のエリオが遠慮がちに入ってきた

「じゃあ、早速マッサージをやるから、俺のベッドにうつ伏せになってくれ。」

「は、はい。」

緊張しながら俺のベッドにうつ伏せになってエリオの背中ぐら

俺は股がった

「じゃ、いくぞ。痛かったら痛いって言えよ。」

「わかりました。陸さん、よろしいお願いします。」

こうして、俺はエリオに疲労回復マッサージを始めた。

――――――――――

「おい。エリオいい加減起きろ。早く起きないとなのはの訓練の量が倍增するぞ。」

くくくくくくくくくく。」

すでに朝日が上りはじめた朝五時。夜、俺の部屋でマッサージをしている途中で寝入ってしまったエリオを起こすがなかなか起きない。

「寝坊助なやつだ。しょうがない少し乱暴に起こすぞ。」

ベッドの縁に手をつけ軽く振動させると、ベッドが大きく揺れエリ

オが床に落下し、「ゴン」と痛そうな音がする

「いたたた、あれ？ここはどこ？僕の部屋じゃない。」

まだ寝ぼけているエリオに、俺はげんこつをおとす

「いたっ！！あれ陸さんどうしてここに？」

「理由は後で教えてやるから、自分の部屋に戻って着替えないとなのはの訓練に間に合わないぞ。」

「えっ！！ほんとだ。それじゃ陸さんまた訓練で。」

時間を見て驚いたエリオは慌てながら部屋から出ていった。

訓練中

「ほらほら。そんな動きじゃあ避けきれないよ。もっと考えて動かなきゃ。」

「「「はい」」」

相変わらずズバル達にドSな訓練をしているのはをボーッと見て
いるとフェイトが近よってきた

「ねえ、陸君。今日のエリオ調子が良いみたいだけどなにか知って
る？」

「いや、別に知らないが。なにか良いことでもあったから調子いい
んじゃないか。」

俺の返事に「そうなのかな？」と呟きながら、フェイトは改めて訓
練しているなのは達の方を見る

（エリオの奴調子良いみたいだな、こっちもマッサージしたかいが
あるってもんだな。なあドライブ？）

【そのようだな、あの少年から昨日にはない気力に満ちている。】

ドライブからも賛同をもらった俺は、自分の修行をするためフェイ
トから離れ高速移動でなのは達の邪魔にならない場所まで移動した。

今日の訓練が終わり、俺は部屋でミットガルドの世界の文字の練習
している

「けっこー難しいんだなこの世界の文字って、慣れるのに苦労しちゃうだな。」

【確かに、もといた世界で存在しなかった文字だ。】

「だよなー。やれやれ苦労するぜ。」

愚痴りながらディスプレイに映っているこの世界の文字を少しずつ読みながら覚えていると「コンコン」とドアをたたく音が聞こえる

「陸さん。少し中に入ってよろしいでしょうか。」

「エリオか？別に構わんが、どうしたんだなにかようか。」

返事をする「失礼します」とエリオが俺の部屋に入ると後ろから。

「陸さん。失礼しま〜〜す。」

可愛らしい声が聞こえ、キャロもエリオに続き俺の部屋に入ってきた。

「おい。なんでキャラがいるんだよ、説明して貰おうか。」

「い、いえ。その、キャラがどうして今日、僕の調子がいいのか問われて聞かれて……仕方なく。」

「はい。エリオ君に教えてもらって、陸さんのマッサージってすごく気持ちよくて疲れがとれて朝調子が良くなるんですね。」

キラキラした目で上目遣いで見つめてくるキャラに俺はため息をつく。

「気持ちいいかどうかは知らないが、調子が良くなるのは間違いないと思う。」

「じゃ、お願いできますか？私も陸さんで気持ちよくなりたいんです。」

事情を知らない人が聞いたら、即ポリスを呼ばれてもおかしくない発言を軽く言うキャラ。

「はあ、しかたがない。わかった。わかった。じゃあ、今日は二人ともやるが余り言いふらすなよ。」

「「はい。」」

笑顔で返事をするエリオとキャロを見ながらため息つく。

「だったらまずキャロからやるから、エリオは漫画でもみてろ。でもいいのかキャロ、マッサージをするには色々なところに触る事になるが？」

「良いですよ〜。陸さんに触られるの嫌じゃないですし。」

そう言うときャロは俺のベッドにジャンプし、横たわる。

「キ、キャロ。いくらなんで陸さんの部屋で少し行儀が悪いよ。」

「いや、別にかまわん。それじゃ、始めるから痛かったら言うんだぞキャロ。」

「はい。わかりました。」

笑顔で返すキャロの上に股がると、俺はまず太股にふれマッサージを始めた。

「きゃっ。はうっ。んん。陸さんくすぐったいですよ。」

「マッサージってそういうもんだろ？我慢しろよ。大丈夫だキャロ、少しずつ良くなっていくから。」

「は、はい。きゃん。」

こうして俺がエリオとキャロ、二人にマッサージをしたのち、気持ちよかったのか寝てしまった二人の寝顔を見ながら二人の間に割り込み『川』の文字のように寝た。

エリオとキャロにマッサージを続けて数日後、訓練が終了して部屋に帰る途中で、なのはが話しかけてきた。

「陸君。少し聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「別に構わないが……何かあったのか？」

「そういうわけじゃないんだけど、エリオとキャロ何かあった？」

「何かあったって？どうかしたのかあの二人。」

真剣に二人事を聞いてくるのはだが、俺から見た二人には別にかしなところは見当たらない、むしろ絶好調に見える。

「ううん。別にどうもしないんだけど、最近のエリオとキャロ調子が良いみたいだから。それに最近の二人、陸君に妙になつてゐたいだからなんか知らないかな〜と思つて。」

ニヤニヤした顔をして迫ってくるのは華麗に避ける。

「さあな、俺は知らないな。そんなに知りたいなら二人に直接聞けばいいだろ。」

「それはもう聞いた。でもエリオもキャロも『わからない』しか言わないんだよ。だから陸君にこうして聞きにきたの。」

「本人が解らない事が、俺に解るはずないだろうが。俺は部屋に帰るぞ。」

そう言つて、ニヤニヤ顔をしたのはの横を通りすぎようとした瞬間、いきなりなのはが俺に抱きつく顔と顔を耳元に近づけて小さな声で呟く。

「私見たんだよ。夜中、エリオとキャロが隠れながら陸君の部屋に

入っていくの。」

「なっ!!!」

驚きを隠せない俺に、なのは更に呟く。

「なにをやっているかは知らないけど、十歳の子供を夜中に連れ込んでいるなんて、はやてちゃんが知ったら大変だよ。」

はやてが激怒する姿が簡単に思い浮かび身震いする俺に、なのははまるで女神のような笑顔を作った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・要求を聞こうじゃないか。」

「にやはは。そんなの簡単だよ陸君。私にもエリオ達にしていることをしてくれたらいいんだよ。してくれたらはやてちゃんに黙ってあげてあげる。」

「俺は別に構わないが、いいのか？俺がエリオとキャロにしていることなのは知らないんだろ。えっちなことだったらどうするんだ？」

「それはないと思ってるよ。それに、もし本当に陸君がえっちなことをしているならエリオは呼ばないでしょ。」

そう言いながら俺から離れたなのは、綺麗な人差し指で俺の唇を軽く触り、少し前屈みになり胸を強調し上目遣いで、色っぽい目で、まるで俺を誘っているかのような甘い声で囁く。

「それじゃあ陸君。夜の10時に私の部屋に来ること。わかった？」

「ああ、わかったよ。なのは。」

「よろしい！」

満面の笑顔で頷きなのは元氣よく歩いていった

陸サイト終了

なのはサイト

自分の部屋、ドキドキしながら時計を見ると今は21時50分、陸君との約束の時間まであと10分。私は早めにシャワーを浴びて髪を乾かしお気に入りのパジャマに着替えて陸君を待っている。

（大丈夫。今日は邪魔者は入らないはず、フェイトちゃんとシグナムさんはクロノ君のところにいるし、はやてちゃんとリインは本局で会議に出席してる。他にもー。）

今日の夜のみんなの予定を考えながら、陸君のことを考える。

（今日誰も邪魔が来なければ、私と陸君は雰囲気しだいでフェイトちゃんとはやてちゃんより一歩先にいける。頑張らなきゃ。）

心に再度決意をかためると、近くにある手鏡を手にしなみを整える

（陸君、このパジャマかわいって言うてくれるかな？髪おろしてるけど、いつも通りの方がいいかな？うゝゝゝん。）

色々悩み首を傾げていると「コンコン」とドアを叩く音が響く。そして

「なのは来たぞ。ドアを開けてくれ。」

「は、はい。今開けるよ。」

大好きな人がやって来て大切な時間が始まった。

なのはサイト終了

フェイトサイト

少し時間を戻り21時

私とお兄ちゃん（クロノ）と一緒に食事をしていると、はやてから連絡がはいり珍しく焦っているはやてがディスプレイに映りだされた。

「フェイトちゃん！フェイトちゃん！今どこにいるん。」

「どうしたのはやて？今は次元管理局でお兄ちゃんと一緒に食事中だけ。」

「やられたー。今、ヴィータもシャルも六課にいないんや。シグナムはそっちにいるやろ、そうすると六課にいるのはなのはちゃんだけや。しかも、なのはちゃん私達が邪魔出来ないように通信切っているって通信できへん。」

はやての言葉の意味が解るまで数秒かかりようやく理解した。

「それってはやて。」

「ヤバいな。なのはちゃん私達がないことを良いことに陸君と良いこと一線越えるきや。」

はやての言葉を聞いた私は、持っていた箸を真ん中割りお兄ちゃんに笑顔で言う

「ごめんねお兄ちゃん。私、ちょっと用事ができたから機動六課に戻るね。」

「ああ、わかったよフェイト。」

震えた声で答えたお兄ちゃんの返事を聞いた私は部屋を出ていった。

フェイトサイト終了

陸サイト

訓練での汗をシャワーで流し体をきれいにして、エリオとキャロには今日はマッサージは出来ないと連絡していると、すでに21時50分『ちょうど良い時間だな』と思い向かいのなのはの部屋にむかい軽くドアをノックしたのち声をかける。

「なのは来たぞ。ドアを開けてくれ。」

「は、はい。今開けるよ。」

シュコンと音が鳴りドアのロックが外れ、開いたドアからなのはとフェイトの部屋に入る。

「時間通りに来たぞ。それでいきなりやるのか？ マッサージ？」

「マッサージ？ この頃調子のいいエリオとキャロにやっていたのはマッサージなの？」

「ああ」と頷く俺に、なのはは今から自分のことを妄想したのか顔を真っ赤にした。

「それで、どうするんだなのは。マッサージやるのか？やらないのか？」

「やる！やるよ！まずどうすればいいの？」

「それじゃまず、ベッドにうつぶせになって寝てくれ。」

「うん。」

俺の言う通りにベッドにうつぶせになったのはの上にまたがると、なのは更に顔を赤くした。

「いくぞ。今から体を色々なところ、普段は使っていない筋肉もほぐしていくから、痛かったら言ってくれ。」

顔を真っ赤にしながら頷くなのは、俺はまず手始めになのはの華奢な肩を揉む。

「痛い。痛い。陸君、力強すぎるよ。私壊れちゃう。」

「我慢しろ、少しずつ良くなっていくはずだから。」

痛がるなのはを宥めながらマッサージを続けていると、少しずつなのはからの痛がる声が消えて、妙に艶っぽい声がはじめた

「りくん……いいよ……んふ……あ、んあ……ん……く……ふ……もっと……」

なのはの言う通りに更に力強くマッサージを続ける。

「あ、すごい……はう……は、ん……あふ、んんう……はあ……あ、は……」

ヤバイ！妙に色っぽい声を出し、柔らかすぎるなのはの体に男して興奮してくる。

「な、なのは妙な声をだすな。こっちまで妙な気分になるだろ。」

「はあ……むりだよ……はっ……んっ、きもち……あっ、よすぎて……ああ……あっ、こええ……くうっ……とまらない……よお……」

止まらないなのはの艶声に、少しずつ俺の中にある理性にヒビが入っていく。

「……もつと……りくくん……もつとして……はっ、あぁっ、きもち……いいから……はう……んんっ……」

「だから、誤解を招きそうな言い方をするなよ。」

そして、後少しで俺の理性が壊れる瞬間――

ドガガガガアアアアン

物凄く音が部屋の中に響き部屋のドアが、黄色の魔力によって破壊されると、俺はマッサージをやめて、なのはは上半身をおこしてビツクリしながらドアの方を見ると。

「なのは、ダメだよ抜け駆け禁止だっていったよね。」

かってないないほど素敵な笑顔をしたフェイトがバルデッシュを手を悠然とたっていた。

「待てフェイトこれは別に――。」

「抜け駆けじゃないよフェイトちゃん。これは私と陸君の合意の上でやっているんだから。」

弁解する俺より速く言ったのはは、俺から離れフェイトとにらみ合う。

「なのははいつもそう、美味しいところだけ持っていく！陸君は私のものなんだよ！」

「違うよ！陸君は私のものなんだよ！そもそもフェイトちゃんは男性に興味ないって言ったよね！」

「陸君は特別なの！いくらなのはでも、陸君は渡さないんだから。バルデッシュ！」

「私だって陸君は特別なの！だから少しぐらいいいじゃない！レイジングハート！」

二人は瞬時に自身のデバイスをだし、バリアジャケットを装着すると「ガシュン」と音がしたと同時に、レイジングハートとバルデッシュから空の葉莢がおち、なのはとフェイトの魔力が上がる

「何やってんだ二人とも、少し落ち着け！そんな魔力で砲撃魔法を使ったら部屋が吹っ飛ぶぞ！」

二人を宥めようと注意するが

「陸君は黙ってて!!」

二人に同時に怒鳴られすごとと、部屋の隅まで移動して自身くる被害を最小限まで下げる

「いくよ。レイジングハート。エクセリオン・バスターーーーーー!!」

「バルデッシュ。トライデントスマッシャーーーーーー!!」

桜色の砲撃と黄色の砲撃が放たれ、俺はすぐにやってくる衝撃に備え、ため息をついた。

「やれやれ。この後、はやてから説教確定だな。」

桜色と砲撃と黄色の砲撃が衝突し大爆発がおきたが、フェイトなのはは爆発にかまうことなく更なる魔法を使い始める。

「なのはーーーーー!!」

「フェイトちゃん!!」

その後、建物を壊しながら続いたのはとフエイトの戦いは、八神家の面々に止められるまで続き、戦いの原因なった俺のマッサージは禁止になった。

五万アクセス達成記念

マッサージマスター 1 (後書き)

次は本編7話です。

主人公の登場で強くなっていく敵メンバー。

さて、どうする主人公。

感想などがあつたらどしどしください。

ホテル・アグスタ 前編（前書き）

遅くなりましたが、久々に更新です。駄文ではありますが、少しでも楽しんでくれたら嬉しいです。

ホテル・アグスタ 前編

移動ヘリ内部

バラバラと音を鳴らしがらミッドチルダ上空を移動しているヘリの中、俺とスバル達FW陣、なのは、フェイトにはやて、シャマルにリイン、犬のザフィーラがいた。

「ほんなら改めて、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや。」

「任務？今日なんかの任務なのか。いきなり呼び出されたからわからないだが。」

「だったら黙っていよーね。陸君。」

なのはがとぼけたこと言う俺の口をふざぐと、「かまわず続けて」とはやてに目で合図を送る。

「これまで謎やったかガジェットドローンの製作者、及びレリックの収集者は現状ではこの男。」

はやてがディスプレイを出現させると、ディスプレイには紫色の髪をした男性が映る。

「違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者ジェイル・スカイエツチを中心に捜査を進める。」

「こっちの捜査は主に私が進めるんだけど、みんなも一応覚えてお

いてね。」

「「「はい。」」」

スバル達が返事を返すとリインがディスプレイまで飛んでき、ディスプレイがホテルの映像にうつり変わる。

「で、これから向かう先はここ、ホテル・アグスタ。」

「骨董、美術品オークションの会場警備と人員警護、それが今日のお仕事ね。」

「取引許可の出ているロストログアが幾つも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高いとのことで、私が警備に呼ばれたです。」

「このての大型オークションだと、密輸取引の隠れ蓑になったりするし、色々油断は禁物だよ。」

「オークションの警備か。別にそれだけなら俺がくる必要はないと思うんだが。」

真剣な表情でスバル達に注意するフェイトに、俺は疑問の声をあげる。

「そんなことはないと思うの。前におきた事件のときに出てきた黒い鳥と黒いドラゴン、あれは間違いなくレリックを狙っていた。ならー。」

「今回もガジェットと同じで出現する可能性は高いってことか。」

「それに、もし今回もあの黒い鳥と黒いドラゴンが出てきたら、今の私達の戦力じゃあオークションを守れないと思うの。だからお願い。」

「いや、そおいう理由があるなら別に構わないんだが。」

慌ててなのはから顔を反らすと、なのはの「???」とクエスチョンマークを出して混乱している。

（くそくそ。こういう時、可愛いって得だよな。思わず頷いてしまった。）

混乱しているのはと俺にため息をつきながら、はやてが補足する

「現場には昨夜から、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長他、数名の隊員がはってくれてる。」

はやてが説明している途中、俺はシャルルの足元にある荷物に気になり目がいくと、キャロも気になっていたのかお互いの目が合う。

「私達は建物の中の警備に回るから、全線は副隊長達の指示に従ってね。」

「」「はい。」「」

スバル達は元気よく返事をする、キャロが右手を軽く上げて質問する。

「あのシャルル先生、さっきから気になっていたんですけどその箱

って。」

「ん？ああ、これ。隊長達のお仕事着。」

笑顔で返すシャルに、キャロはクエスチョンマークを浮かべていた。

「それから、陸君は副隊長達やスバル達と同じだからね。」

「わかったよなのは。だが、敵がきたら俺は俺なり戦わせもらうかな。そのへんはわかってくれ。」

「そのあたりは陸君の判断で構わないけど、絶対オークション会場は壊しちゃダメだからね。」

「了解。」

和やかになのはと話していると、不意に変な視線を感じて感じた方を目だけで見てみると

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ティアナが複雑な表情でこちらを睨んでいた。

移動が終了するとスバル達は素早くヘリから出ていくので、俺もヘリから降りて警備をする所定の場所に移動しようとした直前にシャルが、俺の肩に手をおいた。

「は～～い。陸君はこっちに残ってね～～。」

「はぁ、なにいつてんだシャル。俺はスバル達と同じで会場警備だろが。」

「そんなことはわかってるわよ。陸君は少し残って、なのはちゃん達の仕事着の感想を聞きたいの。」

「感想？」

分けの分からない事を言うシャルに俺は疑問符を浮かべていると

「シャル～～。着替え終わったよ～～。」

「は～～い。はやてちゃん。陸君もいますからどうぞ～～。」

テンションが変になっているシャルの返事を聞いて、なのは、フエイト、はやてが順番にヘリから降りてきた。

「どうかな陸君、似合ってるかな。」

「陸君。私のドレスどこか変なところないよね?。」

「やっぱり少し恥ずかしいわ。けど、どうや陸君結構かわいいやろ。」

なのは達三人のそれぞれのドレス姿を見た俺は、可愛くてなったなのは達に感想を言う。

「いいんじゃないか、三人とも素材は最高でなにもしなくても可愛かったけど、ドレス姿でもっと可愛いくなったよ。正直今すぐ抱きしめたいぐらいだ。」

「「「えっ!? 本当に。」」」

「ああ、本当だ。」

「「「ありがとう。陸君。」」」

「よかったね〜。みんな気合いいれたかいがあったね。」

シャマルにも言われて顔を真っ赤にしているなのは達を見ながら、内心安堵する

（回答に間違っただけじゃないか。みたいたな、前の世界じゃあ女性を誉めたことなかったから心配したんだが。）

【あの反応を見る限り失敗ではないだろう。】

いまだに誉められて嬉しいのか？顔を真っ赤にしているのは達とシャマルにきずかれないうちに警備場所に向かって歩き出した。

陸サイト終了

ティアナサイト

指定の警備場所では不審な人がいないか警備しながらスバルと念話する。

「でも今日は八神部隊長の守護騎士全員集合かあ。」

「そーね。あんたは結構詳しいわよね。八神部隊長と副隊長達のこととか。」

「うーん。父さんやギン姉から聞いたぐらいだけど。八神部隊長の使っているデバイスが魔道書型で、その名前が『夜天の書』っていうこと。副隊長達とシャル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有している特別戦力だってこと。」

で、それにリイン曹長合わせ六人そろえば無敵の戦力ってこと。まあ、八神部隊長達の詳しい出自とか能力の詳細は特秘事項だから、私も詳しいは知らないけど。」

「レアスキル持ちの人はみんなそうよね。」

「ティア、なんか気になるの？」

「別に。」

「そう。それじゃ、また後でね。」

「うん。」スバルとの念話を切った私は、改めて自分がいる部隊について考える。

（六課の戦力は無敵を乗り越して明らかに異常だ、八神部隊長がど

んな裏技を使ったのかは知らないけど。隊長各全員がオーバーS、副隊長でもニアSランク他の隊員達だって全線から管制官まで未来のエリートばかり。あの年でもうBランクをとっているエリオと、レアで強力な竜召喚師のキャロは、二人ともフェイトさんの秘蔵っ子。危ななつかしくはあるけど、潜在能力と可能性の塊でやさしい家族のバックアップもあるスバル。」

これだけでも嫌な気分になるのに、最後の人である藤田さんのことをについても考える。

（藤田陸さん。

次元漂流者で戦力能力はなのはさんや隊長達より遥かに上で、素手でリニアレールを壊したりできる人物。もといた世界では『赤龍帝』って呼ばれていたらしい。）

あまりの強さに身震いする反面、自分の弱さが嫌になるが首を振り弱気な考えを振り払う。

（やっぱりうちの部隊で凡人なのは私だけ。だけど、そんなの関係ない私は立ち止まる訳にはいかないんだ。）

ティアナサイト終了

??? サイト

ホテル・アグスタから10キロ離れた森の中に、フードで顔を隠し

た大人の男性と小さな女の子が立っていた。

「あそこか。」

「うん。あの場所。」

「しかし、お前の探し者はここにはないのだろうか？」

「うん。でも、ちょっと気になることがあるの。」

「気になること？」

男性が首を傾げていると、「ブウウウーーン」と音がして小さな紫色をした虫が小さな女の子の指に止まる。

「ドクターの玩具が大量に近づいて来ているって言ってるよ。」

??? サイト終了

陸サイト

警備場所であるホテルの屋上でシャマルと一緒に敵が来ないか見ていると、森の中から大量のナニかが飛来し空気を裂く音と、木々の葉を揺らす音が聞こえてきた。

「シャマル、ナニかがこちらに向かって来るぞ。スバル達とシグナムにヴィータ、ザフィーラに戦闘準備をさせろ。」

「えっ！でも私のクラートヴィントには何の反応もーーー。」

シャマルが言葉を言いきるより早く、クラートヴィントが反応する

「嘘！本当にクラートヴィントに反応。シャーリー。」

「はい！きたきた。来ましたよ。」

「ガジェットドローン一型、機影300、350。」

「陸戦三型、100、150。まだ増えます。」

シャーリー達から聞こえてきた情報を聞きながら「おかしい」と呟く俺にとシャマルがとう。

「何がおかしいの陸君、前にもまして凄い数のガジェットよ。」

「数なんか関係ない。あの程度の玩具なんて、俺の前には敵にならない。そんなことは前の戦いでわかったはずだ、それなのになぜまだ向かってくる？」

なにを考えているのか解らない敵に、頭を傾げていると俺の耳に無数の翼が羽ばたく音と、地鳴りのような足音がきこえてきたと同時に、シャーリーの焦り声が聞こえてきた。

「新たな敵が出現しました。敵は前の戦闘にも出てきた空を飛翔する黒いドラゴンタイプが500と、新しいタイプの黒いドラゴン

が600。」

「シャーリー、新しいタイプの映像くれ。」

「はい。」

表示されたディスプレイを見ると、戦ったことのないドラゴンが地面をかなりの速度で走っていた。

「地竜か。そこまで強くはないが、数がそこそこののが厄介だな。」

「『地竜』って弱い陸君？」

地竜――昔のティラノザウルスぽい姿をしている。

「いや。俺のいた世界じゃあ、そこまで強くはないモンスターだが、まだスバル達じゃ厳しい。」

「それじゃあ、どうするの？ シグナムやヴィータちゃんなら倒せるはずだけどリミッターにかけてあるから、あんなにたくさんはさすがに厳しいと思うし。」

「ならまず俺が敵に突っ込んでできる限り数を減らすから、抜けた敵だけ倒すようにシグナムとヴィータに連絡しといてくれ。」

「わかったわ。陸君、無理しちゃダメだよ。」

「わかっている。」

映像と揺れるのと連動してこちらの地面がも揺れる。空を見ると、赤い流星が目にもとまらないスピードで黒いドラゴンを倒していく。

「陸さんと副隊長達、ザファイラすご〜い。ガジェットドロ〜ンを凄いいきよいで倒してる」

「これで、能力リミッターつき。」

ティアナはなにかに耐えるかのようにきつく拳を握った。

スバルサイト終了

??? サイト

あちこちで小規模な爆発がおきている森と空で戦っている赤い流星の戦闘が見える。

「森で戦っている方はともかく、空で戦っている赤い流星は凄いな。」

「確かに。鎧が邪魔で顔はわからんが、途方もない強さだ。」

感心して見ているといきなりディスプレイが表示され紫色をした男性が映し出される。

『ごきげんよう。騎士ゼスト、ルーテシア。』

「ごきげんよう。」

「何のようだ。」

「冷たいねえ。近くで状況を見ているんだろう。あのホテルにレリックはなさそうだが、実験材料として興味深い骨董品が一つある。すこし協力してはくれないか。新しい協力者達と君達ならば造作もないことのだずなんだが。」

「断る。レリックが絡まん限り、互いに不可侵を守ると決めたはずだ。」

ゼストに断られると、紫色の髪をした男性がこちらに聞く。

「ルーテシアはどうだい。」

「いいよ。でも、またミッドチルダの町にいったいい？」

「かまわないよ。ありがとうルーテシア、今度お茶とお菓子を奢らせくれ。君のデバイス、アスクエビィオスに欲しいもののデータを送ったよ。」

「うん。それじゃ、ごきげんようドクター。」

「ああ、ごきげんよう。吉報を待っているよ。」

ディスプレイが消えるとルーテシアは頭まで被っていたフードを脱ぎ準備をする。

「いいのか？」

「うん。ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、私はドクターのこ
とそんなに嫌いじゃないから。」

「そうか。」

「それに、会いたい人がミッドチルダにいるから。」

前に一度だけ公園であい頭を優しく撫でてくれた青年の顔が浮かび
頬を染めながら、デバイスに魔力を通して呪文を詠唱すると地面に
魔法陣が浮かび上がる。

「我は子――」

??? サイト終了

陸サイト

おかしい。さっき大きめな魔力を感じて少し時間が経過すると、突
つ込むしかなかったガジェツドローンがヴィータとシグナムの
攻撃が避けられたり防いだりし始めた。

「ヴィータにシグナム、お前ら何やってんだよ！手を抜いてないで、
真剣にやれ！！」

「うっせー！わかってんだよそんなこと。だけど、いきなり動き
が良くなったんだよ。こいつら。」

「ああ、自動機械の動きじゃないな。」『有人操作に切り換わった？』

『それが、さっきの召喚師の魔法？』

「敵陣に召喚師がいるんならスバル達いる場所に敵が召喚されたらヤバイ、とりあえずヴィータはラインまで下がってスバル達の援護回れ、ザフィーラはシグナムと合流してくれ。」

「わかった。」「心得た。」

俺が指示を出すと、ヴィータとザフィーラは指示通りに動き始める。

「シグナムはもっと下がって戦ってくれ、いまから俺が少し本気をだして戦うからよ。」

「なに？」

『陸さん、シグナム副隊長、敵増援が来ます。空を飛翔するタイプのドラゴンが600、地竜タイプのドラゴンが700です。』

「やはり増援を送ってきたか、俺の足止めが目的だな。」

言いながら俺は肩から背中にかけて赤い魔力を集め形を形成させる。数秒が経過して、できあがったのは背中中のバックパックと、両肩に大口径のキャノン。

ホテル・アグスタ 前編（後書き）

つぎは、ホテル・アグスタ後編です。

感想などがありましたらどんどんください。
お願いします。

ホテル・アグスタ 後編（前書き）

遅くなりましたが更新です。相変わらずの文才0の駄文ですが、少しでも楽しんでいただけたら嬉しいです。

ホテル・アグスタ 後編

ティアナサイト

ズバアアアアアアーーーーー！！！！！！

地面が激しく揺れ空をみる。空には私達では考えられないレベルの極大な赤い砲撃が、遙か彼方にいる敵軍と地面両方を消滅されながら空の彼方に消えた。

「あれが、あれが陸さんの魔法なのかな？」

「たぶん……今回も派手にやったな……陸さん。またはやて部隊長に怒られるぞ。」

「相変わらず凄いです陸さんは、僕もいつか陸さんみたいにー」

「みんな今は戦闘中よ。目の前の敵に集中して！シュート！！」

各々感想を言い合うスバル達を注意しながら、クロスミラーージュからオレンジ色の魔力弾をガジェットドローンに発射するが。

「ダメ。効かない。」

発射された魔力弾はガジェットドローンに当たる前に避けるか、A

MFで魔力を無力かされ僅かに表面を傷つく程度にとどまっている。

「硬い！うまく倒せない！」

スバルやエリオも先ほどから攻撃しているが倒せないでいる。私はあまりにも倒せない敵に少しずつ焦り前に出る。

「ティア、無理しないで練習通りやれば大丈夫だから。」

「ティアナさん、前に出過ぎです。下がってください。」

スバルとエリオが私を心配してくれるが、ここで諦める訳にはいかない。

『防衛ライン、もう少し持ちこたえてすぐにヴィータ副隊長がくるから。』

「「了解」」

「守ってばかりじゃ行き詰まります。全機しっかり撃ち落とします！」

シャル先生の言葉を否定して、目の前の敵に意識を集中する。

「大丈夫。毎朝毎晩あれだけ練習してきたんだから。エリオセンターに下がって、私とスバルのツートップでいく！」

「は、はい。わかりました。」

「スバル、クロスシフトAいくわよ！」

「おう。」

作戦を理解したスバルはウイングロードで派手に動き回り、ガジェットドローンの注意を引く。その隙に私はこれから使用する魔法に集中する。

「クロスミラージュいくわよ！」

ガシュ、ガシュ、ガシュ、ガシュと音がして、クロスミラージュから4個の空の葉莢がおちて、自身の魔力が増大すると周りに複数の魔力弾が展開されていく。

『クロスファイヤ……。』

両手を挙げて発射体勢に移行すると、スバルは私の姿を確認し魔力弾が当たらないように離れいく。

「シューーーー！ー！ー！ー！」

両腕を下に下げると、周りに展開していた魔力弾が、いきよいよくガジェットドローンに向かっていく。

「はああああああつ。」

さらに複数の魔力弾を展開して追撃かけ、次々にガジェットドローンを倒していくが、一匹のガジェットドローンが魔力弾を避ける。すると運悪く魔力弾は逃げていたスバルに迫る。

「スバル！ー！ー！」

「えっ？」

私の慌てた声にスバルは振り向くが、魔力弾はもう避けられない距離になっていた。

ティアナサイト終了

陸サイト

ドラゴンブラスターでこちらに向かって来ていた敵増援と、森が大分削られて変わってしまった景色を見て冷や汗が流れる。

「ヤベー。流石にやり過ぎたか、あとではやてに怒鳴られそうだ。」

『陸さん！いくらなんでもやりすぎですよ。どうするんですかあの変わってしまった地形！』

ディスプレイ越しに怒りを顕にしているシャーリーを「まあまあ」と宥めようとした瞬間、どこからか戦斧が回転しながら高速で飛来した。

「！！なんだ！？」

飛来した戦斧を紙一重で避けると、戦斧は回転しながらブーメランのように戻りある男性の手に握られる。

「なんだテメーは何者だ。それにその金色の戦斧は。……まさか『獅子王の戦斧ヘレグルス・ネメア』神滅具じゃないだろうな。」

「わははははは。その通りだよ赤龍帝、この戦斧は君のいった通り神滅具の一つ『獅子王の戦斧』だよ。」

俺の問いに『獅子王の戦斧』を持っている男性は笑いながら答えるところらに刃をむける。

「さて始めましょうか赤龍帝の旦那、数々の神滅具使いを倒した実力見せてもらいますぜ。」

「上等だよ雑魚が。この世界に来てから退屈してたんだ、少しは楽しませろよ。」

俺も空手の構えをとり、隙を探るが。

（結構やるなコイツ。構えに隙がないし魔力も十分にある。）

背中のブーストと、足に込めた魔力を爆発させて超高速で敵に接近して右拳で殴ろうとすると、接近にきずいた敵は戦斧を降り下ろす。

「だがまだ甘い!!!!!!」

迫り来る戦斧の側面に、限界まで内側にねじりきった拳を入れ、一気にねじり上げ筋肉のポンプと螺旋の力で最小にして最速の払いを瞬時に行う。

「白羽流し!!!!!!」

「なっ！！！？？」

ドガン！！、っという音とともに殴られた男は30メートル位吹き飛ぶが、途中で体勢を立て直す。

「やりますね〜。今の技は何ですか？見たことも聞いたこともない。素晴らしい技です。」

「アホか。教える分けないだろ、それにいまから死んじまう奴に教えたって無駄だろう。」

「ははははは。言いますね〜あなたは〜、ですがこれならどうでしょうか？」

男は笑いながら金色の戦斧を自らの前に垂直に構える。

「禁手化へバランスブレイク。」

その言葉を唱えると強風が吹き荒れ周囲にある森の木が根っ子から吹き飛ばしていく。

「こりゃ、予想どおりかなり強いな。俺が相手でよかったぜなのは達が戦ったら秒殺だな。」

辺りにまばゆい閃光が広がり数秒が経過する。その閃光が止んだとき、前方に現れたのは金色の姿をした獅子の全身鎧だった。頭部の兜にはてがみを思わせる金毛がたなびく。胸に獅子の顔と思われるものがあり、意志を持っているかのように目を輝かせる。

「見たか見たか。これが獅子王の戦斧の禁手、『獅子王の剛皮』へ
レグルス・レイ・レザー・レックス！さあ、殺り合おうか赤龍
帝！！どちらが強いかわ黒はつきりさせようや！！！」

「いきなり暑苦しくなったなあ前……でもこんな早く敵の神滅具使
いが『負けに』来てくれるとは思わなかった。ラッキーだ。」

「『負けに』とはどういう意味だ赤龍帝。」

「言葉のままさ、お前は俺に『負ける』んだよ。確かに神滅具を禁
手にして強くなってはいるが、その程度の力で俺に勝とうなんて1
00年早いぜ。」

「いいだろ。ならば確かめてやる。いくぞ赤龍帝！！！！」

金色の魔力を纏い周りの景色を壊しながら超スピードで突っ込んで
くる獅子王の神滅具使い。

「ああ、全力でこいよ獅子王よ。全力で来ないと死んだ時に悔いが
残るからな！！」

俺も赤い魔力を体に纏い周りの景色を壊しながら超スピードで、金
色の獅子に突っ込んでいく。

「があああああああ！！！！！！！！！！」

「はあああああああ！！！！！！！！！！」

赤い魔力と金色の魔力がぶつかり合いドガン！！！！、っという本日

最大の爆発が発生し、地面はクレーターのようになぐられ雲は凄いきよいで左右に流され森は吹き飛ばされていく。赤色と金色が入り乱れあちこちでドガン！ドガン！と音がしては衝撃波が辺りに響き地面は揺れる。さながら台風のような神滅具使い同士の戦いが始まった。

陸サイト終了

シグナムサイト

「くっ。凄まじい戦いだ二人の姿はまるで見えん。しかし戦いの衝撃波はここまで伝わってくる。これが神滅具同士の戦いか。」

陸が戦っている場所から五キロほど離れた位置で、3型ガジェットドローンと戦っていたシグナムは最後の一機を倒し戦いの様子を見ていた。

「私達魔導師では太刀打ち出来ない強さだ。しかし、陸のほうが実力は上のようなだな。」

赤龍帝と獅子王の戦い一見互角のように見えるが、初めから赤龍帝が押していた。

獅子王は赤龍帝のパワー、スピード、テクニック戦闘経験、全てにおいて下回っている。

故に、獅子王に勝ち目はなく負けるのは時間の問題だった。しかし疑問が残る。

「おかしい。あの敵は陸に勝てないことぐらいわかっているはず、
なのになぜ逃げない？まるで少しでも陸がこの場所にいる時間を稼
いで……………しまった!!」

足に魔力を込めてヴィータ達がいる場所に向けて走りだす。すると、
私の行動を不思議に思ったのかザフィーラがついてくる。

「どうしたシグナム。一体何処に行く？」

「スバル達がいる場所だ！あの敵軍は四！本体は陸をこの場所に惹
き付けてスバル達の所にいるを襲撃するはずだ。」

ザフィーラに説明しながらシャルに念話する。

「シャル！シャル！聞こえるのなら何でもいい返事をしてくれ。
シャル!!」

念話の返事がないシャルに一層スバル達やヴィータ、シャルの
心配がます。

「頼む。無事でいてくれ。」

更にスピードを上げながら祈るように呟いた。

シグナムサイト終了

陸サイト

（シグナムやっときずいたか。気がつくのが遅すぎた。）

チラリと視線だけでシグナムの移動を確認すると。

「戦闘中によそ見してんじゃねーよ！！！！！」

戦艦の主砲のような右拳が俺を殺すために向かってくる。

その右拳を左手で捌きながら手首を掴むと、自身を回転させながら敵の後頭部に肘を叩き込む。

「ソーク・グラブ！！（回転肘うち）」

バキン！！と音をたて肘が叩き込まれた後頭部の兜が粉々に割れる。

「ガッ！！？？グッ！」

俺に捕まれていた右手首を無理矢理外し、距離をとる。

ゼエ、ゼエ、と息を切らし肩で息をとるその姿は、身体中に打撲や切り傷が至るところにあり満身創痍の状態である

「どうした？数分前の威勢がなくなったぞ。しかし、禁手してこの程度か。お前、一年生だな禁手に至ってまだあんまり時間がたっていないだろ。」

「……………そうだ。それがどうした。」

「いや別にどうもしない。ただ単純に命知らずだなく〜と思っただけだ。」

「……………」

質問しても無言で返す男に、ため息をつき首をふりながら半身になり左腕を自身の前にだし右腕に魔力を集中させながら水平に構えをとる。

「やれやれ黙りか。だが、お前と戦うのだんだん飽きてきたし、仲間のことも気になる。悪いが次の攻撃で終わらせる。」

「!!!!」

俺の右腕が大きくなるにつれて、男は満身創痍ながらも最後の力で魔力を身体中に行き渡らせカウンターのチャンスをねらう。右腕のチャージが終わり狙いを定める。

「いくぞ！これで終わりだ!!!! 『龍剛の戦車』」【Charge
Solid Impact!! <チェンジ ソリット インパクト
〜】

「こい！赤龍帝!!」

俺の体が莫大な赤い魔力に包まれ、敵である男に接近しようと飛び出す瞬間。

「『時間加速』。一秒を十秒に。」

『時間加速』により敵に認識出来ない速度で眼前まで接近すると、極大になった拳を撃ち込む。そして、肘にあった撃鉄を打ち鳴らし更に威力を上げる。

ドゴオオオオオオン

ど莫大な爆発音を鳴り響かせて、敵が地面に墜落する。俺は敵が墜落した場所にゆっくりと降り立つと隕石が落ちたかのようにできたクレーターの穴を覗き敵の生死を確認する。

「ガハッ……ハアハアハア……クソガ。ハアハア、何が……起きやがった……んだ。」

血を吐きながらもかろうじて生きている敵に感心する。

「一年生でもこの程度じゃ死なないか。でもすぐに死ぬがな。」

再び背中にバックパックとキャノン砲を形成して、砲口を倒れている敵に標準を合わせる。

「さようなら。また来世でな、獅子王。」

「クソが!!」

チャージが終了して砲撃放つ瞬間に声が聞こえ。

「「禁手化」」

その言葉を言い終わると、森の中から無数の甲冑騎士が剣を手に持ち高速で襲いかかってきた。

「なんだ!なんだこいつらは?」

いきなり襲いかかってきた騎士団からの高速で繰り出され斬戟を捌

きながら後退すると。

ガアアアアアアアッ

剣で形成されたと思われるドラゴンが現れ、口を大きくあけて噛み砕こうと襲いかかってくる。

「チッ！なんなをだよ一体！」

更に高速でバックステップをして高速で襲いかかってくるドラゴンの攻撃をかわし体勢を立て直す。が――

「しまった！霧が『絶霧』か！」

辺り一面に濃霧に包まれる。数秒が経過して霧が晴れてから、『神眼』を使い周辺十キロ見渡すが、獅子王も甲冑の騎士も剣で形成されたドラゴンも初めからいなかったかのように忽然と消えていた。

「くそ！まさか『絶霧』がいるとは。『絶霧』の結界で新手の気配がわからなかった。いるとわかっていれば獅子王も簡単に殺したのに！」

愚痴っているとディスプレイが現れ、シャーリーが現れる。

「やっと通信が回復した。陸さん聞こえますか？どうやらそちらは終わったみたいですね。すみませんが急いでこちらに戻って下さい。」

「どうした？何かあったのか？」

「詳しいことは戻ってから説明されると思います。」

「????? わかった。すぐに戻る。」

ディスプレイが消えると、ブーストを軽く噴かし空中に浮きホテル・アグスタまでゆっくり戻った。

陸サイト終了

ルーテシアサイト

「うん。ガリユー、ミッションクリアいい子だよ。じゃそのままドクターに届けてあげて。」

ガリユーとの通信を切ると地面に展開していた魔法陣も消える。

するとゼストが私のローブを手に近寄る。

「品物はなんだったのだ?」

「わかんない。オークションにだす品物じゃなくて、密輸品みただけど。」

「そうか。」

ゼストはローブを私に渡すと、戦場になった森をみる。

「戦いは終わったな。全線の騎士達がいい戦いをした。」

「うん。それにしても、あの赤い魔力をした神滅具使いは強かったね。」

「ああ、できれば戦いたくはない相手だ。」

さつきまでの戦いをみて急に陸お兄ちゃんに会いたくなった。

「さて、お前の探し物に戻るとしよう。」

「コクン」と、軽く頷くと私達は歩き出した。

ルーテシアサイト終了

陸サイト

「なるほどな。まあ召喚師を追えなかったのは残念だが、いるとわかればやりようはあるな。」

ホテル・アグスタに戻りヴィータ達の説明と周囲の状況を見る。

「それより問題なのは、神器使い四人も現れ一人に逃げれたことだ。」

「すみません。」

頭を下げて悲しい顔をするエリオとキャロに、俺は強く否定する。

「別に二人が気にすることじゃない。それより二人に怪我がなくて安心したよ。」

二人の髪を盛大にまで回すと、エリオとキャロは気持ちいいのか眼を細くしている。

ヴィータ達の説明によると、ティアナのミスショットはヴィータがギリギリ間に合い防いだが、その後に四人の神器使いが現れたらしい。

「四人の攻撃方法はどんな感じだったんだヴィータわかるか？」

「えーと。そこで倒れている一人が炎で攻撃してきて、二人が青い矢と緑の矢での攻撃で、逃げれた最後の一人が影で攻撃を吸収したり跳ね返す奴だったよ。」

「なるほど」と頷きながら敵のことを考えているとエリオが何かにきずいたのか服の袖を引っ張る。

「そういえば、陸さん最後の一人が逃げる前すごくイヤな感じがしました。」

「イヤな感じ？」

「はい。他の三人を倒すと影を操る人が絶叫をあげながら立ち上がると、変な寒気がして様子を見てみると魔法陣が展開されて消えてしまいました。」

「イヤな感じの寒気ねえ。」

イヤな予感が当たりため息をつきながらも他にてがかりがないか見渡すと、ティアナとスバルがいない。

「キャロ、ティアナとスバルはどこいったんだ？この場所にいないみたいだが。怪我でもしてシャマルに具合を見てもらってンのか？」

「ええツと。スバルさん達なら裏手の警備に行ってます。」

キャロの答えに俺は疑問をあげる。

「何で？周囲十キロほど見渡したが敵の気配はないし、魔力も感じないが。」

「多分まだスバルさんを撃ってしまったことを気にしているんだと思います。」

「ふーん。そんなもんかね。」

その後、裏手からスバルだけが出てきたがティアナはしばらく裏手から出て来なかった。

けど、俺の耳にははっきりとティアナの泣き声が聞こえ複雑な気分だった。

「やれやれ。一回ミスショットしたのがそんなにショックかね。新人なんだからそれくらいあるだろうに。」

ティアナの泣き声はしばらく続き、その泣き声は森の中に響きわたった。その声を聞きながら俺はティアナをどうするか考えた。

ホテル・アグスタ 後編（後書き）

次はティアナの悩みと強さとは？（仮）です。
どうなるかは考え中です。

感想などがありましたらガンガンください。

ティアナの悩みと強さとは（前書き）

遅くなりました。更新です。相変わらず文才が0で駄文であります
が、少しでも楽しんでいただけたら嬉しいですよ。

ティアナの悩みと強さとは

神滅具使いとガジェットドローンからの攻撃を退けた機動六課は、そのまま現場検証の手伝いをしている。

そんな中俺はオークション会場の1室で会議中である。

一つの四人用の小さいテーブルに座っている。

俺の向かいにはやて　なのは、隣にフェイトが座りと今後のことについて話しあっていた。

「陸くん、神滅具『獅子王の戦斧』と戦ってどうだった？何とかなりそう。」

「あいつ一人なら造作もない。が神滅具じゃないほうにかなり手練れな、敵側に神器使いはかなりの人数がいると思ったほうがいい。」

「どうしてそう思うの陸くん。」

フェイトの質問に最近になってようやくなれてきたディスプレイを展開して、はやて達に問題の場面を見せる。

「これは一体なんやの？騎士みたいな格好をした人間？」「違うぞはやて、これはたぶん聖剣創造の『禁手』聖輝の騎士団へブレード・ナイトマス」だと思う。神滅具ではないが極められると厄介な神器だ。」

「厄介？神滅具ではないんでしょ。だったら――」

なのはの疑問を指で塞ぐと説明を続ける。

「聖輝の騎士団の極めて厄介な能力は、使い手の何らかの能力を騎

士団に付与できることだ。」

「「付与？」」

「つまり、速度と力に技量あと頑丈さ。こんな感じで聖輝の騎士団は神器使いが強ければ強いほど厄介になっていくんだよ。」

「なるほど、確かに厄介な敵ですね。ならこっちのドラゴンは何なんでしょう。たくさん剣が重なりあって出来ているみたいだけど。」

フェイトはデイスプレイを操作して騎士団と同時に出現したドラゴンを拡大して映し出す。

拡大されたドラゴンは本当に無数の剣が重なりあって造られている。

「さあ、そちらはさっぱりわからん。なにかの『禁手』には間違いないと思うが、そんな『禁手』聞いたこともない。」

「陸くんでもわからない敵ってわけだね。みんなのことも心配だし注意しなくちゃ。」

手を強く握りしめ決意を固めるなのはに、俺は質問する。

「それより俺が知りたいのは捕まえた神器使いをどうするかってこと。実際にどうするんだ捕まえた三人は、ちなみに檻の中にいれても神器で壊されて脱走するだけだぞ。」

「うん。わかってる。けど捕まえた神器使いの人達にも何か理由あって戦っているかもしれないから、しっかりお話しがしたいんだ。」

太陽のようなまぶしい笑顔をつくるなのは、俺は眼をそらす。

「まあ、すきにやればいいと思うよ。そんな簡単にはいかないと思うがね。」

「陸くん。なのはちゃんにそないな言い方しなくてもええと思うよ。」

軽く手を振りながら、はやての注意に「はいはい。」と軽く応え席をたちあがるとドアへ向かう。

「もういい時間だし、とりあえず続きは機動六課に帰ってからしようぜ。スバル達の現場検証の手伝いもそろそろいいだろう。」

なのは達も時計を見て頷き部屋をでる。

通路を世間話をしながら四人で歩いていると、向かいから一人の男性が歩いてきた。

男性がなのは達に気づく。

「なのは！フェイトにはやても。」

「「「ユーノ君！」」」

知り合いだったのかユーノと呼ばれた男性になのは達は駆け足で近づく。

「久しぶりだねなのは、フェイト、はやて。元気だった？」

「うん。ユーノ君こそ元気にしてた？」

「体調とか壊してない。元気でやってる？」

「なのはちゃんもフェイトちゃんも心配すぎや。ユーノ君もう大人なんやし、体調管理ぐらいやっているよ。」

少し前の通路で和気あいあいと話すのは達を横目で見ながら、自分関係ないしなーとみんなの横を無視して通り過ぎる。が、いきなり首に迫ってくる気配を感じ振りがえる。

「もう。なんで無視して通り過ぎようとするかな。そういうところ子供だよね。」

無視して通り過ぎようとした俺に、後ろから手を伸ばして首筋をつかもうとしたなのは。

「そうだよ陸くん。初対面の人に失礼だよ。」

「そやな。挨拶ぐらいしたほうがいいよ。」

フェイトやはやても俺の対応に不満を抱いたのか口を尖らして意見を飛ばす。

三人に言われて仕方なくなのは達と話していた男性を見る。

男性は髪は茶色で長く首のちかくで一つに纏めている。顔は温和そうで眼鏡をかけて、ピッチリとスーツを着ている。

「はじめまして。ユーノ・スクライアです。」

「どーも、次元漂流者で民間協力者の藤田陸です。」

握手を交わすとユーノとなのはを見てから、「なるほど」と納得して頷く。なのは達はそんな俺を見て「????」と疑問符を浮かべている。

「ユーノとなのはは、交際中なんだろう？だから、なのははユーノを見たときあんなにはしゃいでいたんだな。悪かったよ彼氏が無視されんだ怒ってとーろーフゲッ!!」

二人を見た時の反応で自分が思ったことを素直に、そしてありのままに語る。が、そんな俺になのはから光速のビンタが襲いかかった。あまりの速さにビンタをくらった俺は、ビンタされた場所が立派な紅葉になっていた。ビンタをしたなのは顔を真っ赤にしながら大声で否定し始めた。

「違うから陸くん。ユーノ君は『ただの』お友達なの！恋人とかじゃないから！『絶対』にないから。」

「『ただの』『絶対』はははははは………はあっ。」

なのははが喋る度にユーノの周りオーラが暗くなっていく。おいおいなのははそれ以上喋るな、ユーノが死んじまうぞ。

俺は「わかったわかった」と肩を押さえて必死に否定しているなのはを宥めているとそんな雰囲気を感じとったフェイトとはやてが話しかける。

「それじゃねユーノ君。今の事件が終わったら、ゆっくり一緒にお茶しようね。」

「ほなら、またなユーノ君。ほらなのはちゃんも。」

「ああ、うん。またねユーノ君。」

「うん。みんなもまたね。」

俺達はユーノの反対の道にいき、なのはは手を振りながら別れた。そんな光景を見て俺は、やっぱり隠しているだけでユーノとなのは交際しているんだ。と改めて思った。

――――

機動六課へ帰った俺達はスバル達FW陣を解散させて部屋へ帰す。どさくさ紛れて部屋へ帰ろうとした俺はフェイトに見つかり、首根っこを捕まれ部隊長室に連行された。その後、部隊長と各隊長、副隊長でこれからのことについて二時間ほど話しあってから、みんなそれぞれの部屋へ帰っていった。

「やっと終わった〜。それにしても、なんで隊長でもない俺が会議にでなければならんだ。そんなの勝手にやればいいのに。」

修行場に続く道で愚痴りながら歩いていると、道から外れた林の向こうで誰が動いている気配がある。

「この気配は……………」

はあっ、疲れているんだから休めばいいのに。」

あまり乗り気はしないが、今日の事件から考えて無理して訓練しているバカにおぼえがあるのでできずかれないように近づき様子を見る。

「ふっ！はあっ！くっ！」

予想通りの人物であるティアナが射撃練習している。

あまりにも、予想通り過ぎて呆れているとティアナが俺の存在に気づき。なんであなたがいるのよ的な心底イヤな顔を造る。

「なんであなたがここにいますか？もしかしてつけてきたんですか。」

「アホ。寝言は寝てから言え。何が悲しくて一回失敗しただけで拗ねてる子供のあとを追いかけんだよ。」

鋭い目つきをさらに鋭くして睨んでくるティアナに欠伸をしながら喋る。

「あとさ、練習少し見たけどヤケクソ感でやっても身に付かないしあんまり意味ないから。それをやるぐらいならやらないほうがいいぜ。」

「なっ！！！」

自身でもわかっていたのか凶星を突かれて黙ってしまうティアナに、更に追い討ちをかける。

「あと、仲間にあまり心配かけるなよ。スバル達も心配してたぞ。子供に心配かけるなよお前のほうが年上なんだから。」

「うるさい。……………うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい！！！」

悲鳴のような大声を叫びながら俺の言葉を否定するティアナ。そして、クロスミラージュの銃口をこちらにむけ襲いかかってきた。

陸サイト終了

ヴィータサイト

陸が会議室から欠伸をしながら退室していく。

そんな姿を見てなのはとフェイトは微笑ましく、はやてとシグナムは苦笑していた。

私は退室しようとするのはとフェイトに話しかける。

「なあ、二人ともちょっと話があるんだけどいいか？」

「なあにヴィータちゃん。」

話しかけられたなのは達は再び椅子に座り直す。

「訓練中からときどき気になっていたんだよ。ティアナのこと。」

「うん。」

「強くなりたいなんてことは、若い魔導師ならみんなそうだし多少無茶もするもんだけど………ときどきちょっと度を越えてる。あいつここにくる前になんかあったのか？」

自分の聞きたい事を聞くと、なのはは笑顔から悲しく顔になり複雑な表情でディスプレイを展開した。

「ティアナのお兄さんティイダ・ランスター。当時の階級は一等空位、所属は首都航空隊享年21才。」

「結構なエリートだな。」

「そうエリートだったからなんだよね。ティイダ一等空位が亡くなった時の任務逃走中の違法魔導師に手傷は追わせたんだけど、とり逃がしちゃってて。」

「地上の陸士部隊協力を仰いだおかげで犯人はその日のうちに取り押さえられたんだけど………。」

なのはとフェイトの声が話が進む度に小さく暗くなっていく。でも、ここまで聞いて今さらやめる訳にはいかない。

私は改めて真剣に二人の話に耳を傾けた。

ヴィータサイト終了

陸サイト

「ったく。いきなり襲いかかってくるなんて、どんな教育されてきたんだお前は？」

「くっ！この！なんで外れないのよ！」

ティアナは地面にうつ伏せにされながら必死に俺の柔術の極めを外そうとがんばっている。だが、右腕関節を極められ体重をかけられれば人間は人体構造的に動けない。
どんなにがんばっても無駄なのだ。

「止めとけて絶対の外れない。無理して外そうとすると大切な右腕折れるぞ。」

折れるという言葉にティアナは、ビクツと肩を震わせる。そして次第に大人しくなっていく姿に安堵の息を吐きだす。

（フーッ。やれやれ、いくら暴れたら折れないぐらいに力を加えるつもりでも、加減が難しいから大人しくなってくれて良かったよ。）

心の中でため息をつく。すると、極めている右腕が微かに震えている気づく。その震えは右腕だけではなく体全体の震えている。そして悲しみの嗚咽が聞こえ、地面に水滴が落ちる。

「ヒック。なんでよ。……なんで……勝てない……のよ。ヒック。私………がんばってる。毎日、毎日、ヒック。がんばって練習するのに………なんでよ。………なんでヒック。」

声を大にして泣かないのはティアナ自身のプライドなのか。声を殺して泣きじゃくってるティアナの姿に右腕を離す。

「……………なんか強くなりたい事情でもあんのか？話してくれ。力になれるかもしれん。」

できるだけ優しい声と表情でティアナに話しかける。ティアナは数秒考えると小動物のように可愛く頷いた。

説明中—————

ティアナと兄の過去の話聞き終える。話事態は簡単だった。

「『兄の命が死が侮辱された。だから私が証明する。ランスターの弾丸はどんな状況でも敵を撃ち抜けることを。』証明したい。こんな感じだよね。簡単に言う。」

「はい。」

泣き止み目を真っ赤にしながらも返事をするティアナ。

そんなティアナに俺は。

「なら努力するしかないな。兄ができなかったことをお前が継ぎたいなら努力するしかない。」

「でも、……………凡人の私がいたい!!」

また泣き出そうになるティアナの頭を軽く殴り黙らせる。

「アホなことを言っている暇があるなら努力しろ。いいかティアナ、人間できる。できない。なんてことははない、やるか、やらないか。それだけだ!!」

「藤田さん……はい！わかりました。」

涙を振り払い立ち上がったティアナの表情は憑き物がなくなり、スッキリした表情でやる気に満ちていた。
そんなティアナの表情が昔の自分を見ているようで懐かしくもあった。

「よし！ちんけな不安は吹き飛んだな！なら俺がお前の練習に付き合ってやるよ。」

「えっ！いいんですか藤田さん？」

「構わねえよ。俺も練習するつもりだったし、それに。」

話の途中から感じた気配に後ろを向き茂っている林に声をかける。

「いるんだろ。スバル、エリオにキャロ。バレてないと思ったか、お前達も一緒に鍛えてやるから出てこいよ。」

「えっ！ええっ！」

ビククリしているティアナをよそに、声をかけられた三つの木がビクツと震え、数秒した後にはスバル達三人がテヘツと笑いながら姿を現した。

「ごめんねティア、ティアのことが心配で内緒で後を」

「「ごめんなさいティアナさん。」」

本当に心から謝るスバル達にティアナは感動しているのか体を震わせいるだけで言葉を口にする事が出来ない。
そんなティアナに俺の髪を軽く撫でる。

「いいかティアナ。お前にはこんなに心配してくれる仲間がいる。それはとても心強い事なんぜ。そんな仲間に心配をかけさせちゃだめだ。」

「はい。……はい!!」

力強く答えティアナの綺麗な髪を優しく撫でながらスバル達に俺は自身の心臓を親指で指さす。

「いいかみんな! 覚えておけよ! 本当に強い奴は力や魔力が高い奴じゃない! 心が強い奴なんだよ!!!!」

「「「はい! わかりました!!!!」」」

「よーし! 早速いまから練習を初めるが準備はいいか!？」

「「「はい!!!!」」」

俺が練習場まで走りだすとスバル達も負けじと走り出す。未だに弟子を育てたことはないが、「これが弟子と師匠の関係なのかな」とぼんやりと思った。

こうして俺とスバル達との夜間の自主トレの毎日が始まった。

ティアナの悩みと強さとは（後書き）

次はまだ未定です。

しかし、できるだけ速く更新するつもりです。

感想ありましたらどんどんください。

強くなるために（前書き）

模擬戦までやるつもりが練習だけで終わってしまいました。

久しぶりの更新です。

相変わらず駄文ではありますが、少しでも楽しんでくれたら嬉しいです。

強くなるために

ティアナの練習

「よし。やるぞティアナ。準備はいいか？ いいならクロスミラージュを構えろ。」

「はい！！」

ティアナから10メートルぐらい離れた所で指示をだす。

今、俺とティアナがいる場所は砂漠で周囲には遮蔽物となる建物や岩などはなにもない。

そんな場所で準備オーケーになったティアナは、クロスミラージュを構える姿を確認する。

「確認するぞティアナ。お前には才能はない。だから『とても難しい魔法を簡単に使える魔導師ではなく、とても簡単な魔法で凄い威力がある魔導師になれ！』わかっているな。」

「はい！ わかっています！！」

元気な返事がティアナから返ってくる。その返事聞き迷いはもうないと判断した俺は今日から練習を始める。

「今のお前に足りないのはたくさんあるが全部やるには時間がかかる。だから、まず魔力弾のスピードアップだ。ティアナはコントロールはまあまあ良いがスピードが遅すぎる。だから。」

体に水平に構え握りしめていた五個の小さな石を地面に落とす。
ティアナは構えてあったクロスミラージュから石の数だけの魔力弾を撃つが、石は魔力弾が当たる前に地面に落下する。

「遅いな。少なくとも石が落ちる前に2〜3個ぐらいは当てれるようにしよう。それくらい出来ないと話にならないからな。」

「はい！わかりました！」

再び落ちている石を拾う。ティアナが石に当てれるようになるまでひたすらこの練習をして魔力弾の形成とスピードが速くなるようにする。

スバルの練習方法

「いくぞスバル！吹っ飛ばされずに止めろよ！」

「はい！よろしくお願いします。」

「頼むから死ぬなよ。しっかり防御してくれよ。」

念のためにバリヤジャケットを装着したスバルと対峙した俺は、空手の構えをとり赤龍帝の籠手を装着した右正拳づきを叩き込む。
ゴウツと空気を振動させ主砲のような右正拳が迫る。

スバルは両手を合わせると自身の前に突きだしシールドを展開する。
が、

バキーーーーン!!

「グエッ!!」

乾いた音が響きシールドは一瞬耐えられず粉々になると、右正拳は深々とスバルの腹にめり込んだ。

「おいおい。スバル大丈夫か？これで二十回目だぞ。そろそろ休憩にしようぜ。いい加減休まないと体を壊すぞ。」

「ゲホッ、ゲホッ。すみません。大丈夫ですからもう一度お願いします陸さん。」

足をガクガクと震わせながらも強い意志で立ち上がり笑顔を見せるスバル。俺は後ろ髪を乱暴にかきながらスバルの強情さのため息を漏らす。

しかし、こういう姿は強くなる為に修行していた昔の自分の姿とかぶるためあまり強くは言えない。だからスバルの髪を乱暴に撫でながら説得する。

「あのなスバル。確かに強くなる為には練習は必要不可欠だが、やり過ぎれば逆効果だ。俺達は体が基本なんだから、休むこともまた練習だよ。」

「陸さん……………はい。わかりました。スバル・ナカジマ休憩します。」

元気に答えてベンチまで歩き出すスバルに。

「でも休憩時間は三分だからな。」

「短い！短すぎますよ！せめて五分にしましょうよ？休憩も練習なんですよ。」

「余り休み過ぎても練習にならんだろ。それより早く休憩しなくていいのか？後二分三十二秒しかないぞ。」

残りの時間を聞いたスバルは、「陸さんの鬼、悪魔、人でなし〜〜！」と叫びながらベンチまで走りだした。

そんなスバルを見ながらこれからの練習を考える。

（スバルに足りないものは、防御力とスピードの調整だ。いくらスピードがあってもただ突っ込んでくるだけならカウンターはとれる。カウンターを喰らわない為にもスピードの調整は急務だな。）

ベンチに座って呑気に休憩しているスバルを見ながら、なんとかできるか？と不安がましく見守った。

エリオの練習方法

木々がおい茂る深い森の中にエリオは一人たたずんでいる。

手にしているのは愛用の武器であるストラダー。

目には目隠しを施して視覚を閉ざしながら神経を研ぎ澄まし周に意識を集中しながらストラダーを構えている。

「……………ッ!!」

ゴウツと空気の層を切り裂きながら木々の中から木の実がかなりのスピードでエリオの頭めがけて飛来する。

しかし、エリオは体を僅かに横にずらすだけでこれをかわすと。

ドン!!

木の実が地面に衝突し小さな穴ができる。

エリオが避けたことを確認したのか、次々と木の実が四方八方からエリオめがけて飛来する。

「……………くっ!」

次々に飛来する木の実をエリオは、避けれる木の実は体をずらして避ける。避けれない木の実はストラーダで防ぐ。

「はあっ、はあっ、はあっ。まだまだ、まだ大丈夫。」

次々に飛来してくる木の実を二十分ぐらいかわしまたは迎撃し続ける。だが、まだ子供であるエリオにとっては技術はもちろん、体力も決定的に足りない。ゆえに。

「しまっ……!!」

疲れて足を滑らし体勢を崩したエリオの腹に高速で飛来した木の実が直撃する。

「ガハアッ!!」

エリオが数メートル吹き飛んで倒れる。「ゲホッ、ゲホッ。」木の
実が直撃した腹を触りながら咳き込む。

「エリオ！大丈夫か？」

木々からエリオめがけて木の実を投げていた俺は、地面に降りエリオの傍にしゃがむ。

「やっぱりまだ早いんじゃないか？いくら早く強くなりたいからって、この練習方法は自分で提案しといてなんだか結構危ない。」

俺がエリオに提示した練習方法は。

一つ。四方八方から飛来する投擲物を三十分間回避もしくは迎撃する。

二つ。三十分間以内に投擲物を被弾したら初めからやり直し。

三つ。練習者は必ず目隠しをするけど。

まだ十歳のエリオには体力的に厳しくはあるがなんとかできる。と思っていたがこれが難しい。

「ゲホッ。だ、大丈夫です。まだ練習できます。」

「いや、やっぱり止めよう。次のれーれー」

立ち上がろうとした俺の袖をエリオはギュッと、強く握る。

咳き込み腹を痛がりながらもエリオは強い意志で俺を見つめてくる。

「大丈夫です。陸さん初めからお願いします。」

「……………わかったよ。だが、本当にやばくなったらやめるかな。前にも言ったが、俺達は体が基本なんだから。それにお前になんかあったら俺がフェイトに殺される。」

「はい!!」

笑顔で答えるエリオの髪を乱暴に撫でる。

自分に弟がいたらこんな感じなのかな、と思いながらエリオをたたせる。

「じゃあ、またやるぞ。体が痛いからって手加減はしないからな。」

「はい。!!!!」

エリオは再び目隠しをつけストラダを構える。俺を木々に隠れ気配を殺して自身の居場所をわからなくしてから。

「いくぞ！エリオ。準備はいいか！」

「はい！いつでもきてください!!」

こうしてエリオの練習は続いていた。

キャロの練習方法

ビルが建ち並ぶフィールド、そのビルの屋上に俺とキャロ、フリードがいる。

キャラはキラキラした目で俺を見つめ自分には何を教えてくれるのか期待しているようだ。が

「さて……………どうしよう。」

「ええええええええ！どうしようって今までティアナさんやスバルさん。エリオ君にもアドバイスしていたじゃないですか！！」

「いや、だって、なあ……………あの三人はまだ教えられるところがあつたけど。」

「けど？」

「俺は赤龍帝だけど『本物の竜』に乗った経験はないし、キャラはフルバックのポジションなんだろう？俺はいつも突っ込むからまったくわからないポジションなんだよ。」

何を教えていいのかわからないこと正直に告白すると、キャラは燃え尽きたボクサーのように真っ白になり地面に膝をつけた。

（まるで明日のジ？ーだな。）

心の中で呟いていると、キャラが大粒の涙を流しながらなきはじめた。

いきなりの涙に焦る俺。

「ひどい……ヒック、ひどいですよ。……………陸さん。スバルさん達にはいろいろ……………ヒック教えていたのに。」

「いやいやいやいや。泣くなよキャラ、スバル達をフォローするタ
イミングと敵からの攻撃に対する防御、回避の仕方を教えてやるか
ら。な。」

「ほんとうですか？」

「ほんとほんと。だから泣くのは勘弁して、まるで俺が泣かせて
いるみたいで心が痛む。」

慌てている俺を見たキャラは、はじめはポカンとしていたが目を細
めクスクスと笑いだした。

その光景に俺は安堵の息をもらす。

「それじゃキャラ。まず防御と回避の仕方から教えるから。それじ
ゃあ、まずフリードを本来の姿に戻してから空中に行こうか。俺は
先にいって待っているから。」

「はい。フリードいくよ！ 竜魂召喚！！」

キャラの竜魂召喚を聞くのと同時に、俺は背中から赤い翼を出現さ
せ高速で空中に昇る。

空中で停止していると大きくなったフリードとキャラが上がってき
た。

「いくぞ！キャラ。見事俺の攻撃を防御回避してみろ。悪いところ
はそのつど言うからな。」

「はい！よろしくお願いします！」

赤い閃光となりキャロに接近した俺は至近距離でドラゴンショットを撃ち込んだ。

全員の睡眠方法

「よし。みんな集まれー！もう寝るぞー！ー！」

「「はーい。陸さんわかりましたー！ー。」」「……………」
…はい。」

1日の練習が終わったスバル達は、一度自分達の部屋に戻りお風呂に入ってから俺の部屋に再集合した。そして、そのままみんなでざこねで就寝である。

俺が部屋の明かりを消そうと手を伸ばすと、ティアナが恥ずかしそうな顔をしながら手を上げて挙手をする。

「藤田さんなんでみんなで寝なくてはいけないんですか？説明してください。」

「ああ、わかった。説明しよう。」

みんなを俺の周りに座らせ説明を開始する。

「今はすでに11時30分。明日の起床は朝の4時、いまから就寝したとしても4時間30分しか寝られない。」

「はい。それはわかります。しかし、私が聞きたいのはそうではなく“なんで藤田さんと一緒に寝なくてはならないのか”」そこ聞き

たいんです。

「お前達に俺の能力で元気になってもらうためだよ。」

「能力？陸さんの赤龍帝の籠手のことですか？あれには人を元気にする能力はないと報告書に書いてありましたか。」

ティアナのドヤ顔の説明に頷くスバル達を見ながら「ハァァァッ」と深すぎるため息をつく。

「確かに赤龍帝の籠手にはそんな能力はないが、俺にはもう一つ“時間”を操る能力がある。」

「時間を操る能力ですか？本当にそんな能力あるんですか。」

「ある。って言うかティアナ達はみたことないんだったな。悪い悪い、いま見せるよ。」

空中にディスプレイを展開させ、俺が能力を使っている場面を映す。

「一回目は初めてのリニアール事件のときなのは達を助けに行く為に使い。二回目はホテル・アグスタのときは敵の神滅具使いを倒す為に使っている。」

「確かに使っている形跡があります。確かに。」

「ふえええ。すごいです陸さん。そんなことも出来るんですね。」

「すごいすごい。だからあんな速く攻撃できるんだ。」

ティアナは少しムツとしながら肯定し、エリオとスバルは手放して褒める。

「で、その時間を操る能力の中で俺が『時間加速』と呼んでいる力を寝ているお前達にかけ続ける。」

「『時間加速』をかけ続けると、どうなるんですか？」

エリオの質問に俺はディスプレイを操作しながら説明する。

「『時間加速』は一秒を二秒に三秒にできる能力だ。お前達が寝ている間この力をかけ続ければ、4時間の睡眠を8時間、もしくは12時間にのぼすことが可能になる。これなら睡眠不足で、明日に疲れが残らないだろ。だからやるんだ。」

「陸さん、私達はただ寝ているだけでいいんですか？ なにかするわけではないんですか。」

未知の力が心配なのかキャロは上目遣いで目に涙ため俺の服の袖を軽く握りながら聞いてくる。

可愛い子供がこんな表情で聞いてきたらロリコンなら今すぐ襲ってしまいそうな絶大な威力である。だが俺はロリコンではないので胸がドキドキするだけですんだ。

「別になににもすることはないよ。ただ寝ているだけでいい。」

ディスプレイを消してスバル達を見渡す。エリオとスバルは未知の力にドキドキしている。ティアナとキャロはまだ少し不安そうな表情をしている。

「大丈夫だよ。心配するな。俺は絶対にお前達が困ることはしない。約束する。だから安心して寝てくれ。」

優しく笑いながら語りかけると、キャロは頬を赤くしながら小さく頷く。ティアナも横を向きながらも僅かに頷いた。

「それじゃ、電気消すからな。いいな？」

「「「はい。」」」

まるで遠足にきているみたいだな、と思いつつ電気を消して俺達は眠りについた。

強くなるために（後書き）

次は「模擬戦となのはの想い」です。

模擬戦をどうするのか、これから考えます。

感想がありましたらどんどん下さい。よろしくお願いします。

模擬戦前夜（前書き）

短いです。

相変わらず駄文ではありますが、少しでも楽しんでくれたら嬉しいです

模擬戦前夜

スバル達は昼間はなのはやヴィータ、フェイトにしごかれ夜は俺にしごかれる。

そんな毎日を二週間ほど繰り返した。夜の練習中。

「明日なのはと模擬戦？」

「はい。藤田さん。なのはさんが私達、FWの成長をみたいからと。」

「ふーん。なるほどね。」

喋りながらも俺は持っている石を地面に落下させる。ティアナはクロスミラージュから高速の魔力弾を瞬時に形成し撃ち込む。

バキンバキンバキン

落下して地面に落ちる筈の石の半数以上が魔力弾によりこまかく碎かれた。

「大分ましになってきたなティアナ。コントロールの方はどうなんだ？ 雑になっていないだろうな？」

「大丈夫です。コントロールの方はなのはさんの練習でやっていきます。」

「だったら大丈夫か。」

俺はティアナに近づき髪を優しく撫でる。

「正直お前がたった二週間でここまでやれるとは思わなかった。頑張ったなティアナ。」

「あ、ありがとうございます。」

髪を優しく撫でられるティアナは気持ち良さそうに目を細めてされるがままになる。最近気づいたがティアナは髪を撫でられるのが好きらしい。

「しかし、なのはと模擬戦するなら戦い方を教える必要があるな。」

ティアナの髪を撫でながら、はやてに持たされた簡易型のデバイスをズボンのポケットから取り出す。通信ぐらいしかできないがこれで十分。

「スバル、キャロ、エリオ。明日なのはと模擬戦の戦い方を教えるから練習を中断して戻ってこい。」

「」「はい。了解しました。」「」

通信を終えてデバイスをポケットにしまいスバル達がこちらに到着するをティアナの髪を撫でながら待つ。

ティアナはされるがままに幸せそうな顔をして微笑んでいた。

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

「ーってこんな感じの戦い方でどうだ。なのはに勝つのはいまのお前達じゃあ難しいが、この戦い方なら結構いい線いけると思うが。」

自分が魔導師ならなのはとこんな風に戦う戦法をスバル達に話す。スバル達は真面目に聞き入りウンウンと頷いた。

「わかりました。百戦錬磨の藤田さんが教えてくれた戦い方で明日の模擬戦、戦ってみます。」

ティアナは後ろにいるスバル達三人の方に振りかえる。

「スバル、キャロ、エリオもいい？」

「うん。大丈夫だよティア。私も陸さんのこと信じるもん。いまならなのはさんにだって勝てそうだよ。」

「はい！陸さんに色んなことを教わって、ちょっと前の僕じゃ出来ないことも今の僕ならできる気がします。」

「私も信じられます陸さんのこと。初めはちょっと怖い人だと思っていたけど、この練習ですごく優しい、頼れる人だってわかったから。」

「お前達。」

まるでテレビドラマのような熱い展開が目の前に再現されている。スバル達の熱い思いにおもわず俺も目頭が熱くなる。

「嬉しいこと言いやがって。それじゃあ、みんな明日の模擬戦の為に最後の練習を始める。自分がどれだけ強くなったかこの練習で確かめろ。」

「」「はい。わかりました。」「」

勢いよくジャンプをしてスバル達から距離をとりビルの上に着地をする。スバル達が練習中にシャーリーから教わった通りにデイスプレイを操作する。すると、

「これって、ガジェット？今さらなんで。」

「違うよティア。ガジェットだけじゃない。これって。」

「陸さんが倒している黒いドラゴン（地竜）です！」「……………これと戦えって言うんじゃないですよね？」

スバル達の前に現れたのは黒いドラゴンが三体。みんな明らかに初めて戦う黒いドラゴンにビビっている。いくらデータとは言え戦闘性能はあまり変わらないから当然の反応ともいえる。

「ビビんなみんな！昔のみんなでは勝てなかったかも知れんが、いまのみんななら多少強いかも知れんが倒せるはずだ。自分の力を信じて！」

俺の言葉を聞いたにスバル達はお互いの顔を叩きあう。パーン！つと乾いた音が響きく、スバル達は弱気な自分達の心に活を入れたようだ。

ヴァイス君が親指で指さした方向は練習場がある。なんだかんで子供には優しいヴァイス君にクスクスと微笑んでしまう。

「大丈夫だよ。ティアナ達だって子供じゃないんだから、明日は模擬戦だし無理はしないよ。」

「そうすかねえ。確かにティアナ達だけならあんまり無理はしないと思うんですけど。今回は陸の旦那も練習に参加しているじゃないですか。そこが心配ちゃ心配で。」

「陸君？陸君もティアナ達の練習に参加しているの？いつから。」

自分の知らない情報に驚き、ヴァイス君に更に聞こうとした瞬間。

ドオオオオオオオオオオオーーーーーー。

「な、なにこの音？」

「フェイトさん、これ爆発音ですか？」

私とヴァイス君は耳を押さえながら爆音がした方角に目を向ける。そこには、黒いドラゴン三体と戦うティアナ達の姿があった。

「な、なんで黒いドラゴンとティアナ達が戦っているの？まだ黒いドラゴンに勝つなんて無理だよ。」

「陸の旦那、やることが派手すぎだぜ。」

うんうんと頷いて感心するヴァイス君を軽く叱り、制服の懷からバルデッシュを取り出す。

「いくよバルデッシュ。セッー」

ドンー！！

何が猛スピードで飛来すると私の目の前の地面が爆発する。

私もヴァイス君がごほほと咳き込んでいると、バルデッシュに通信が入り咳き込みながら通信を繋ぐ。すると

『お前達そこから一步も動くな。動いた瞬間にさっきの魔力弾を叩きこむ。』

恐ろしくほど冷たく感情の込もってない声が聞こえてきた。

『あの三体のドラゴンは明日の模擬戦のウォーミングアップだ。心配しなくてもダメなら俺が助ける。だから、手をだすな。……………いいな。』

「でもー」

『でもじゃない。いいから手を出すな。返事は。』

「はい。」

ブッンと通信が一方的に切られる。練習場まで行きたくはあるが、陸君が言った言葉は本当だとわかる。

私達には陸君が見えなくても、陸君には私達がハッキリ見えているのだ。じゃなかったら、五キロ以上離れた場所に正確に魔力弾を撃つなんて不可能。

非常識の塊のような人にため息をつく。そして、私は女子寮に向かって歩き出した。

「ちょっと！いいんですかフェイトさん。あの黒いドラゴンかなり強いんじゃないんですか。今のティアナ達じゃ勝てっこない。怪我するだけですぜ。」

「それは分かるよ。でも陸君は練習場に近づくなんて言ったよ。心配だけど私一人で行っても近づく前にやられちゃうよ。」

「でも、だからといってー！ー！ー！」

『うるさいぞヴァイス！！戦う前から勝てない勝てないと吠えやがって。敗北主義者かお前は！そんな過保護だからティアナ達の成長が遅いんだよ！』

いきなり通信が繋がり、バルデッシュから怒鳴り声をあげて怒る陸君の声が響く。怒りに満ちた声びびって怯んだヴァイス君に陸君は追撃をかける。

『いいかヴァイス。人間にできる、出来ないはない。やるか、やらないかそれだけだ。やる前から諦めたらなにも進めたいし、なにもできんだろうが。』

ヴァイス君は反論しようとするが、うまく口に出来ず沈黙してしまふ。

ブッンとバルデッシュの通信は勝手に切れ私達の周りにイヤな空気が漂う。

私はそんなイヤな空気を払うかのように笑顔を造りヴァイス君に話しかける。

「大丈夫だよヴァイス君。陸君だってなにか考えあつての行動だよ。だから、心配しなくても平気だと思うよ。」

「そうでしょうか？」

私達は再び練習場に目をやりティアナ達の無事帰ってくることを祈った。

フェイトサイト終了

陸サイト

ビルの屋上で必死に黒いドラゴン三体と戦うティアナ達を見ながら冷や汗を流す。

（ヤベーーーー。みんなが怪我したらどうしよう。）

勢いだけでやってしまつて事を軽く後悔しながらティアナの戦いを見守った。

模擬戦前夜（後書き）

次、次こそ模擬戦となのはの思いを書きたいと思います。

感想ありましたらどんどん下さい。よろしく願いします。

感想制限なくしました。今まで知らなかった。残念な人です私は。

模擬戦となのはの思い（前書き）

遅くなりましたが、今年最後の更新です。
相変わらず駄文ではありますが、楽しんでいただけたら幸いです。

模擬戦となのはの思い

ビルが建ち並ぶ練習場のフィールド。

その一角のビルの屋上に俺とヴィータにエリオとキャロが立ち並んで模擬戦の開始を待っている。

模擬戦の一回戦目はなのは対スバル&ティアナ、二回戦目はなのは対エリオ&キャロになる。

「ーで、どうなんだよ陸。ティアナとスバルちったあましになったのか？この頃毎日自主トレしてたんだろ。」

「ましにはなったと思うよ。みんな毎日頑張っていたしな。だが、流石になのはに勝つには、まだまだ練習が足りないから無理だと思うがな。」

ヴィータの質問に答えながら屋上から三キロほど離れた所にいる三人に目を向ける。なのはは白いバリアジャケットを装着、手にはレイジングハートを持っており準備万端。

ティアナのスバルもバリアジャケットを装着して準備万端にいるが、やはり体が固くなっているのが眼にみえる。

（やっぱり緊張しているな、こればかりは慣れないと無理だよな。

……………仕方ない。）

手早くポケットからデバイスを取り出した俺は、あらかじめ用意しておいたメッセージをティアナ達のデバイスに転送する。これですいでも緊張が柔らげばいいんだかな、と心の中で心配する。

「ん？なあ陸、デバイス取りだしてどうしたんだ？なにかはやてか

ら連絡でもあったか？」

「別に、ただ緊張しているティアナ達に一番初めこうしたらいいぞって感じのメッセージを送っただけさ。」

「？一体なにを転送したんだお前は。」

「さてね、なにな。」

言葉をはぐらかして教えない俺に、ヴィータは頭に「????」と疑問符を浮かべながら俺から視線をなのは達に移す。

ヴィータが離れるとキャロは待っていたとばかりにこっそり俺に近づいてきた。

「陸さん、陸さん。なにをティアナ達に転送したんですか？もしかしてラブメッセージですか。」

「アホか。なに妄想を口に出してんだよ。ヴィータにも言ったが、一番初にやることを送っただけだよ。」

「だから、それを教えて下さいよ。」

だっ子のように俺の服の袖を引っ張るキャロを無視して再びティアナ達を見る。

ティアナ達は届いたメッセージを見たのか、一瞬ポカンとしたかと思おうと深呼吸をする。

なのははそんなティアナ達を不思議そうに見ていたが、深呼吸を終えたティアナ達の顔に緊張はなくなっていた。

陸サイト終了

ティアナサイト

藤田さんからのメッセージを見た私はあまりの内容に一瞬だけ時間が止まる。

『模擬戦とはいえないのはと戦うんだから初手をどうすればいいか、なにをすればいいか悩むのは当然だ。だから、まず一発当てろ！それ以外は考えるな。一発当てた後はどうするとか考えるのも無しだ。』

意気込みよりなにをすれば一撃当てられるかを書いて欲しかった。でも、文句は言えない。藤田さんは魔導師ではないのだ。こちらの魔法を使えない藤田さんは基本的に私達とは違う人間なのだ。それでも藤田さんは二週間、私達みんなを鍛えてくれたこと、心配してメッセージをくれたことに感謝しながら深呼吸する。

（大丈夫。藤田さんがあれだけ教えてくれたんだから。あとは自信を持って戦うだけ。）

横を見るとスバルも私を見ていた。私と同じ心境でいるのがスバルの表情でわかる。

「いくわよスバル！！藤田さんが教えてくれたこと、無駄にするんじゃないわよ！！！！」

「わかってるよティア。陸さんの為にも恥ずかしくない模擬戦をし

よう。」

臨戦態勢になった私達をみたなのはさんは。

「それじゃ、模擬戦いくよ。」

こうして模擬戦が開始された。それと同時にスバルは作戦通りにリボルバーナックルを回転させる。地面を殴り爆発で粉塵を巻き上げる。

（スバル、藤田さんから教えてくれた通りにやるわよ。作戦覚えてる？）

（うん！覚えてるよティア。作戦通りいこっか。）

念話で会話しながら、スバルはウイングロードでなのはさんに突貫する。私はクロスミラーージュを構え、突貫するスバルを援護する態勢に入った。

ティアアナサイト終了

陸サイト

ティアアナ達の模擬戦を見ていると、こちらに近づいてくる息づかいと足音が聞こえてくる。

すると、ドアが開き息を切らしたフェイトが入ってきた。

「模擬戦、始まっちゃってる？」

「フェイトか、今はティアナ達が模擬戦している。次はエリオ達の番だな。」

簡単に来たばかりのフェイトに説明する。フェイトは俺の説明を聞くど、ヴィータとなにか話し出す。俺はそんな二人を気にせず再びティアナ達の模擬戦に目を向ける。

「どうですか陸さん。スバルさん達しっかり作戦通りにやれていますか？」

「今のところはな。こっからが正念場だから油断は出来ないがな。」

「そうですよね。……………頑張ってください。スバルさん、ティアナさん。」

無駄に真剣な表情でティアナ達の模擬戦を見て応援しているエリオ。次の模擬戦で自分達がしっかり作戦通りできるか心配しているのがまるわかりだ。

俺はため息をつきながら、エリオの髪を乱暴になで回す。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよエリオ。作戦通り出来なくても怒りはしない。それより今できることを全力でぶつけていけ。」

「陸さん。……………はい。頑張ります。」

「ああ、頑張ってこい。……………お、クロスシフトだな。」

エリオの髪を撫でている間に、作戦は次段階に入ったようだ。スバルがウイングロードで縦横無尽に移動してティアナの足場を作っているなか、ティアナは自分の周囲にオレンジ色をした無数の魔力弾を展開している。

「クロスファイヤーーーーーシューーーーーー！！！！」

ティアナがとなえると、無数の魔力弾は高速でなのはに迫っていく。

「はやい！ティアナあんな速く魔力弾だせたか？コントロールもいいし。いつの間にあんな技術を。」

「わからない。練習の時もあんなに速くはなかったよ。ティアナ、なのはをビックリさせたくてわざと遅くして練習していたのかな？」

ヴィータとフェイトが呑気に話している間にもティアナの放った高速の魔力弾がなのはに迫る。

「ティアナ？いつの間にこんな技術を。」

放たれた高速に一瞬ビックリしたなのはだが、空中で器用に回転、旋回してすべての魔力弾避ける。直後ーーーーー

「うおおおおおおおーーーーー！」

ウイングロードで移動していたスバルがなのはに突貫してくる。右手に装着してあるデバイスから空の葉莢が弾き出され、リボルバーナックルが高速で回転しはじめる。同時にスバルの青い魔力が増

大する。

「シルエットじゃない、本物！」

なのは自身の周囲に展開していた無数の魔力弾うち三発を迎撃の
為うち放つ。

真っ直ぐ向かっていくなのはの魔力弾にスバルはシールドを張らず
ただ突き進む。このまま行けば必ず当たる。だが、

なのは魔力弾がスバルまであと数メートルまで接近した瞬間に、す
べての魔力弾がオレンジ色の魔力により迎撃される。

「えっ！！この魔力弾ティアナが？」

驚いたなのはが魔力弾の発射された方角を見る。が、これが不味か
った。なのはの僅かな隙も見逃すわけなくスバルが突貫して殴りか
かる。

「いけない！レイジングハート。」

「はあああああああー！ー！ー！ー！！！」

咄嗟にシールドを張ってなのははスバルの攻撃を防ぐ。

数秒間、なのはとスバルの激突が続くとスバルは、自分から攻撃を
外してウイングロードから外れて下のウイングロードに着地した。

陸サイト終了

スバルサイト

「危ない、危ない。陸さんの言い付け忘れるところだったよ。」

ウイングロードで移動しながら昨日聞いた陸さんの話を思いだす。

『いいか、スバル。なのはの必勝パターンは相手の動きをバインドを止めてからの砲撃による撃墜が一番高い。だから、もしなのはに攻撃が止められたら数秒で引いて体勢を立て直せ。捕まったら終わりだ。いいな？』

思いだしながら私は陸さんに言われた通りなのはからできるだけ距離を離す。

スバルサイト終了

なのはサイト

「おかしいな。スバルあんな動き教えていないはずなんだけど。……もしかして。」

離れていくスバルの姿を見ながら陸君のことを考える。

（陸君が、この頃毎日夜遅くまで練習していたのはわかってる。この頃少し疲れた表情もしていたけど、まさか、今日の模擬戦の為に

ティアナ達を鍛えていたのは知らなかったよ？)

口では「めんどくさい、嫌だ。なんで俺が。」なんて言いながら、なんだかんだでティアナ達に優しい陸君に心の中で苦笑する。すると、ティアナのオレンジ色の高速の魔力が飛来する。

「速い。それに。コントロールもいい。」私は瞬時に飛来するティアナの魔力弾と同じ数の魔力弾を造り迎撃する。

ドンドンドンドンドン

小規模の爆発が発生する。

私はティアナの魔力弾を全て相殺したと思い離脱したスバルを探す。だが、甘いかった。相殺しきれなかった二つのティアナの魔力弾が私目掛けて飛来する。

「うそっ！なんで？確かに同じ数の魔力弾で相殺したはずなのに。」

シールドを張ろうとするが間に合わず二発の魔力弾が私に直撃した。

なのはサイト終了

ティアナサイト

なのはさんに二発の魔力弾が命中して小爆発が発生した。その光景に私は藤田さんの言葉が正しかったことを思いだし確信する。

『なのはは攻撃をあまり避けない。まあ、なのはのスピードはフェイトほど速くないし、自分の防御力に自信があるのかも知れないな。しかし、戦闘の基本は回避だ。ティアナはなのはに見えないように、魔力弾を二発連続で放てそうすれば必ず直撃する。必ずだ。』

煙が晴れてなのはさんに私の位置がバレてしまう前に、近くあるビルの影に隠れながら速足で移動する。これも、藤田さんに教わったことだ。

『いいかティアナ。スバルと違いティアナは移動が遅い、遅すぎる。正直ティアナには射撃だけでなく高速移動の練習もしてほしかった。チーム戦ならティアナのポジションは周り全てが味方だから動く必要はあまりないかもしれない。だが、今回は個人戦にちかい。故に、攻撃したあととすぐに隠れ、なのはに見つからないように移動しろ。なのはも馬鹿じゃない、すぐに攻撃した位置を割り出す。その前に移動すること、いいな。』

ビルの影に隠れながら常になのはさんの姿が見えて、なのはさんからでは見にくい場所に移動する。

（このまま押しきるわよ。いくわよスバル。）

（うん。任せてよティア。）

スバルと念話で連絡すると、私は再びクロスミラーージュをなのはさんに向けた。

ティアナサイト終了

陸サイト

（作戦通りに上手くいっているように見えるが、………ここまでのな。）

両隣で模擬戦を感心しながら見ているフェイトとヴィータには悪いが展開が読める。模擬戦も始まって十分が経過した。ティアナ達は確かによくやっではいるがここまで、なのはは攻撃を食らいながらもティアナ達の僅かなミスに気づき潰していく。

小さなゴミでも積もればなんとやら、初めは押していたティアナ達だがいまでは完全に押されている。

「ティアナ達初めは頑張ったけど、なんだろう？何処と無くきこちない動きだね二人共。」

「そうだな。誰に教わったんだあんな動き。なんにしても教えかたが雑だなあの動きを教えた奴は。人に教えるのに向いてないだろ。」

「それはすいませんね御二人様。何せ人に教えるのは初めてだから、上手く教えることができなかったよ。」

「「ええっ！！？？」」

「おい、今の驚き方はかなり失礼な気がするぞ。」

驚きの声をあげる二人を睨むような眼差しを向ける。

「だって、前に私が“陸君の世界の戦いかたを教えて欲しい”って

お願いしたら。「やーだよ」って言ったから逃げたし。」

「そうだよな。そんな陸がなんでティアナ達に戦いかたを教えんだ？」

「なんでって、弱いんだから当然だろ。」

近くいたエリオとキャロの髪を優しく撫でながら答える。

「前にも話したが俺はお前達に死んでほしくない。フェイト達に俺の世界の戦いかたを教えないのは無駄だからだ。」

「どうして無駄なの？」

「お前達ぐらい年齢でいきなり戦いかたを変えて戦うのは無理がある。たとえ出来たとしても時間がかかる。それでは、かえって危ないからだよ。」

「……………」

模擬戦を見ると、なのはの巧みな攻撃で一ヶ所に集められたティアナ達にバインドがかけられて拘束されている。

「あちゃあ、これは決まったな。」

ティアナ達はバインドを剥がそうと魔力を上げるが、その前になのはの砲撃がティアナ達に直撃した。二人は派手に吹き飛んだあと地面に墜落する。二人はそのまま動けずティアナ達の模擬戦は終了した。

その後のフェイト対エリオ&キャロの模擬戦、ティアナ達

と同様に初めはフェイトを押していたエリオ達だが、時間が進むにつれ少しずつ押され初め最後は砲撃で吹き飛ばされて、模擬戦が終了した。

――――――――――

「陸さんどうでした僕の戦いかた、しっかり出来ていましたか？」

「まあまあだな。あまり練習する時間がなくて付け焼き刃だったが、上出来だ。さらに練習を重ねればフェイトにも勝てるだろう。」

「陸さん。私、私はどうでした？陸さんの言った通りエリオ君を上手く援護出来てましたか？」

「うーん。初めは良かったけど、途中から息があっていない場面がちらほらあったな。お互いもっと仲良くして息が合うように練習しよう。」

「私はどうでしたか？。陸さんの言った作戦通りに戦いましたけど。」

「スバルはもう少し臨機応変に戦うことを心がける。相手が作戦通りに負けてくれるハズがないんだからな。」

模擬戦が終了してなのは挨拶が終わると同時に、俺に向かって走ってきたエリオとキャロ、スバル。そしてティアナがゆっくりと歩き俺の正面にたつ。

「私はどうでした。なにか悪いところはありませんか？」

その表情は、まるで幼い子供が初めてのテストを親に見せる、そんな緊張と恐怖が入り雑じった表情だ。

そんなティアナに俺は、

「よくやったなティアナ。お前が一番よくやったし、頑張ったな。えらい、えらい。」

右手でティアナのさらさらの髪を優しく撫でながら答える。

俺の言葉に、ティアナはひまわりのように明るく笑顔をつくる。

「はい！ありがとうございます。兄さん。」

「兄さん？俺が？」

無意識で言ってしまったのか、顔を真っ赤にしてうつ向くティアナに。

「いいぜ、別に。ティアナの呼びやすいように呼んでくれ。」

「は、はい。ありがとうございます。そ、それじゃ、これらは兄さんって呼ばせてもらいます。」

俺とティアナが話していると、キャロが俺の服の袖がクイクイっと引っ張る。

「ティアナさんばかりずるいですよ陸さん。私も一生懸命頑張ったんだから、私もこれから“お兄ちゃん”って呼んでいいですか？」

「あ、ああ、別にかまわないが。」

「ありがとうございますお兄ちゃん。エリオ君はどうするの？呼び方変えないの？」

「えっ！ぼ、僕は別に。」

いきなり話を振られて焦るエリオに、余っている左手で頭をぐしやぐしやに撫でる。

「遠慮すんなよエリオ。エリオも今まで頑張って練習したんだから。好きなように呼んでいいぜ。」

「わ、分かりました。それじゃ、“師匠”って呼ばせてもらいます。………いいですか？」

「ああ。でもまあ、まだ師匠って呼ばれるほど強くないけどな。」

苦笑いでエリオに答える。すると、スバルが後ろから首に手を回し抱きつく。

「私はギン姉と同じで陸兄って呼ぶね。前から兄さんが欲しいって思ってたんだ……。これからもよろしくね陸兄。」

「わかった、わかったから離れろスバル。」

首に抱きついているスバルを回転して振り払おうとするが、「きやゝゝ」っと可愛らしい悲鳴をあげるだけで全く離れようとしなない。さらに回転の速度を上げようか迷っていると、エリオとキャロが両腕にしがみつき笑い声をあげる。

（やれやれ、みんなまだまだ子供だな。……………違うかみんなは、まだまだ子供なんだよな。）

ティアナにスバル、エリオにキャロ、それぞれの顔を見る。四人共、今は楽しく笑っているその笑顔を守る、その決意を改めて誓いみんなを眺めていると。

（ん、なのは？泣いているのか？）

俺達の光景を眺めていたなのはが、悲しい顔をしたまま走り去っていった。

……………

「やれやれ、今日は疲れたな。見てるだけでなにもしてないけどな俺。」

夜、今日も俺と一緒に練習したいと言い張るティアナを寝かせ（気絶）ると、日課の自主トレをするため練習場に向かう途中。

（なのはか？なにやってるんだあんな場所で一人で座り込んで？）

木に背を預けて座り込んでいるなのはを発見。

（そういや模擬戦の後なのは、泣きながら走り去っていったな。なにか泣くほど嫌な事でもあったか？）

うーうーんと、朝から夜までの行動や発言を思い出すが何も心あたりがない。

分からない事考えていても仕方がない。故に俺はなのはに直接理由を聞くために、なのはの所まで歩く。

「よっなのは！隣座っていいか？」

「り、陸君！どうしてここに？べ、別に座るのは構わないけど。」

「悪いな。」

ドカリとなのはの隣に座る。そのままお互い話さないまま数分が過ぎると、重たい空気に耐えられないのかうつ向きながらなのはがおもむろに話し出す。

「陸さん、私今の仕事向いてないのかな。」

「……………なんでそう思うんだ。向いてないことはないと思うぜ。ティアナ達だってそう思っているはずだ。」

いきなり何を言っているんだ的な目で、なのはを見る。なのはは下を向き顔は見えないが、震えた小さな声で喋りだした。

「……………から」

「なんて言ったんだ？悪いがもう少し大きい声で言ってくれ。」

「ーーーーばかりーから。」

「だから、もう少し大きい声で言ってくれ。小さい声じゃよく聞こえん。」

俺が聞き直すとなのははガバツと顔をあげる。可愛らしい瞳が真っ赤になっており、目元には涙の後まである。さっきまで泣いていたのがまるわかりの表情だ。

「だって！ティアナ達みんな私じゃなくて貴方ばかり頼りにしているから！！だから……わた……し、ヒック……いまの……しごと、ヒック……向いて……ないじゃないかって……ヒック不安で。ううう……」

言いながら声を殺して泣きじゃくるなのはの姿はまるで小さな子供だ。

俺は後ろ髪を乱暴に搔くと、なのはを抱き寄せた。

そして、泣きじゃくるなのはの髪を優しく撫でる。小さな子供を宥めるかのように何度も何度も優しく撫でる。しばらく撫でていると泣きやみ落ち着き始めたなのはに俺は話す。

「大丈夫だなのは。みんなには俺よりお前が必要だ。俺が保証する。だから泣き止め。」

「どうして、そう思うの。」

「当たり前だ、俺はしょせん素人だぞ。ティアナ達を立派な魔導師に育て上げるなんてできるはずないだろうが。」

「でも、貴方ならー」

「出来ねーよ。たとえ出来たとしても、それはもう魔導師じゃなくなってる。ただ戦うことしか出来ない人間になっちゃう。それがティアナ達の目標じゃねーだろ。」

昨日までティアナ達に教えた練習方法は、確かに俺の世界の練習方法だ。だか、あくまで超基礎的な練習方法の一つにすぎない。それに、どうせなら俺の世界の技術となのは世界の魔法が合わさったティアナ達が見たいのだ。

「そうだけど、でもー」

「でもも、へちまもねーよ。ティアナ達の目標は人を助けることだろ。戦うことを手段に過ぎない。だからこそ、ティアナ達には俺となのはの力が必要なんだろ。」

「私の力？」

なのはは自身の手を見つめ握りしめる。

「この世界の魔法は人を傷つける事より、人を助けることに向いている。犯人に傷を負わせず気絶させて逮捕する。俺の世界じゃ考えられない事だよ。スゲー立派だと思うよ。」

元いた世界を思い浮かべながら、さらに話す。

「でも、神滅具が現れて人傷つけず犯人を捕縛するのは至難だ。だから、この世界で一流魔導師であるなのはの力と、俺の世界の技術

が合わされば、神滅具にも抵抗できる。その結果、より多くの人を助けることにも繋がる。違うか？」

抱き寄せたままの姿の為か顔は見えない。俺の言い分にまだ少し納得できずにいるのはだか、少しずつ元気になっていくのがわかる。

「俺となのはや機動六課のみんなでティアナ達を正しく導いていくんだ。それが出来るはずなんだ俺達には。」

「……………うん、わかった。やってみるよ！ティアナ達が正しい魔導師になれるように一生懸命頑張る。だから、陸君もフォロー宜しくね。」

俺の胸から上目遣いで微笑むのはは、誰もが恋に落ちるような眩し微笑みだった。なのはの声に覇気が戻ったことに安心する。若干間違っではいるが。

「でも、あんまり無茶はするなよ。最近あんまり寝ていないだろフエイトとヴィータが心配してたぞ。もちろん俺も心配したが。」

「にやはは、大丈夫だよ。私全然無茶なんてしてないもん。みんな心配し過ぎだよ。」

笑顔で答えるなのはに、はあっとため息をつく、今度は乱暴に撫でます。

「いいから休んでおけ。いい大人がこれ以上みんなに心配かけんじ

やねーよ。わかったな。返事は？」

「……………うん。了解しました陸君。高町なのはこれより休息に入ります。」

「おう。ゆっくり休め。お前はもっとみんなに頼っていいんだからな。」

「うん。ありがとう。」

優しい笑顔を見せるなのはに、俺はサイドテールになっているのは髪をほどこきロングストレートにする。

「お前は泣いているより笑顔でいた方が可愛いぞ。そして、髪はストレートの方が俺は好きだな。似合ってるぞ。」

「ほえっ!!??」

ポツと、一瞬でリングのように顔を真っ赤にしたなのは。いきなり、真っ赤になったなのはに心配の声を出す。

「どうしたなのは? いきなり顔を真っ赤にして、風邪でも引いたか。夜風は寒いからな、体調が悪いなら俺が部屋まで送るが?」

「だ、大丈夫、大丈夫。体調は悪くないから。それじゃ私もう行くね。」

早口で喋ったなのはは、俺から離れると立ち上がり、すごいスピードで走り去った。

「なんなんだ一体。」

一人残された俺は、走り去ったなのは背中が見えなくなるまで見つめてから練習場に歩きだした。

陸サイト終了

なのはサイト

（反則だよ。あんな顔）

陸君から逃げたした寮の部屋に戻るなり、ベットに倒れこんだ。
今さっきの陸君の顔を思い出すと、また顔が真っ赤になっていくのがわかる。

（あんな子供みたいな笑顔で言われたら私。）

ドキドキする胸を両手で押さえる。

好きだって言われたのは初めてではない。小中学生の時から、知らない

男子からよく言われた告白セリフ。

そして、知らない人から“好きだ”と告白されるより、さっきの陸君の“好きだ”と言われた方がとても嬉しくて涙が出そうになった。
ユーノ君やクロノ君じゃ感じ事のない感情。

（でも、陸君のことだから深い意味はないと思うだけど。それでも嬉しかった。すごく。）

私は目を閉じて眠りにつく。今ならとてもいい夢が見れる、そんな

感じがしたから。

模擬戦となのはの思い（後書き）

次は、ルーテシアです。

今年は、ありがとうございました。

来年も宜しくお願いします。

ルーテシア（前書き）

新年初めての更新です。今回は短いですが、少しでも楽しんでくれたら嬉しいです。

ルーテシア

ミッドチルダ公園

「ほら、買ってきたぞ。」

俺はベンチまでかけ戻ると、たこ焼き屋で買ってきた箱を手わたす。ベンチで座っていた女の子ルーテシアは嬉しそうに目を細める。

「ありがとう。陸お兄ちゃん。」

休日。昼下がりのミッドチルダの公園、燦々と太陽の日射しが降りそそぐ中二人は再び出会った。陸はどっかりとルーテシアの隣に座り財布の中身を確認するとガックリと肩を落とす。

（管理局からの給料、以外と少なすぎるんだよな。このごろ、ティアナ達の練習も手伝っているんだから、あと少しぐらい増やしてくれてもいいのに。）

心の中でケチな管理局に愚痴りながら横目でルーテシアを見る。さっそく俺が買ったたこ焼きの箱を上げて、つまようじでたこ焼きを掬い、口に運んでいく途中、べちゃっと音をたてたたこ焼きが落下。

「あうっ。」

ルーテシアに軽く悲鳴をあげると、申し訳ない伏し目がちな顔をしながら俺を見る。

「いいよ。別に気にすんな。」

「うん。ごめんなさい。」

軽く手を振りながら怒っていないことを意思表示すると、ルーテシアはホッとした表情をつくると再び、たこ焼きと格闘し始める。微笑ましいルーテシアを尻目に、俺は気持ちを切り替える。

ティアナ達の模擬戦から一週間が経過した。

あの模擬戦からティアナ達と俺の関係は良好になった。少し前までは「藤田さん」と呼んでいたのが今では「兄さん」と呼ぶようになった。なのはもあの夜から「陸君」ではなく「陸」と呼び捨てて呼ぶようになり、やたら近づいてくる。

考えていると横から聞こえてくる「あうっ。」と言う悲鳴と、べちゃ、というたこ焼きが落ちた音が聞こえてくるがあえて無視してこれからのことを考える。

未だに見ない神器使いにロンギヌスを所持している神器使い、白龍皇はともかく霧が発生したことから「絶霧」。黄金の戦斧の「獅子王の戦斧」のロンギヌス使いは確実に敵だな。

管理局には俺しか神器使いがいないんだ。敵にどれぐらいの神器使いがいるのか、なんとか少しでも敵の戦力の手掛かりを――

「あうあっ」

「さっきからお前は一体何個たこ焼きを落としてんだよ。」

思考を止めて地面を見ると、たこ焼きが無残にも三個地面に墜落しており、ルーテシアは一つもたこ焼きを口に運んだ様子がない。

ルーテシアは暫く地面に落ちたたこ焼きを眺めたあと、真面目な顔

を作った。

「陸お兄ちゃん。私の口からたこ焼きが逃げます。まだたこ焼きの中のココが生きている可能性がー」

「ないよ！そんな可能性は。ちょっと貸せ。」

俺はたこ焼きの入った箱を奪うと爪楊枝で一個を刺すと、無理矢理ルーテシアの小さな口に放り込む。

ルーテシアは一瞬驚いた顔をしたが、のそのそと咀嚼し始めると頬の表情筋が緩み幸せな顔になった。

「陸お兄ちゃん、もつとください。」

ルーテシアは半分ベンチから身を乗り出しながら目を閉じて小さな口を開ける。

「ああ。わかったよ。」

返事をしながら、彼女の口にたこ焼きを刺しを入れようとすると、まるでルーテシアからキスをせがまれているようで内心ドキドキしたが、どちらかというと猫の餌付けに近い感覚だと思い直す。

ひよいぱく、ひよいぱく、と食べていくことに幸せなオーラを発して弛緩するのが面白くなり、きずけば自分のたこ焼きもルーテシアにあげてしまった。

「ん。ルーテシア、ちょっとじっとしてろよ。」

俺はハンカチをとりだしソースまみれになった口を拭こうとすれど、

ルーテシアは眼を細め顔を上げ、俺のされるがままになる。

なぜだか、不思議と心が温かくなる。

一つのベンチに仲良く座り、女の子の口拭こうとする光景はどのように見えるだろうか？仲の良い兄弟に見えるだろうか？

少し離れた腰に手を当て、ルーテシアの小さな口を優しくふき。よし綺麗になったと一つ頷くと、ルーテシアは目を開けて呟く。

「陸お兄ちゃん。私は陸お兄ちゃんのが好きです。大好きです。」

「はい？なにいつてんだよ。いきなり。」

いきなりの告白に、多少たじろぐがルーテシアはかまわず喋りだす。

「私、こんな幸せな気分になれたのは生まれて初めてです。」

「生まれて初めて？この程度のことがか？」

「はい。いままでの私にこんな幸せな時間はなかったから。」

「……………なあルーテシア、お前今どこにすんでいるんだ？親はいるのか？普段なにしてるんだ？お前のこと、もっと教えてくれないか。」

「それは……………」

ルーテシアと合うのはこれで三回目になる。修行が終わると、なぜか最近になってもらったばかりデバイスに通信が入り呼び出される。

前回は遊園地にいき、前々回は動物園に行った。

ルーテシアは俺と一緒にいるのが楽しくてしょうがないのか、ずっと笑顔でいた。俺はそんな彼女の笑顔が嬉しかったが、「私と会っていることは内緒だよ」と指切りをしたのでなのは達にも彼女の事は話していない。

「なあ、ルーテシアー」

話し掛ける前に、彼女のデバイスが震える。デバイスに届いた名前をみた彼女が悲しい顔に変わる。

「どうかしたのか？何か良くない事でもおこったのか。」

心配になりルーテシアに手を伸ばすと、彼女はそれをするりと抜けてベンチから飛び降りる。

「陸お兄ちゃん、私用事が出来たからもう行きます。今日はありがとうございました。」

軽くお辞儀をして走りだすルーテシアに、不安になった俺は走り彼女の前に回り込む。が、彼女の周囲に魔法陣が展開され彼女の体が徐々に薄れて消えてしまった。

「また会おうね。陸お兄ちゃん。」

木々の間から彼女の声が聞こえ、俺はしばらくその場所から動けずにいた。

陸サイト終了

ルーテシアサイト

移動した場所には白衣をきた男性、ドクターがいる。

「すまないねルーテシア。レリックが見つかったのですね。連絡させてもらったよ。………おや、どうかしたのかい？」

「なにが？」

「いやいや、ずいぶん機嫌が悪いと思ってね。何か嫌な事でもあったのかい？」

「別に、なにもない。それよりレリックが発見された場所を教えてください。」

「ああ、わかったよ。」

ドクターの説明を聞きながら、私は別の事を考える。私は自分が欲しいレリックを手に入れたら、ドクターにしばらく遊びたいから自由が欲しいと言うつもりだ。

ドクターには恩がある。だから、あまり無理は言いたくない。

でも、陸お兄ちゃんに、なにも言わないでこの場所から居なくなることはイヤだった。

（今度は、一緒に何処にいくのかな？映画館？レストラン？まだ早いけどプールでもいいかもしれない。）

不思議な人だった。まだ数える程しか会っていないのに彼のためな

らなんだってしてあげたいそう強く思ってしまう。

彼の笑顔を見ると心が温かい。なんだってしてあげたい。

「――こんなところだが、わかったかいルーテシア。」

「うん。それじゃ、行ってくるね。」

ドクターの説明が終わり、私はレリックが発見された場所に行くため再び魔法陣を展開した。

ルーテシア（後書き）

次回は機動六課VS神器使い です。

感想がありましたらガンガンください。宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9169t/>

魔法少女リリカルなのは StrikerS 現れた赤龍帝

2012年1月5日11時13分発行